

靈界物語 第七五卷 天祥地瑞 寅の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十五卷』天聲社

1984(昭和59)年03月03日 八版發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

~~~~~

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 たまのしんげふ  
玉野神業

第一章 みそぎ  
禊の神事 しんじ  
〔一八九五〕

第二章 ことたま  
言靈の光 ひかり  
〔一八九六〕

第三章 玉藻山たまもやま（一八九七）

第四章 千條ちすぢの瀧たき（一八九八）

第五章 山上さんじやうの祝辭しゆくじ（一八九九）

第六章 白駒しろこまの嘶いななき（一九〇〇）

第二篇 國魂くにたましゆつげん出現

第七章 瑞みづの言靈ことたま（一九〇一）

第八章 結むすびの言靈ことたま（一九〇二）

第九章 千代ちよの鶴つる（一九〇三）

第三篇 眞鶴まなづるの聲こゑ

第一〇章 祈いのり言こと（一九〇四）

|      |                                   |
|------|-----------------------------------|
| 第一一章 | 魂反し <small>たまがへ</small> （一九〇五）    |
| 第一二章 | 鶴の訣別 <small>つる わかれ</small> （一九〇六） |
| 第一三章 | 鶴の訣別 <small>つる わかれ</small> （一九〇七） |
| 第一四章 | 鶴の訣別 <small>つる わかれ</small> （一九〇八） |
| 第一五章 | 鶴の訣別 <small>つる わかれ</small> （一九〇九） |
| 第一六章 | 鶴の訣別 <small>つる わかれ</small> （一九一〇） |

第四篇 千山萬水せんざんばんすゐ

|      |                                      |
|------|--------------------------------------|
| 第一七章 | 西方の旅 <small>にしがた たび</small> （一九一一）   |
| 第一八章 | 神の道行 <small>かみ みちゆき</small> （一九一二）   |
| 第一九章 | 日南河 <small>ひなたがは</small> （一九一三）      |
| 第二〇章 | 岸邊の出迎 <small>きしべ でむかへ</small> （一九一四） |
| 第二一章 | 岸邊の出迎 <small>きしべ でむかへ</small> （一九一五） |

第二章 清淨潔白（一九一六）

第二三章 魔の森林（一九一七）

~~~~~

序文

本卷は太元顯津男の神、玉藻山の聖場に坐しまして、國土生み御子生みの神業を完成し給ひ、禊の神事を諸神と共に嚴修し、日南河の激流を渡りて、八柱の神に迎へられて再び禊の神業を終り、柏木の森の曲津神を言向和すべく、轡を竝べて進み給ひし段までの物語なり。

本卷はその發端を十一月一日に書き始めたが、エスペラント全國大會や、西南の旅行や大祭、歌碑除幕式及び末女の婚禮、舍弟の歸幽等にて寸暇なきまま漸くにして本日完成を告げたるなり。

文中に曲津見の神とあるは邪神にして曲津日の神にあらず。曲津日の神はその

曲津見の罪を照し譴責め給ふ神の職掌なれば、同視せざる様注意し置くものなり。

昭和八年十一月三十日 舊十月十三日

於水明閣 口述者識

總説

大虚中に の言靈鳴り鳴りて、遂に皇神國と皇の極元を成就し給へり。吾人が此の極元の を明に知り得むと欲する時は、朝夕齋戒沐浴して鞠躬謹慎しつつ、可成的智慧證覺を満天に豊満せしめて、智慧の力を以て至大天球を一呑し、以て之を腹中に收めて眞空之定に入り、而して觀じ見る事三日三夜、空中の言を聽く事三日三夜、空氣を嗅ぐ事三日三夜、以て精神を練り鍛ふ時は、如何なる愚者と雖も應分の智慧光を得べし。其智慧證覺光を資力として、以て の謂れを聽く事を得べきなり。

故れ撒霧に撒霧たるの機の一極に純窒て、至大浩々恆々たるの時に當りて、其兩極端に於て自然の理として對照力を起すなり。實に天之峰火の神が雙手を等しく差出して對照し給ふ形なり。誠に億々兆々萬里の距離を兩掌に貫き保ちたるの義なり。是と同時に北と南の兩極端にも此の對照力が起りつつ、衝々に六合八角八荒皆悉く其兩極端に等しく此の對照力を起して、至大浩々恆々の至大氣海浩々の外面を全く對照力にて張り詰むるなり。而して此時始めて球の形顯はる也。蓋し球と言ふ二聲の靈は、對照力が全く張り詰めて成り定まりたりと言ふの義なり。

復た此の至大天球を全く張り詰めたる億兆劫々數の限りの對照力は、皆悉く兩々相對照して其の中間を極微點の連珠絲にて掛け貫き保ち居るなり。此の義を聲に顯はして「對照」「掛貫力」「全く張り詰め玉と成る」といふなり。故れ此の至大天球は極微點の連珠絲なる神靈分子を充實して以て機關とし、活機臨々乎として生きて居る也。此の義を稱して一言に「神靈活機臨々」と言ふ也。復た其膨脹焉として至大熙々たる真相を一言に「至大熙々」と言ふ也。復た其造化の機が運



行循環しつ居る義を稱して一言に「循環運行」と言ふ也。故に此のタカマガハラと言ふ六言の神靈機を明に説き明かす時は、天地開闢の秩序を親しく目撃したる如く聞く者の心中確乎として愉快に感得するに至るべし。嗚呼言靈の幸ふ國、言靈の照り渡る國、言靈の生くる國よ。故れ斯の如く球の形備はる時は、其中心部に不動力備はり、自定力と約力起り來るなり。

故れ斯く至大天球成り定まりて、其内部は極微點の連珠絲が綸々として比々聊々誠に正しく織機よりも眞整しく組織實相しつ、浩浩湛々恆々として充實しつ、神々靈々活機臨々として極乎たる也。此の事實を僅に十四聲に約示て、タカマガハラニカミツマリマスと言ふ也。此の十四聲の意義は、「至大天球之中」に「神々靈々活機臨々兮極微點連珠絲」充實實相而「在矣」と言ふ也。故に此の十四聲の言靈を詳細に説明する時は、義理判然として誠に愉快極まり無きなり。

天祥地瑞第三卷寅の巻口述の初頭に當りて、吾人は爰に大神天之烽火夫の神の御神命の起原と御活動と御名義に就て略解を試み、讀者の參考に資せむとするなり。

天之烽火夫の神 アマノミネヒオ

【ア】は大本初頭の言靈と顯はれ出で、世の中心となり、世の本質と生り出づる言靈なり。又無にして有なり、天にして地なりの言靈活用なり。

【マ】は全く備はりて一の位に當り、一之精體にして廻り圍む言靈なり。

【ノ】は天賦の儘に伸び延び支障無く、産靈の言靈なり。

【ミ】は靈にして又體なり、玉となり、屈伸自在なり、産靈の形を現はし、モイの結晶點なる言靈なり。

【ネ】は聲音にして納まり極まり、根本にして一切を收むる言靈なり。

【ヒ】は光り暉き、最初大本の意にして、靈魂の本體なり。太陽の元素となり、月の息となる言靈なり。

【オ】は興し助くる言靈にして大氣大成の活用あり。先天の氣にして億兆の分子を保ち出入自在なる義なり。

之に依りて、天之烽火夫の神の如何なる神格を具有し給ふかを推知すべきなり。

その他たかみがみ神々の御名みなによりその御活動ごくわっどうの情態じやうたいを伺うかがひ知るには、何れも言靈學ことたまがくの知識ちしきに依よらざるべからず。

吾人ごじんは今後こんごの物語ものがたりに於おいて、次つぎ次つぎに言靈學ことたまがくの大要たいえうを示しめさむとするなり。

昭和八年十一月一日 舊九月十四日

於水明閣 口述者識

第一篇 玉野神業

第一章 禊の神事（一八九五）

我が神國には、大虚中に、の言靈より生れ出で給ひし天之峰火夫の神の、聖代より今日に至るまで傳來せる禊の神事あり。此の神事は紫微天界の神々と雖も一日も怠り給ふ事なく、今日に及べる主要の事柄なり。抑禊は大にしては治國平天下となり、小にしては修身齊家の基本たり。而して禊にも種々の方式傳はれり。吾人は是より諸種の「みそぎ」に就て略述せむとす。

禊に關する行事の内にて最も至要なる神事は振魂の行事なり。之には種々の方式あれども、普通の場合には、兩掌を臍あたりの前方に於て十字形に組み合せ、渾身の力を籠めて神名を稱へながら、自己の根本精神を自覺して、盛んに猛烈に數十分乃至數時間連續して全身を振ひ動かす行事なり。神代の禊には神々何れも

あまのみねひを  
天之峰火夫の神の御名を稱へ奉られたるが、  
げんだい  
現代にては吾人の禊には天の御中主  
おほかみ  
之大神の御名を稱へ奉るなり。

此の振魂の行事に由りて、精神内包の妄念邪想を鎖鎖すると共に、身體各部の  
はんたいてきこりつてき  
反對的孤立的の活動を制御し、自己の根本精神を中心としたる全身の統一的活動  
を爲すなり。禊の間は日々の食事を減じて、朝夕に一合の粥と三粒の梅干、少量  
の胡麻鹽以外一切を食せざるも、全く自己の根本精神（本守護神）に對する全身  
の抵抗力を減殺し、偏に心身の統一を計るに便ずる用意なり。然るに身體は其減  
食のために、疲れ又は病み困難に陥るといふ心配はなし。内部の根本精神が興奮  
緊張の度を増し來る故に、却て元氣全身に充足し、頭腦は冷靜明快となり、全身  
爽快にして神の氣分漂ふ。内省して疚しき罪穢もなければ、假令百千萬の強敵現  
はれ來るとも恐れず、大海高山を突破し、宇宙を吞吐する氣概勃發して、一合の  
粥以外に何物をも食せずと雖も、更に飢餓を覺ゆる事なし。恰も自己は神代の昔  
に蘇りたる心地となり、日本民族の自性を明瞭に感得するに至るなり。

次に天の鳥船と稱する禊の神事あり。之は神代の神々が天の鳥船に乗り給ひて

大海原を横ぎり給ひし大雄圖を偲びつつ、渾身特に臍の邊りに力を込め、氣合と共に艦を漕ぐままの動作を百千回反復する行事にして、運動夫れ自身に價値あるのみならず、之に依りて氣合術の練習も出來、不知不識の間に衆心の一和する襖なり。

次に雄健の襖あり、生魂、足魂、玉留魂、大國常立之尊の神名を唱へつつ、天之沼矛を振りかざして直立不動の姿勢を構ふる行事なり。即ち、一に直立して左右の兩手を以て帶を堅く握り締め、拇指を帶に差し「生魂」と唱へつつ、力を全身に充足して腹を前方へ突き出し、體軀を後方に反らせ、二に「足魂」と唱へつつ、力を全身に充足して兩肩を擧げ、然る後、腰、腹、兩足とに充分の力を込めて兩肩を下し、三に「玉留魂」と唱へつつ、更に力を兩足に充足して兩の爪先にて直立し、然る後強く全身に力を込めて兩の踵を下すなり。四に左足を一步斜前方に踏み出し、左手はそのまま帶を握り締め、右手は第二第三指を竝立直指し、他の三指は之を屈し（之を以て天之沼矛に象る）之を腦天に

構へ、眞劍以上の勇氣と覺悟とを保持する行事なり。要するに雄健の袂は、神我一體聯想の姿勢なり。

次に雄詰の袂あり。雄詰といふは神我一體として、禍津見を征服し、之を善導神化する發聲なり。雄詰は「イーエツ」といふ聲を發すると共に、右足を左足に踏み付け、同時に腦天に振りかざしたる天之沼矛を斜に空を斬つて、一直線に左の腰元に打ち下すや否や、更に「エーイツ」と發聲すると共に、右肘を胸側に着けたる儘前臂を直立し、然る後更に天之沼矛を腦天に構へ、前後に通じて續けさまでに三回反復して行ふなり。神我一體として「イーエツ」と打ち込むは、四圍の惡魔を威壓懲戒するの作法にして、之を反對に「エーイツ」と打ち上ぐるは、惡魔を悔悟復活せしむるが爲なり。即ち鬼も神と化し、禍も福と化し、之を吸收同化して共に神我一體たらしめむとするが、大祖神の垂示にして、神人の膨脹的大理想なり。

次に雄詰を終りて、直ちに兩掌を臍の位に置き、勢よく十字形に組み合わせ、然る後腹式深呼吸を三回行ふ。而して最後の吸氣を全部呑みて呼出せず、之を伊吹

の神事と言ふなり。

現今にては禊の行事其根元を失ひ眞相傳はらざれ共、大要右の如き形式にて一部ぶの神道家間に残り居るなり。紫微天界にても禊の神事を以て萬事の根元と定められたれば、太元顯津男の神を始め百神達は、玉野丘の玉泉に各自禊を修すべく集り給ひて、修祓の業に奉仕し給ひぬ。

顯津男の神初め其他の諸神は、玉野丘の靈泉の汀に、各自座を定め、禊の神事を修せむとして、御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神の御歌。

天渡る月日もうつる玉泉の

清きは神の心なるかも

水底の眞砂も光る玉泉に

わが罪汚れくまなく洗はむ

國土造り御子生む神業の尊さを



悟りて我は楔仕へむ

振魂の襖に水底の眞砂まで

搖ぎ出だせり神のまに

神々の振魂の楔つばらかに

この水底に寫りけるはや

眞鶴の稚き國原固めむと

玉の泉にまづ楔せむ

常磐樹の松の梢は水底に

みどりに榮えて波靜なり

波の面に波紋描きて泡立つは

水底にすむ小魚の呼吸か

この清き玉の泉に永久に

住む魚族はすがしかるらむ

西南の空より下りし我にして

この清泉に住みたたくぞ思ふ

その昔鰻となりて仕へてし

我はなつかし泉の水底

この水に鰻とかへりて永久に

我は住みたくなりけらしな

及ばざること繰り返し主の神の

依さしに背かむ事のおそろし

種々の苦しみなやみを忍びつつ

今この泉にみそぎするかも

わが御霊くもりにくもり濁らへり

この清泉に甦らむかな

神生みの業初々に終へぬれど

心にかかる何ものかある

玉野比女の神の御歌。

非時の香具の木の實ゆ現れし

われは水際にたちばなの神

瑞御靈やすくましませ岐美が靈は

玉の泉のごとく清けし

楔して此國原を固めむと

思ほす岐美を尊くぞ思ふ

主の神の御水火かかりし香具の實は

八十柱比女の神となりぬる

八十柱神の一つに加へられ

われは神業に後れしを悔ゆ

一つ國の一つの國魂生ませつつ

神代を永久に開かす主の神よ

一ひとつくに國ひとにひとつの御み樋ひ代しろ定さだめましし

主スの大神おほかみのこころ尊たふとし

此この國くにの御み樋ひ代しろとなりし吾われにして

神み業わざにおく後いまれしをさら今いま更さら悔くゆるも

神か生みの神み業わざにおく後あれし過あちは

わが魂たま線しひの曇くもりなりけり

曇くもりたるわが魂たま線しひの御み樋ひ代しろに

如い何かで國くに魂たま神がみの生うれむ

生い代く比よ女ひの神かみの神み言ことの御み子こ生うみは

主スの大神おほかみの經し綸くみなるらむ

生い代く比よ女ひの神かみいまさずば真ま鶴なづるの

國くに魂たま神がみは生あれざらましを

瑞みづ御み靈たまを吾われは恨うらまじ生い代く比よ女ひの

神かも恨うらまじ惟か神むなれば

主スの神かみの依よさしたまひし神業かむわざを  
輕かるんじ居ゐたる罪つみなりにけり  
御樋代みひしろと心こころおごりしたまゆらに  
わが生魂いくたまはくもりたりけむ㊦

生代比女いくよひめの神かみの御歌みうた。

㊦ 眞鶴まなづるの山やまのみたまと現あらはれて

吾われは知しらずに神業みわざ仕つかへし

瑞御靈みづみたま水火いに生うまれし吾われなれば

わが魂線たましひは岐美きみにいつきぬ

道みちならぬ戀こひゆゑ吾われは諦あきらめむと

幾度いくたびこころを省かへりみしはや

魂線たましひの縁えにしの絲いとに縛しばられて

岐美きみの御水みい火きに御子みこを孕はらみぬ

一度ひとたびの御手みでに御肌みはだにふれずして

岐美きみの眞言まことに想像おもひ妊娠はらみぬ

玉野比女たまのひめ許ゆるさせたまへわが心こころ

朝あさな夕ゆふなに公きみをおそれつ

わが思おもひ燃もえあがりつつ黒雲くろくもと

なりて御空みそらを鎖とぎせしを恥はづ

今いまよりは是これの泉いづみに袂みそぎして

許こ々こ多た久くの罪つみ汚けがれを拂はらはむ

主スの神かみの御子みこに生あれませばわが氣體きたい

煙けむりとなりて天あめにのぼらむ

玉野比女たまのひめ神かみよ生あれます神かみの子こを

汝なが御子みことして育はくくみたまはれ

村肝むらぎもの心こころにかかる雲くももなし

わが纏もつれたるおもひも解とけつつら

遠見とほみ男をの神かみの御歌みうた。

百神ももがみの姿すがたすがしく水底みなそこに

月日つきひとともに冴さえ渡わたるかな

月つきも日ひも水面みのもに寫うつる玉泉たまいづみの

面おもては鏡かがみのごとく光ひかれり

天地あめつちの合せ鏡かがみの眞清水ましみづに

洗あらはむ魂たまに汚けがれあるべき

水底みなそこに白梅しらつめ薫かをり常磐樹ときはぎの

松まつの翠みどりは静しづかにそよげり

神々かみがみの姿すがたも水底みそこにさかしまに

うつりて清きよく面おもかがやけり

吾は今天と地とに頭邊を

むかはせて立ちぬ清き汀に

天と地の中心になるかわが足は

上と下とにふまへ居るなり

天地の中心に立ちて國土造ると

楔の汀にかがやき居るも

天も地も一つになりし瑞御靈

この玉水にすみきらひますも

瑞御靈神の功を今ぞ知る

御空の月日も下りて浮べば

この水は生命の清水眞清水よ

この稚國の生命の元よ

玉野森とこれの泉のなかりせば

この國原をいかに生かさむや



二柱比女神の姿水底に

すがしく映えて四柱となれり

二柱比女神力を一つにし

これの世柱とならせ給はれ

國土生みと御子生みの神業に仕へます

世柱比女神ぞかしこき

水底に眞鶴翼を搏ちながら

舞へる姿の勇ましきかな

伽陵頻迦の聲も水底に聞ゆなり

泉は薰る白梅の花

主の神の降らせたまふも宜なれや

この玉泉は瑞の御靈よ

かくのごと清きみたまの岐美なれば

御子生みの神業やすくますらむ

永久とことはに濁にごりを知らぬ玉泉たまいづみの  
深ふかきは岐美きみの心こころともがな

圓屋まるや比古ひこの神かみの御歌みうた。

☐ まるまると月つきの形かたちの玉泉たまいづみ

寫うつして清きよき瑞御靈みづみたまかも

月つきと日ひを浮うかべて圓まるき泉いづみなれば

玉たまの泉いづみとたたへけるにや

吾われは今いまこの玉水たまみづに楔みそぎして

岐美きみの神業みわざを助たすけむと思おもふ

そよと吹ふく風かぜにも縮ちぢむ水みづの面もの

すなほに吾われは心こころを洗あらふ

吹ふくとしもなき風かぜながら玉泉たまいづみの

水面みのもに小波さざなみうてる素直すなほさ

素直すなほなる泉いづみの面おもの小波さざなみは

瑞みづの御靈みたまの眞心まごころなるべし

大おほいなる事ことにも動うごきささやけき

事ことにも動うごかす瑞みづ御靈みたまかも

月つきと日ひを浮うかべて清きよき玉泉たまいづみも

そよ吹ふく風かぜに動うごかす素直すなほさよ

この清きよき直なほき御靈みたまを照てらしまして

國土くに造つくりませ瑞みづの御靈みたまよ

圓屋まるや比古ひこ神かみは御供みともに仕つかへつつ

岐美きみが正ただしき心悟こころさとりぬ

生代いくよ比女ひめに眞言まことのらせどあやしかる

心こころもたさぬ岐美きみぞかしこき

玉野たまの比女ひめの清きよき心こころは玉泉たまいづみの

面おもに似にまして深ふかくすませり

玉たまの丘をかにかくも清すがしき神かみ々の

國くに土つち造つくりせむと襖みそぎますはや

天あめも地つちも一いち度どに開ひらくこの襖みそぎ

神かみの心こころとかしこみ仕つかへむ

濁にごりなき玉たまの泉いづみと村むら肝きもの

心こころ洗あらひて御み前まへに仕つかへむ

宇う禮れ志し穗ほの神かみの御み歌うた。

天かみ界くにの鳴なり出いでし時ときゆためしなき

今け日ふの嬉うれしさ清すがしさに居ゐるも

神かみ生うみの神かみ業わざも漸ちよちくなりなりて

玉たまの泉いづみに立たたす嬉うれしさ

生代比女神の楔は眞鶴の

國土を固めの基なるらむ

玉野比女の清き心は玉泉の

面に月日の浮べるがごとし

鳳凰は翼を天に搏ち搏ちて

今日の楔をことほぎにつつ

幾度の楔はすれど今日のごと

すがしき泉にあはざりにけり

玉野森に數多の泉は湧きながら

この清しさはあらざりにけり

八千尋の底まで清く澄みきらふ

玉の泉の珍しきかも

美波志比古の神の御歌。

玉野丘たまのをかの麓ふもとに謹つつしみて時待ときちし

吾尊われたふとくもゆるされにけり

みはし比古ひこの神かみにしあれど玉野丘たまのをかに

のぼらむ御橋みはしかけ得えざりけり

わが魂たまをこれの泉いづみに禊みそぎして

みはしの業わざに清きよく仕つかへむ

眞鶴まなづるの稚わかき國原くにはら今日けふよりは

甦よみがへるべし目路めぢの限かぎりを

産玉うぶだまの神かみの御歌みうた。

神々かみがみの禊みそぎの神業みわざすがしくも

水底みそこにうつらふ今日けふぞ尊たふとき

澄すみきらふ玉たまの泉いづみにわが魂たまを

洗あらひて生あれます御み子こを守まもらむ  
この水みづは生あれます御み子この産うぶ盥だらひ  
産うぶ釜がまなれや澄すみにすみきらふ  
澄すみきらふ玉たまの泉いづみの産うぶ盥だらひに  
つつしみ吾われは御み子こ育はくくまむ  
』

魂たま機きは張はるの神かみの御み歌うた。

魂たま機きは張はる命いのちの清しみ水づ眞ま清しみ水づは  
主スの大神おほかみの御み姿すがたなるも  
この清しみ水づ掬むすべば千ち歳とせ萬よろ歳づよの  
玉たまの生いのち命のちは笑ゑみ榮さかゆべし  
神かみの代よの開ひらけし遠とほき昔むかしより  
まだ見みぬ清きよき玉たまの泉いづみよ

常磐樹ときはぎの松まつに巢すぐひし眞鶴まなづるは

御子みこの千歳ちとせをことほぎまつらむ  
』

美味素うましもとの神かみの御歌みうた。

甘あまき水みづ柔やはらかき水みづ清きよき水みづ

萬食物よろづをじもの美味素うましもとの水みづよ  
』

結むす比ひ合あの神かみの御歌みうた。

天あめと地つちと結むすび合あせてすみきらふ

この玉泉たまいづみは神かみの姿すがたよ

この丘をかにかかかるすがしき玉泉たまいづみ  
光てれるは神かみの御心みこころなるらむ



天地あめつちを結びむす合あはせてすみきらふ

玉たまの泉いづみにみそぎせむかも

眞鶴まなづるの國くにの鏡かがみと輝かがやけり

玉たまの泉いづみの深ふかさ清すがしさ

ためしなきこの玉水たまみづにわが魂たまを

洗あらふもうれし岐美きみに仕つかへて

眞言まこといづ嚴かみの神かみの御歌みうた。

言こと靈たまの幸さちはふこれの天界てんかいに

吾われはみそぎて眞言まことを生いかさむ

主スの神かみの感うつろひ應ひありしか水みづの面もの

みるみる波なみは高たかまりにけり

眞鶴まなづるの國くに土に固かためむと楔みそぎ終をへて

いづの言靈われ宣らむかな

瑞御靈神を助けて吾は今

巖の言靈宣らむと思ふ

かく歌ひ給ふや、眞鶴山は少しく震動し始め、アオウエイの音響いづくともなく高らかに聞え来る。

(昭和八・一一・二 舊九・一五 於水明閣 加藤明子謹録)

## 第二章 言靈の光(一八九六)

抑紫微の天界はスの言靈の水火によりて鳴り出でませるが故に、天地萬有一切のものいづれも稚々しく、柔く、現在の地球の如く山川草木修理固成の域に達し居らず、神また幽の幽にましまし、意志想念の世界なれば、到底現代人の想像も

及ばざる程なり。清輕なるものは高く昇りて天となり、重濁なるものは降りて地となる。これの眞理によりて紫微天界は五十六億七千萬年の後、修理固成の神業完成すると共に、其重量を増し、次第々々に位置を大空中の低處に變ずるに至りたれば、我地球こそ、紫微天界のやや完成したるものと知るべし。

紫微天界に於ける數萬丈の山嶽と雖も殆ど氣體なれば、柔かく膨れあがり、伸びひろがりたるもの、次第々々に收縮作用を起し、最高二萬數千尺の山嶽を止むるに至りたるなり。紫微天界に於ける國土生み、神生みの神業も、この柔かき一切の氣體界を物質界に修理固成する迄の年處は、五十六億七千萬年の久しきを経たるなり。故に紫微天界の神々の御活動は、無始より無終に連續して止む時なし。故に神代に於ける愛の情動も、亦現代人の如く濃厚執拗ならず、時、處、位に應じて愛の情動起り、忽ち消散して後なき極めて淡泊なる情動なりしなり。併しながら世の次ぎ次ぎ下るに従ひて、山川草木其の硬度を増し、人情又濃厚執拗となりて、遂には愛戀の亂れ、爭鬪を起すに至れるも自然の結果止むを得ざる事と言ふべし。故に主の大神は紫微天界の最初にあたり、天之道立の神をして、世の混

亂を防ぐべく、天津眞言の道を天地萬有に永遠無窮に教へ導き給ひ、亂れゆく世を建正すべく經綸されたるは深き神慮のおはします事なり。

紫微天界に於ける山川大地は、浮脂のごとく漂へるを以て、現代人の如き重濁なる身をもつては、殆んど空中を行く如く、水上を歩むが如く、如何ともすべからざれども、神代の神人は氣體にましまして、浮脂のごとき柔かき地上を歩みて何の支障なく、恰も現代人の現界地上を歩むと異なるところなきなり。國土の修理固成なりて硬度を増すに従ひ、神々も亦體重を増加し、遂には人となりて地上に安住するに至りたるなり。我地球の今日の如く確固不動に修理固成さるるまでは、五十六億七千萬年の年處を経たるを思へば、神界の經綸の幽遠なるに畏敬の念をはらはざるべからざるなり。

斯くの如く主の大神を初め、種々の神等の努力の結果完成したる地上に人と生れ、安住せしめらるる其廣慈大徳は到底筆紙に盡すべき限りに非ず。況んや全地の中心にして四季の順序調和したる中津國に生を享けたる人生に於てをや。我々は主の大神の住はせ給ひし紫微天界の完成期に近づける地球の中心葦原の中津國

なる日の本に生れ、萬世一系の皇神國の天皇に仕へまつりて、神の宮居となり、神の子となりて仕へまつる幸福は、三千大千世界の宇宙の世界中到底求め得べからざる仁恵に浴せるものと知るべし。故に我皇神國に生れたる大御民は、海外の諸國に比して特に敬神尊皇報國の至誠を披瀝し、其大慈洪徳に報いまつらずむばあるべからず。紫微天界の完成したる神國なるが故に、我國を皇神國と稱へ、其の君を天皇と申し奉るなり。

ためしなき此神國に人と生れ

清き身魂を濁すべきかは

久方の天津皇國を生みませし

神の御稜威を夢な忘れそ

言靈の水火は次ぎ次ぎ固まりて

この美しき天地は成れり

智者學者數多あれども天界の

なり出で初めたる真相を知らずも

主スの神かみの恵めぐみ思おもへば地ちの上うへに

住すむもつつしみの心こころ湧わくなり

神かみがみ々の恵めぐみも知しらず世よの中なかを

はかなみ思おもふ愚おろかなる人ひとよ

愛あいぜん善ひかりの光ひかりにみつる神かみの國くにを

火くわたく宅くわたくとをしへし曲まがつ津つの教のりかな

現うつしよ世よも亦また幽かくりよ界よも主スの神かみの

領うしは有はぎたまふ國くに土しと知しらずや

久ひさかた方あめの天あめより降くだりて中なか津つつ國くにを

永と久はに知し召しめす主スの神かみの御み子こよ

葦あしはら原はらの國くになり出いでし遠ゑん因いんを

思おもひて敬けい神しん尊そん皇のうに盡つくせよ

言こと靈たまの生いける活はたら用き白しら雲くもの

空そらに迷まよへる學もの者しりあはれ

もろもろの學まなびあれども言こと靈たまの

眞ま言ことの學まなび悟さとれるはなし

世よの中に學まなびは數あまた多たありながら

學がく王わう學がくの言こと靈たま知しらずも

言こと靈たまの學まなびは總すべての基もとなり

其その他の學まなびは末すゑなりにけり

根こん本ほんを悟さとらず末すゑの學まなびのみ

榮さかゆる此この世よは禍わざはひなるかな

世よの中なかの一切いっさい萬ばん事じは言こと靈たまの

光ひかりによりて解かい決けつするなり

言こと靈たまの眞ま言ことの道みちを知しらずして

此この神かみ國くにの治をさまるべきやは

我われは今いま神かみの依よさしの言こと靈たまの

學まなびに眞道まみちを説とかむとするなり

皇神國すめらみくにの大本たいほんを知るは言靈ことたまの

生いける學まなびによるの外ほかなし

(昭和八・一一・三 舊九・一六 於水明閣 加藤明子謹録)

### 第三章 玉藻山(一八九七)

顯津男あきつをの神かみは、玉たまの泉いづみの汀みぎはに立たたせ給たまひて、眞鶴まなづるの國くに土にをうままらに委曲つばらに造つくり固かためむと、七十五しちじふごせ聲こゝろたまの言靈ことたまを宣のり上げ給たまへば、玉野丘たまのをかは次第しだいしだい々々しだいに際限さいげんもなく膨ふくれ上あがり、右みぎに左ひだりに南みなみに北きたに四よ方も八や方に膨脹ぼうちやうして、眞鶴山まなづるやまの頂上ちやうじやうも眞下ましたに見みるばかり高たかまり聳そびゆるに至いたりぬ。此間このかんほと殆たんど七日ななかななや七夜つひやを費つひやし給たまひける。百神ももがみはおはしませども瑞みづの御靈みたまの如ごとく澄すみ切り給たまはざれば、異口同音いくどうおんに言靈ことたまを奏上そつじやうし給たまふよしな



く、先づ顯津男の神生言靈を宣らせ給ひ、次に眞言嚴の神の清き言靈を奏上して、眞鶴の國土を無限大に拓き膨らせ擴ごらせ給ひけるぞ畏けれ。

言靈の水火の全く澄み切りあらざる神の水火を交ふる時は、宇宙に混亂を起し、修理固成の神業成り難ければ、斯く取計らひ給へるなりき。

我曾て四尾山に登り、數多の信徒と共に天津祝詞を奏上し、神言を宣り、七十

五聲の言靈の限りを盡して奏上しけるに、山麓を隔てて、程遠き大本の事務所に

明瞭に聞えたるは、我言靈のみにして、其他の人々の聲音は混亂其極に達し、只

ワアワアと聞ゆるのみなりしと、大本の役員等は我に語りたることあり。斯の如

く濁りたる言靈を異口同音に一度に唱ふるは、反つて天地の水火を亂すものなる

ことを知るべし。朝夕神前に唱へ奉る神言と雖も、常に信徒の濁れる聲音にかき

亂されて、清澄なる言靈を奏上し得ざるを以て、大本大祭の外は信徒と共に奏上

する事を神に恐るるが故に、中止し居るものなり。

大祭の時と雖も、我言靈を衆人の爲めに亂さるるは甚だ不愉快にして、神明に

對し恐れ多きを自覺しつつあり。然るが故に遠き神代の紫微天界の國土造りの言

靈も、異口同音に宣り給はざりし理由を知るべきなり。

顯津男の神は澄みきらひたる言靈の持主なる眞言嚴の神を選びて、交る交るに生言靈を奏上し給ひ、其他の神々は各自一柱づつ言靈を宣りて神業を助け給ひたるなりき。斯の如く言靈の清濁美醜は天地の水火に大關係を有し、神界の經綸に就いても大なる徑庭あれば、謹むべきは言靈の應用なり。

故に本書を拜讀せむとする人は、心を清め身を清め、平素に言靈を練り、圓滿清朗の持主とならねば、聽者に感動を與へ、神明の氣を和らげ且つ神業を補佐する事を得ざるなり。

顯津男の神の國土造りの御歌。

アオウエイ

タトツテチ

伸びよ膨れよ玉野森

八ホフヘヒ

膨ふくれ 擴ひろごれ 彌いや高たかに  
伸のびよ 擴ひろごれ 玉たま野の丘をか

マモムメミ

圓まるくなれなれ 玉たま野の丘をか

御み子こよ 生あれませ

アオウエイ

國くには原はら榮さかえよ

サソスセシ

月つき日ひも 輝かがけ

カコクケキ

地つちよ 固かたまれ

ナノヌネニ

水みづよ 湧わけ 湧わけ

サソスセシ

草木くさきも繁しげれ

ヤヨユエイ

生物いきものことごと生命いのちを保たもて

ヤヨユエイ

地つちの限かぎりは水みづよ乾かわけよ

ワヲウエヅ

運め行ぐ循環れよ運め行ぐ循環れ

ラロルレリ。

此この神かむ業わざは永とこ久しへに

主スの大神おほかみの御み靈ひし代ると

なりて榮さかえて神かみと人ひととの

永久とほの住所すまかとなれよかし  
萬代よろづよかはらぬ神かみの子この  
只一筋ただひとすぢの生命いのちの綱つなを  
幾萬劫いくまんごふの末すゑまでも  
彌いやつぎつぎに續つづけかし  
此靈線このたましひを御靈代みひしろに  
至たか大天球あまはらを固かため終をへ  
皇神國すめらみくにの榮さかえをば  
堅磐かきは常磐ときはに固かためむ主スの神かみの  
清きよき正ただしき言靈ことたまの  
いと永なが々と榮さかえませ  
嗚呼あ惟あ神々かむながらかむながら  
皇神國すめらみくには神かみの聖所すがど  
神かみの御裔みすゑのすめらぎの

堅磐常磐に鎮まりて  
世界悉く知らしませと  
言靈清く宣り上ぐる』

斯く歌ひ給へば、玉野丘を中心として目のとどかぬ國原は、次第々に湯氣立ち昇ると共に膨れ擴がりて、其高さは次ぎ次ぎに彌高まり、其廣さは次ぎ次ぎに彌擴がりて、眞鶴の國の瑞祥を目のあたり見るに至れり。茲に眞言嚴の神は言靈の御歌詠ませ給ふ。

タトツテチタタの力の功績に  
この國原は擴がり行くも  
アオウエイ神の水火の幸ひに  
この國原はよみがへりつつ  
月も日もわが目路近くなるまでも

彌高いやたかみける玉野たまのの丘をかは

見渡みわたせば玉野湖たまのこすゐ水は次つぎ次つぎに

膨ふくれあがりて干潟ひがたとなりぬ

玉野湖たまのうみの水みづは次第しだいに乾かわき行ゆきて

残のこるは青あをき玉藻たまものみなる

八千尋やちひろの湖うみの底そこまで言こと霊たまに

膨ふくれあがりて山やまとなりつつ

勇いさましも嗚呼あ樂あしもよ國く土に生うみの

神業みわざに光ひかる嚴いづの言こと霊たまよ

嚴いづと瑞みづの生いく言こと霊たまの水い火あ合あせ

玉藻たまもの山やまはわき立たたせけり

玉野湖たまのうみの水底みなそこまでも玉藻山たまもやまの

傾斜なぞ面へとなりし今日けふの目め出で度たさ

瑞御靈生言みづみたまいくことたまに風かぜ起おこり

雨は大地をたたきて降るも

地は揺り空に雷轟きて

稲妻光らす言霊の水火よ

天も地も揺り動きて風起り

この國原を生かしますかも

地揺りて百の汚れも曲神も

亡び行くこそ目出度かりけり

天地の汚れ拂ふと風も吹け

雨も降れ降れ雷轟け

アオウエイ生言霊の功績に

玉藻の山は伸び立ちにける

タトツテチ水火の力に浮脂

なす國原は固まりて行く

カコクケキ月は御空に輝きて



ひかり 光の 限り 神國 照らすも

ス 主の 神の 御靈 なるかも 天津日 日の

うづ 貴の 光の 隈も なければ

ひさかた 久方の 天之道 立神の 道

こもらせ 給ふ 天津日 日の 影

あきつを 顯津男の 神の 御靈の 輝ける

つき 月は 御空の 鏡なるかも

たまいづみ 玉泉わが 言靈に わき立ちて

やま 山の 傾斜面を 落瀧津かも

たまいづみ 玉泉あふれて 終に 瀧となり

この 國原を うるほし 助けむ

けふ 今日よりは 玉野の 山を 改めて

たまも 玉藻の 山と 稱へまつらむ

たまいづみ 玉泉ゆ湧きて 落ち行く 瀧津瀬を

玉藻たまもの瀧たきと今日けふより稱たたへむ  
萬丈ばんぢやうの空そらより落おつる瀧津瀬たきつせの  
音おとは四邊あたりに響ひびき渡わたるも〆

遠見とほみ男をの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

千早ちはや振ふる神代かみよゆ傳つたはる言靈ことたまの

水火いの功いさをのたふときろかも

瑞御靈みづみたま生言靈いくことたまに玉野丘たまのをかは

天津空あまつそらまで立たち伸のびにける

國く土にを生うみ神かみ生うますなる岐美きみなれば

生言靈いくことたまの冴さえのよろしも

言靈ことたまの御稜威みいづかしこ畏みづし瑞御靈みづみたま

今日けふの神業みわざを見みつつ嬉うれしも

吾われは只ただかしここみ奉まつり今日けふよりは

瑞みづの御み靈たまの神み業わざに仕つかへむ

國くに原はらは彌いや次つぎ次つぎに擴ひろがりて

玉たま藻もの山やまはわき出いでにけり

萬ばん斛こくの水みづを湛たたへし玉たま野の湖うみも

生いく言こと靈たまに干ひあがりにけり

眞ま言こと嚴いづの神かみの功いさをを今いまぞ知しる

吾われは側そばにも寄よれぬ神かみなり

遠とほ見み男をとの神かみと名な乗のれど今いまとなりて

吾われは近ちか見み男をと神かみなりにけり

遠とほく見みる生いく言こと靈たまの力ちからなく

吾われは近ちかく見みる御み魂たまなるも

今けふよりは神かみの賜たまひし御み名なに依よりて

近ちか見み男をと神かみとなりて仕つかへむ

足許あしもとの事ことさへ見みえぬ吾われにして

遠見とほみを男をとの名なはすぎたりと思おもふ

紫微かみのみや宮みやゆ二柱ふたはしら神かみ生あれまして

國土くに造つくりの神業わがたす助たすけますかも

この國土くにに天降あもりましたる瑞御靈みづみたまの

功いさをは千代ちよのいしずゑなるらむ

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ 神生かみうみの神業みわざを負おひます瑞御靈みづみたまの

生言靈いくことたまの水い火きのたふとさ

天あめも地つちも一度いちどに動うごく言靈ことたまの

水い火きを持もたせる岐美きみの功いさをよ

眞言まこといづ嚴げんの神かみの功績いさをし今いまぞ知しる

生言靈いくことたまはみなぎらひたり

眞鶴まなづるの稚わかき國原くにはら今日けふよりは

堅磐かきはとき常磐はに固かたまり榮さかえむ

わが立たてる玉藻たまもの山やまはつぎつぎに

うなりうなりて高たかくなり行ゆくも

鳴なり鳴なりて鳴なり轟とどろきてはてしなき

生言靈いくことたまに國土くにを生うませり

玉野たまの比ひ女生いくよ代の比ひ女めの神業かむわざを

詳細つばらにわれは今いま覺さとりける〝

(昭和八・一一・三 舊九・一六 於水明閣 森良仁謹録)

第四章 千條ちすぢの瀧たき (一八九八)

瑞の御靈顯津男の神竝に眞言嚴の神の生言靈に、眞鶴の廣き國原は天地震動して前後左右に揺り動き、暴風雨頻に臻り、遂に玉野丘を中心とする一帯の地は、いや次々にふくれ上り擴がりて、驚天動地の光景を現じたれば、神々は言靈の威力に感歎措く能はず、各自生言靈の御歌を詠みて、國土造りの神業を壽ぎ給ひぬ。玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

主の神の神言畏み此處に來て

この神業を初めて見るも

ときじくの香具の木の實に生り出でし

吾は主の神の分靈なるかも

二柱天津高宮ゆ降りまし

この神業を助け給ふか

久方の天は轟きあらがねの

地は揺りて國土固まりぬ

ひさかた  
久方の空そらに閃きらめく稲妻いなづまの

はやきは神かみの神業みわざなるらむ

いかづち  
雷いかづちのとどろき強つよし曲神まががみは

おそ  
恐れ戦をのき消きえ失うせにけむ

つみけが  
罪穢つみけがれ過あやまち洗あらふと玉泉たまいづみ

たき  
瀧たきと流ながれて世よを生いかすなり

かみう  
神生かみうみの業わざに後おくれし吾われにして

く  
國土くに生うみの場にはに立たつぞ嬉うれしき

つきよみ  
月讀つきよみの御靈みたまと現あれし顯津男あきつをの

かみ  
神かみの功いさをのたふときろかも

たまいづみきよ  
玉泉たまいづみきよ清きよくあふれて玉藻山たまもやまの

を  
尾をの上へゆ高たかく落おちたぎちつ

お  
落ちたぎつ瀧たきの響ひびきに言靈ことたまの

い  
水火籠いらひて世よを生いかすなり

年月としつきを玉野宮居たまのみやゐに仕つかへつつ

かかる目出度めでたき神業みわざを拜をろがむも

眞鶴まなづるの國くにの榮さかえを目まのあたり

吾われは玉藻たまもの山やまに見みるかな

久方ひさかたの天あめに伸のびたつ玉藻山たまもやまの

生いける姿すがたは神かみにぞありける

天地あめつちの總すべてのものは主すの神かみの

清きよけき水火いの固かたまりなるかも

萬世よろづよの礎いし固すめ給たまはむと

現あれ出いでますか瑞みづの御靈みたまは

嚴御靈いづみたま宣のらせ給たまへるまさごとを

普あまねく神かみに宣のりて生いかさむ

いきいきして生いきの果はてなき天界かみくにに

生いきて榮さかえむ身みの樂たのしさよ



眞ま言こと巖いづの神かみの尊たふとき言こと靈たまに

玉たま野の湖うみ水みも乾かわきたるかな

ももううももううと湯ゆ氣げ立たち昇のぼり玉たま野の湖うみは

底そこひの水みづも次つぎにかわける

眞ま鶴なづるの國くにの柱はしらとなりませる

顯あきつ津をがみ男神すがたの姿すがたいさましも

生いく代よひ比ひ女めの神かみは壽ほぎ歌うた詠よませ給たまふ。

眞ま鶴なづるの山やまの御み魂たまと生うまれたる

わが神かみ生かうみの神わ業わざを畏かしこむ

天あめも地つちも澄すみきらふ中なかにそそりたつ

玉たま藻もの山やまに御み子こを生うまむか

巖いづ御み靈たま瑞みづの御み靈たまの水い火き凝こりて

御子わが腹に宿らせ給ふか

眞言嚴の神の言靈幸ひて

四方の國原いや擴がりぬ

言靈の水火の力を目のあたり

見つつ尊き神世をおもふ

天界に氣體のかるき身をもちて

御子生む神業の難きをおもへり

さりながら主の大神の言靈の

功を見つつわが胸やすけし

安々と御子の生れます日を待ちて

この神國につくさむと思ふ

目路の限り湯氣むらむらと立ち昇るは

水火のいきの燃ゆるなるらむ

見渡せば四方の國原に湯氣立ちぬ

國くに土に生うみの神わ業ぎあざやかにして

立たち昇のぼる湯ゆ氣げに御み空そらの月つきも日ひも

うすら霞かすめり眞ま鶴なづるの國くには

玉たま野の森もりの聖すが所どは膨ふくれ擴ひろがりて

御み空そらに高たかく聳そびえたるかも

玉たま藻も山やまの名なを負おひまししこの峰みねに

われ謹つつしみて玉たまの御み子こ生うまむ

玉たまの御み子この生あれますよき日ひを樂たのしみて

朝あさ夕ゆふ宣のらむ生いく言こと靈たまを

朝あさ夕ゆふを玉たま藻もの瀧たきに楔みそぎして

國くに魂たま神がみを育はぐみまつらむ

時ときを追おひてわが腹はら膨ふくれ擴ひろがりぬ

眞ま鶴なづるの國くにの生うまれしに似にて

玉たま野の比ひ女めの清きよき心こころにほだされて

われ怯おぢけ氣なく聖すがど所に立たつも〚

美み波は志し比ひ古この神かみは壽ほぎ歌うた詠よませ給たまふ。

㊦  
としじくなに科し戸なの風かぜは天あめ地つちの

塵ちりを拂はらひて清すがしき國くに原はらよ

地ちの上うへの百ももの汚けがれを悉ことごとく

水みくまり分の神かみは洗あらひ給たまふも

科し戸な邊べの神かみと水みくまり分の神かみまして

眞まなづる鶴つるの國くには罪つみ穢けがれなし

雷なる鳴か神かみは天あめに轟とどろき天あめ地つちの

曲まがを拂はらひて新あたらしき國くに原はら

永とこ久しへの闇やみと曇くもりを照てらすべく

かはがしやしきま走はるし稻いな妻づまあはれ

瑞御靈國土生み神生みの神業終へて

鎮まりみませこの神國に

永遠にこの神國に鎮まりて

うま怜に委曲にひらかせ給へ

主の神の聖所と現れし玉藻山は

幾千代までも動かざるべし

産玉の神は壽ぎ歌詠ませ給ふ。

玉泉に瑞の御靈は禊して

今日の神業を興させ給ひぬ

玉泉の面にうつりし月かけを

見る心地すも岐美の面は

雄々しくてやさしくいます瑞御靈の

生言靈はわれを泣かしむ

味ひの良き言靈を宣らす岐美の

功は遂に國土生まれける

眞言嚴の神の御靈は久方の

天之道立神の御樋代よ

道立の神の御樋代と悟りけり

宣り給ひたる言靈の光に

主の神のよさし給ひし玉藻山に

嚴と瑞との靈生まれましぬ

道立の神の御樋代と吾知らず

居たりし事を恥づかしみ思ふ

生代比女の御腹の御子を安らかに

生ませまつらむ産玉われは

生代比女神よ安けくおはしませ

産玉神は御子をまもらむ

大なる神業に仕ふる吾ならず

貴御子守ると生れし神はや

玉泉の汀に立たせる生代比女の

神のすがたは光なりける

眞鶴の山より生れし神なれば

生きの生命の永かれと祈る

生れまさむ御子の生命を永久に

われは守らむ眞言をこめて

此處に来てわが神業の一端を

仕へむことの嬉しかりけり

魂機張の神は壽ぎ歌詠ませ給ふ。

☪ 天清く地明らけくなり出づる

この目出度さを如何に稱へむ

眞鶴の國土生みはなり生代比女の

神は國魂神を孕ます

眞鶴の國土はうま怜に生みをへて

國魂神を生ますたふとさ

たまきはる御子の生命を永久に

守ると吾は現れにけり

見るからに氣高くなりし玉藻山の

常磐の松は色まさりつつ

玉野森のあなたこなたに湧き出でし

泉は残らず瀧となりける

萬丈の高きゆ落つる玉藻瀧の

外に千條の瀧現れにけり



神々かみがみは朝あさな夕ゆふなに謹つつしみて

楔みそぎなすらむ千條ちすぢの瀧たきに

言こと靈たまの幸さちひ助たすくる神かみ世よなり

如何いかで楔みそぎを怠おこたるべきかは

朝あさ夕ゆふに心こころ清きよめて楔みそぎする

神かみの常とこ磐はの生いのち命まも守まもらむ

主スの神かみのよさしに吾われは魂たま機きは張はる

生いのち命まもの神かみとなり出いでしはや

久ひさ方かたの天あめにも地つちにも神かみがみ々も

木き草くさにも皆みな生いのち命まもあれかし

わが魂たま線まを總すべてのものに分ま配くりて

永と久はの生いのち命まもを守まもらむと思おもふ

八や十そ日か日はあれども今け日ふのいく日ひこそ

眞ま鶴なづ國くにの創は始じなりけり

玉藻山尾の上に立ちてをちこちの

國形見れば湯氣立ちのぼるも

むらむらと湯氣立ち昇る國原を

はらし固めむ水火の生命に

宇禮志穗の神は壽ぎ歌詠ませ給ふ。

喜しさの限りなるかも玉藻山

天津御空にそそり立ちぬる

そそり立つ玉藻の山にひかされて

玉野湖水は山となりけり

天地に例も知らぬ目出度さを

眺めて嬉し涙にくるも

喜びの満ち足らひたる神國に

何を歎かむ宇禮志穗の神  
空見れば嬉したのもし地見れば

わが魂線はよみがへるなり

愛善のこの神國に喜びの

魂線配りて總てを生かさむ

天も地も嬉し嬉しの神の國に

生れし神の幸をおもふも

歎かひの心起れば主の神の

生言靈によりてはらはせよ

歎くべき何物もなき神國は

嬉し嬉しの花ぞ匂へる

白梅の花の薫りにあこがれて

神世をうたふも迦陵頻伽は

鳳凰も玉藻の山に下り來て

世を祝すべく翼うつなり

眞鶴はこれの神山により集ひ

神世をうたへる聲の清しも

神世よりかかる目出度きためしあるを

吾は嬉しみ待ちゐたりける

喜びの極みなるかな眞鶴の

國の榮えと御子孕ませり

何事も喜び勇め喜びの

満ち足らひたる神國なりせば

天地の眞言の水火に育てられて

われは生命の嬉しさをおもふ

顯津男の神の尊き瑞御靈

潤ひに生くる眞鶴の國よ

月讀の露の雫のしたたりて

玉たまの泉いづみは湧わき出いでにけむ

玉泉たまいづみ溢あふれ溢あふれて瀧たきとなり

この國原くにはらを清きよめたまはむ

天あめも地つちも喜よろこびに満みつる神かみの國くに

常世とこよにませとわが祈いのるなり  
𑌛

美味素うましもとの神かみは壽ほぎ歌詠うたよませ給たまふ。  
𑌛

言靈ことたまの水い火幸きさちはひて眞鶴まなづるの

國くにはうままららに生うまれましける

國原くにはらに味あぢはひなくば如何いかにせむ

百ももの木草きぐさも生おひたつ術すべなし

神々かみがみの心こころに味あぢはひなかりせば

貴うづの神業かむわざ如何いかでなるべき

美味素うましもとの神かみと現あらはれ天地あめつちの

總すべてのものあぢの味あぢを守まもらむ

玉泉たまいづみ湧わきたつ水みづも味あぢなくば

すべいての生命いのちを守まもる術すべなし

主スの神かみのよさしまのままうましもとに美味素

神かみは永遠ときはにあぢまもはひ守まもらむ

言靈ことたまの水い火きの濁にごれば天地あめつちの

味あぢはひ消きゆるも是ぜ非ひなかるらむ

言靈ことたまの味あぢはひありて天地あめつちの

すべいてのものさかは生き榮さかゆなり

結比合むすびあはせの神かみは壽ほぎ歌詠うたよませ給たまふ。

嚴いづと瑞みづの生言靈いくことたまを結むすび合あはせ

玉藻たまもの山やまは固かたまりにけり  
嚴いづと瑞みづと結むすび合あせの水い火きをもて

笑ゑみ榮さかえゆかむ眞まなづる鶴つるの國くには  
山やまと河かはを結むすび合あせて眞ま清しみづ水を

いや永とこしへ久へにわかいかせ生いかさむ

眞ま清しみづ水の露つゆの味あじはひなかりせば

百ももの木この實みもみのらざるべし

吾われは今いまこの神かみ國くにに天あ降もりして

岐き美みの神みわ業わざをたすけむと思おもふ

玉たま野の比ひ女め生いくよ代の比ひ女めの御み心こころの

味あぢ幸さちひて國くに土には榮さかゆも

なりなりてなりの果はてなき言こと靈たまに

この天あめ地つちはめぐり榮さかゆく

大おほ空ぞらに轟とどろき渡わたりし雷いかづちも

音おとやはらぎて御空みそらはれたり  
見渡みわたせば目路めぢの限かぎりは眞鶴まなづるの

つばさかがよふ神かみの國くにはも

白梅しらうめは玉藻たまもの山やまの尾をの上へまで

咲さき満みちにつつ邊あたりに匂におへり

白梅しらうめの清きよき薰かをりに包つつまれて

國形くにがたを見る今日けふの樂たのしさ  
□

待合まちあはせ比古ひこの神かみは壽ほぎ歌詠うたよませ給たまふ。  
□

瑞御靈みづみたま來きまさむよき日ひ待合まちあはせ  
□

今日けふの目出めで度たきよき日ひにあふも

玉野丘たまのをかの聖所すがどは嚴いづの言靈ことたまに

雲井くもゐの空そらまで飛とび上あがりつる



鳳凰は翼を竝べ眞鶴は

この國土生みを壽ぎてなくも

幾年を待合せたる吾にして

清く生り出し國形見るも

月も日も御空に高く輝きて

玉藻の山をてらし給へり

今日よりは玉藻の瀧に楔して

瑞の御靈の神業を守らむ

かく神々は眞鶴の國のいやひろに、いや遠に膨れ上り擴がりしを喜び壽ぎ、歌  
をうたひをへて、頂上なる玉野大宮に感謝の神言を宣らせ給ひしぞ目出度けれ。

(昭和八・一一・三 舊九・一六 於水明閣 林彌生謹録)

第五章 山上の祝辭（一八九九）

顯津男の神、玉野比女の神を始め、百の神等は生言靈の功によりて、眞鶴の國の廣き國原豊けく膨れ上り、玉野湖水の底ひまで水乾きて、土地はいよいよ高く空に伸びたち、横に擴がり膨れ膨れて果しなき光景を目撃しながら、喜びのあまり玉野宮居の聖所に立たせ給ひて、各自主の大神の洪徳を感謝しつつ、よろこびの御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神の御歌。

久方の天津高宮ゆ天降ります

神の功に國土うまれたり

はしけやしこの國原を眺むれば

目路の限りは湯氣立ちのぼる

もやもやと湯氣立ち昇り國原は

かわき固まり榮えむとするも

わが立ちし玉野の丘の聖所

膨れあがりて高根となりぬる

高照の山の高きに比ぶべき

玉藻の山の稚々しもよ

山稚く地柔かにありながら

常磐の松はみどりいやます

白梅の花のかをりの芳しさは

主の大神の御旨なるかも

眞鶴の千歳の榮えを壽ぐか

九皇に鳴く鶴の音清しも

紫微の宮立ち出で吾は方々の

宮に侍りて細し國土生みぬ

つぎつぎにわが言靈は清まりて

うまし神國は生れたりける

國魂の神生む神業愼みて

われは來つるもこれの聖所に

宮柱太しきたてて永遠に

鎮まりいます主の宮居はも

幾萬劫の末の神世のかためぞと

われ雄健びの楔せしはや

振魂の楔伊吹の楔まで

我は委曲に行ひしはや

雄詰の楔の神業に玉野丘の

靈は笑みて山となりぬる

鳥船の楔畏み玉泉に

わが言靈を甦らせり

玉泉萬丈の瀧と落ちたぎつ

四方よもに響ひびかふ言靈ことたまさやけし

言靈ことたまの天照あまてり助け幸さちへる

國くに土にとなりけり稚わかき眞ま鶴なづるは

地つち稚わかき眞ま鶴なづるの國くには言靈ことたまの

伊吹いぶきと楔みそぎにひろごりにける

有あり難がたし尊たふとし天之峰あまのみね火夫ひをの

神かみの功いさをに國くに土に造つくりをへぬ

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやの主すの神かみは

天降あまくたりまして我あを救すくひませり

瑞御靈みづみたま如何いかに言靈ことたま清きよくとも

いかでなるべき此國原このくにはらは

主すの神かみの清きよき御み稜威いづを蒙かかぶりて

我われは正まさしく國くに土にを生うめりき

眞言嚴まこといづの神かみは正まさしく嚴御靈いづみたま

天之道立神におはせしか

嚴と瑞の言靈の水火合はざれば

この美國は生り出でざるべし

久方の天之道立神の功

隈なく悟りし今日ぞ嬉しき

千萬里駒に跨り玉野森に

進みて永久の國土を生みしよ

眞鶴の國はうまらに生れましぬ

いざ國魂の神よ出でませ

眞言嚴の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の天津高宮の主の神の  
神言のままにわれは天降りつ

瑞御靈國土生みの神業助けよと

神言かしこみ吾は來つるも

紫微天界開けし昔ゆかくの如

目出度き例はわれ聞かざりき

千代八千代萬代までも榮えかし

常磐樹しげる眞鶴の國は

瑞御靈來まさむ先に主の神の

神言のままに待ち居たるかも

目路はるか遠の國原見渡せば

瑞光輝き紫雲たなびくも

紫の雲のとばりを押し分けて

天津日の神かがやき給ひぬ

晝月のかげはさやかに大空に

かかりて今日の喜び壽ぎませり

天地あめつちも揺ゆり動うごきつ々眞まなづる鶴つるの

國くに土には常とき磐はに固かためられける

アオウエイの生いく言こと靈たまの生うみませる

伊い吹ぶきの風かぜの音おとの強つよしも

サソスセシ生いく言こと靈たまの御み稜いづ威づより

惠めぐみの雨あめは降ふりしきりたり

パポペピ生いく言こと靈たまは雷いかづちと

なりて天地あめつちに響ひびき渡わたれり

雷いかづちの嚴いづの雄を健たけび雄を詰ころびに

四よ方もの醜しこ雲ぐも散ちり失うせにける

東ひがしより西にしに閃ひらめく稻いな妻づまの

いとはやばやと國くに土には生うまれし

見みの限かぎり葭よしと葦あしとの茂しげりたる

國くに土には忽たちち稻いな田だとなれかし



八束穂の稲種普く蒔き足らはして

神のいのちを永久につながむ

樛の木のいやつぎつぎに國土生みの

神業を仕へて神國を守らせむ

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の主の大神の神言もて

われ玉野森に氣永く仕へし

朝夕に生言靈は宣りつれど

かかる例はあらざりにけり

二柱天津高宮ゆ降りまし

嚴と瑞とに國土は生れけり

嚴御靈瑞の御靈の水火合せ

生うませる國くに土にの清すがしくもあるか  
今け日ふよりは眞ま心ごころの限かぎりを主スの神かみに

捧ささげまつりて國くに土に造つくらむかも

水みづ清きよき玉たまの泉いづみに朝あさ夕ゆふを

楔みそぎのわざにつかに仕つかへ來こしはや

朝あさ夕ゆふに洗あらへど濯そそげどわが魂たまの

時ときじく曇くもるを恥はづかしく思おもふ

一ひと日ひだも楔みそぎのわざをつとめずば

ただちに曇くもる靈みたま魂たまなりけり

時ときじくの香か具ぐの木この實みの主スの靈たまゆ

生うれし吾われもにごるをりをり

大神おほかみの生いく言こと靈たまに生なり出いでし

天津あまつ祝のり詞との功いさをたふとし

大前おほまへに朝あさな夕ゆふなを太ふと祝のり詞と

白まをせば清すがしわが玉たまの緒をは  
幾年いくとせもこの神國かみにに生き生きて

はてなき神業みわざに仕つかへまつらむ

足引あしびきの山やまはあちこちに生あれ出いでぬ

地つちを固かたむる神かみの經綸しぐみに

あらがねの地つちは總すべてのもの生命いのち

永と久はに生うませる御手代みてしろなるも

見渡みわたせば紫むらさきの雲くもたなびきて

神世かみやの榮さかえを彩いろどりにけり

生代比女いくよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

真鶴まなづるの山やまに生うまれてわれは今いま

これすの聖所がどに岐美きみと立たつかも

惟神俄に戀しくなりしより

瑞の御靈に水火合せけり

水火と水火合せて御子を孕めども

怪しき心はつゆだに持たず

一柱御子生れませしあかつきは

眞鶴山に一人住むべし

國中比古神の神業を朝夕に

助けまつりて神國を開かむ

近見男の神は御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神の御尾前近く仕へ

この喜びにあひにけらしな

南の國を知らせとのたまひし

瑞みづの御み靈たまの言こと葉ばかしこし

眞まなづる鶴つるの國くに生なり出いでし今日けふよりは

御み子こを助たすけて永と久はに仕つかへむ

玉たま野の比ひ女めの心こころつくしの功いさ績をしを

今いま目まのあたり見みるぞかしこき

生いく代よ比ひ女めの御み腹はらにいます貴うづ御み子この

國くに魂たま神がみとならすたふとさ

眞まなづる鶴つる山やま玉たま藻もの山やまの神かむ社なびに

天あまかけりつつ仕つかへまつらむ

天あま翔かけり地くに驅かけりつつ眞まなづる鶴つるの

國くに土ちの榮さかえを永と久はに守まもらな

天てん界かいは愛あい善ぜんの國くに土ちよるこびに

満みてる神みくに國くにと漸やっく悟さとりぬ

曇くもりたるわが魂たま線しひは愛あい善ぜんの

國くにの光ひかりをおぼるげに見みし

おぼるげにわが見みし紫微しびの天界てんかいは

いよいよ明あかくきよく見みえたり

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

玉野湖たまのうみの百もものなやみを乘のり越こえて

瑞みづの御靈みたまは國土くに生にましませり

一時ひとときは如何いかになるかと危あやぶみし

心こころづかひも夢ゆめとなりける

かくのごと深ふかき經綸しぐみのあらむとは

圓屋まるや比古ひこわれさとらざりける

高地たかちほ秀ほの峰みねとひとしき高山たかやまの

尾おの上に立たちて見みる國土くにさやけし

玉藻山千條の瀧のしろじろと

落ちたぎちつ言靈響くも

玉藻山瀧の水音響かひて

曲神たちは眼醒まさむ

五日目に風は吹けかし十日目に

めぐみの雨は降れかし神國に

雨も風も神國の榮ゆる基ぞと

思へば尊し科戸邊水分の神

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の雲井に高く聳えたる

玉藻の山は紫微の宮はも

玉藻山尾の上に建ちし大宮は

紫微かみの宮居みやゐに等ひとしかるらむ

主スの神かみの天降あもりますなる大宮おほみやは

雲井くもゐの上うへにそそりたつかも

玉野たまのを丘かは次第しだい々々しだいに高たかまりて

今は雲井くもゐの上うへに立たたせり

目めの下したに湧わき立たつ八重雲やへくもいとほして

下界げかいに天津日あまつひかけはさせり

玉藻山尾たまもやまをの上へに仰あふぐ月つきかけは

一人ひとさやけく思おもはるるかな

吾駒わがこまはいかかなしけむ森もりの外との

竝木なみきに永久とほに繋つなぎ置おきしを

言靈ことたまの水い火きに生あねます白駒しろこまの

行方ゆくへ思おもひて安やすからぬかも



かく歌ひ給ふ折もあれ、玉野森の外廊遠く繋ぎ置きたる駒は、玉藻山の膨脹と  
ともに大地膨れあがり、山の七合目あたりに清く嘶き居たりしが、宇禮志穂の神  
の生言靈に感じけむ、蹄の音もかつかつと、山の傾斜面を眞白に染めて、單縦陣  
をつくり、神々の前に驅けのぼり來つ、新しき神國を祝する如く、聲もさはやか  
に嘶きける。

宇禮志穂の神は再び御歌詠ませ給ふ。

「めづらしもわが言靈の澄みぬるか

言下に駒はあらはれにけり

駿馬の嘶き清し新しき

國土の生れを壽げるにや

主の神の七十五聲のみいきより

生れし駒ぞたふとかりける」

(昭和八・一一・三 舊九・一六 於水明閣 白石恵子謹録)

第六章 白駒の嘶(一九〇〇)

宇禮志穗の神の言靈に感じて集り來れる駿馬は、あたりを眞白に染めながら、  
列を正し玉藻山の尾の上の廣所に月の輪をつくりて、眞鶴の國土の生り出でし瑞  
祥を祝ふものの如く、嘶き廻ること一時に及べり。

顯津男の神はこの態をみそなはして、喜びの餘り御歌詠ませ給ふ。

眞鶴の國始まりぬ駿馬は

これの齋庭に輪をつくり躍るも

八ホフヘヒ生言靈を宣りながら

あはれ駿馬聖所に舞ふも

八ホフヘヒの嘶いななき清きよく玉藻山たまもやまの  
百谿ももたにちだに千谷ひびに響ひびきわたらふ  
鬣たてがみを勇いさましくふり尾ををふりて  
駒こまはいさみぬ今日けふのよき日ひに  
』

眞言まこといづ嚴かみの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

駿馬はやこまの嘶いななき高たかくなり出いでて  
四方よもにひびかふ眞鶴まなづるの國くに  
眞鶴まなづるの國くにの前途ゆくてを壽いひほぎて  
のぼり來きにけむあはれ駿馬はやこま  
神々かみがみを送おくり助たすけて駿馬はやこまは  
この喜こゝろびに集つどひぬるかも  
』

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

駿馬は玉藻の山の頂上に

のぼりて貴の言靈宣るも

八ホフヘヒの生言靈ゆ生れたる

駒のいななき清くもあるかな

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

眞鶴の國のはじめと駿馬は

のぼり來にけむ神のまにまに

瑞御靈神の功に感じけむ

駒のいななき冴え渡りつつ

近見男の神は御歌詠ませ給ふ。

わが乗りし駒も交りて玉藻山の

これの尾の上に言靈宣るも

荒河を渡り大野を遠く越えて

われを助けし駿馬あはれ

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

玉藻山清く冴えつつ常磐樹の

樹下をかざる白き駒はや

天界の塵にそまらぬ白駒の

毛の艶ことに美しきかも

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

㌸ 駿馬も國土の創始を嬉しみて

のぼり來にけむこれの聖所に

神々も勇み給へば駿馬も

勇みて嘶く聲のさやけき

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

㌸ 玉藻山の御橋なけれど駿馬は

生言靈にのぼり來つるも

國土生みの神業を助くる駿馬の

嘶き聞けば神の聲あり

産玉の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 天界に生けることごと言靈の

幸にしあれば尊かりけり

月の輪をつくりて駒は勇ましく

躍りまはるも嘶きつづくも

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ たまきはる生命あるものことごとく

國土の創始を喜ばぬはなし

眞鶴の國の榮えを壽ぎつ

駒は勇むか嘶き高し

見渡せば遠の御空に紫の

雲くもたなびきて風かぜ澄すみきらふ

山やまも野のも生いく言こと靈たまの幸さちひに

甍よみがへりたる今日けふぞ目め出で度たき

主スの神かみの天あも降り給たまひて助たすけます

この國くに原はらはとこよにもがも

常とき磐はぎ樹まの松まつのみどりの玉たま露つゆを

照てらして月つきは澄すみきらひたり  
□

結むす比ひ合あの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

□  
神かみと駒こまと結むすび合あせて道みちを行ゆく

隈くま手にさやる醜しこ神がみもなし

醜しこ神がみはよし忍しのぶとも駿はや馬こまの

蹄ひづめに蹴け散ちらし安やすく進すすまむ



駿馬はやこまの功いさをは高たかし玉藻山たまもやまの  
尾をの上へにのぼりて神世みよを壽ことほぐ  
』

美味素うましもとの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

見渡みわたせば眞鶴まなづるの國くにはうまし國くに

元津御國もとつみくによ神かみの食をす國くによ

月つきも日ひも清きよくかがよふ眞鶴まなづるの

山やまの尾をの上へに國くに見みするかも

玉藻山尾たまもやまをの上への清きよき神社かむなびに

祈いのるも清すがし國くにの榮さかえを

駿馬はやこまと共ともに齋庭ゆにはにひざまづき

神世みよの榮さかえを祈いのりこそすれ  
』

眞言嚴の神は三度御歌詠ませ給ふ。

☐ 天の原ふりさけ見れば月も日も

光のかぎりを光りけるかも

大空の雲のあなたに澄みきらふ

月こそ瑞の御靈なるらむ

天津日の輝き給ふ功績は

嚴の御靈の光なりけり

待合比古の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 言靈の御稜威かしこき玉野比女の

今日のよろこび何にたとへむ

玉野比女の喜び給ふ顔を

伏し拜みつつわれも榮ゆる

眞鶴の國はつばらに生り出でぬ

待ちに待ちたる今日の嬉しさ

迦陵頻伽梅の梢に春うたふ

玉藻の山の風の清しも

いかづちの轟き止みて稻妻は

御空の奥にかくろひにけり

常磐樹の梢をもみし荒風も

とまりて静けき玉藻山はも

降りしきる雨はあとなく霽れにつつ

御空の月はかがやき給へり

非時に鳴り轟きしあらがねの

地のさゆれもひたと止りぬ

かくの如静まりかへりし眞鶴の

國くにの榮さかえは極きはみなからむ

白梅しらうめの梢こずえにうたふ鶯うぐひすの

啼なく音ね清すがしも春はる心地こちして

百木もも々の綠みどり萌もえ立つ春はるの山やまに

匂におふも清すがし白梅しらうめの花はな

主スの神かみの御水み火いに生あれし白梅しらうめの

花はなのかをりのしるくもあるかな

駿馬はやこまは國くにの創始はじめを壽いそほぐか

そのいななきも一ひと入しほ清すがし

玉泉たまいづみ清きよくあふれて瀧たきとなり

この國原くにはらをうるほしひたさむ

玉泉たまいづみあふれて千條ちすぢの瀧たきとなり

玉藻たまもの山やまに禪たすきかくるも

高照たかてるの山やまにひとしく聳そびえたる

玉藻たまもの山やまは稚わかくあたらし

言靈ことたまの水い火きを十字じふじにふみなして

いやかたらかに造つくり固かためむ

アオウエイ神かみの御聲みこゑに國原くにはらは

榮さかえ榮さかえて果はてなく美うるはし

カコクケキ嚴いづの言靈ことたまかがやきて

この國原くにはらをかたらに照てらふ

百木もも々の梢しすゑの露つゆに久方ひさかたの

御空みそらの月つきは宿やどらせ給たまへり

夜よるもなく晝ひるなきこれの國原くにはらに

月日つきひは一度いちどにかがやき給たまふ

或あるは盈みち或あるいは虧かくる月つきながら

今日けふの姿すがたはまるかりにけり

まるまると御空みそらに輝かがやく月舟つきぶねの

渡らふ雲井ははるけかりけり<sup>わたくもゐ</sup>」

斯く神々は各自に祝ぎ歌をうたひ給ひ、再び玉野宮居の聖所に威儀を正して進<sup>かみがみ おのもおのも ほ うた たま ふた たまのみやゐのすがど むぎをただ たま</sup>  
ませ給ひ、茲に國土生み神生みの神業成就を、生言靈の聲も清しく祈らせ給ふぞ<sup>たま こゝにくににう かみう しんげふじやうじゆ いくことたま こゑ すが いの たま</sup>  
畏<sup>かしこ</sup>けれ。

（昭和八・一一・三 舊九・一六 於水明閣 内崎照代謹録）

## 第二篇 國魂出現<sup>くにたましゆつげん</sup>

## 第七章 瑞の言靈<sup>みづのことたま</sup>（一九〇一）

爰こゝに太元おほもと顯津男とあきつをの神かみは大前おほまへに跪座きざして、國土くに生なみ御子みこ産うみの神業みわざ成なりたれば、  
萬神よろづしんじん人の爲ために生言いくこと靈たまの太祝詞ふとのりを奏上そうじやうし、天界てんかい永遠えいゑんの無事ぶじを祈いのらせ給たまひぬ。

謹つつしみ畏かしこみ敬みやまひも白まをさく、高天原たかあまはらの紫微宮かみのみやに大坐おほまします天之峰あまのみね火夫ひをの神かみ、高銚たかほこの神かみ、神銚かむほこの神かみを始め奉まつり、天津神あまつかみ國津神くにつかみ八百万やほよろづの神等かみたちの御前みまへに白まをさく。此かく産靈むすびに成なれる神々かみがみは、其身體そのましの大本源おほもとなる大御須麻留おほみすまの上うへ無なき産靈むすびに依よりて産靈むすびの極きはみ極きはみ盡つくし、産靈むすびの限かぎり限かぎり盡つくして、此かくも靈妙くすしく此かくも靈端ひづらに産靈むすび成なれる身みにしあれ  
ば、そが地水あめ火風つち空圓まるく備そなはり、秋田あきたの刈穂かりほ假初かりそめにも競争あらしふ事ことなく、些少いささ群竹聊むらいささ  
も一方ひとへに片寄かたよる事ことの無なければ、深山みやまの葛懸かつらり止とどまる事こと無なく、おどみにおどみ滞とどまるこ  
となくして、身魂みたま永久とこしへに白玉しらたまなす伊澄いすみ渡わたり、赤玉あかたまなす赫てらひ照てらひて、此この一いつの  
身大御須麻留みおほみすまが中うちに充塞ふたがり塞ふさり満みちて、大御須麻留おほみすまの極きはみ別わからざる所ところしなれば、  
殊ことに底いたる事ことなく、高天原たかあまはらの限かぎり我身わがみの在あらざる所ところなく、更さらに此身このみに有あらざる處ところな  
し。更さらに此身このみを吾身わがみと限かぎる思おもひ無なし。此故このゆゑに久方ひさかたの天あめは我身體わがみの中うちに伊澄いすみ渡わたり、  
荒金あらがねの地つちは我身體わがみの中うちに堅身かたみ同身やはみを顯あらはして動うごく事ことなく揺ゆるぐ事ことなく、天あめに照てる日ひ

も心の内より六合に伊照り貫通り、世の中を照らし明めて落つる隈なく、大和田の潮水も我身の内に底を深めて潮を六合に廻らし、風の共白浪を立て起して島の崎々伊せき廻る。故れ羽叩きも心を起せば、その心即て神と顯はれ、僅少にても身活用けば、立所に森羅万象の妙體を現し、八百萬千萬諸の神、一つも心の内に現はれずと言ふ事なし。此故に一つの心に思ふ所、直に億兆無量の神の心となりて、無量無邊の御子の爲となり、無量無邊の神の心は亦立返りて我爲となる。一つの身動く所、億兆の神の行となりてその幸ひを得、億兆の人の行ひ我身に歸りて亦その幸ひを受く、微塵程も吾爲に心を移す事なく、且くも身の爲に行ひ爲す事なし。此故に天津神國津神八百萬千萬の神、大き小さき神てふ神の悉々、櫛の實の唯一柱も碗の水の漏るる神なし。空飛ぶ塵の半分も天津水影遣る神なく、現身を顯はし荒魂和魂を幸へ、常に來りて藤葛の木を纏ふが如く、目蓋の目を守るが如く、茜刺す晝の守り烏羽玉の夜の護りと、彌守りに護り彌幸ひに福ひ、其が神の御名のまにまに、そが神の道の任々、久方の空に天翱翔り、荒金の地に入り、海中に潛き入り潛き出て、愛しみ玉ひ、憐み玉ひ、扶け玉ひ、幸ひ玉ひ、恵み玉



ひ、福ひ玉へば、眞心に思ふ所、立所に成り、正身に行へば直ちに成る。是故に  
百千萬の願ひ、億兆の祈り事一つも成らずと言ふ事なく、億兆の業微塵程も遂げ  
ずと言ふ事なし、無に形體を顯はせるものは、神を始め人の身、獸類、禽鳥、魚  
介、昆蟲、木草の虻蟲、萱草の片葉に至る迄、其現身の世に産靈て、形體なせる  
物てふ物は一つだも遺る物なく、飛ぶ塵の塵の半分も缺くる物なく、夜の仕へ晝  
の仕へに來たり仕へ、朝の活用夕の活用に來たり活用けば、且くも身に乏しき事  
なく、身に殘るも煩ふ事なし。故れ此故に其が名を自ら神となむ言ふなる。折々  
の諸の煩ひ病苦の悲しみの如き災は、禽獸蟲魚等が道の内に備はれる事方にして、  
貴き靈き神人の道には更に更にその影だにも有る事なきものを、紫微天界の神人  
の病み悶へ苦しみ惱む事あるは、禽獸蟲魚に均しき道を行きて神人の道を失へる  
より、諸の災難五月蠅如す皆湧き起るになむある。抑も爰に水腐り果つれば昆蟲  
湧き、木の葉茂れば自ら鳥集り來たる。如此て其が穢き道を歩みぬれば、遂に其  
が獸鳥蟲魚の身としも成果てて、永く獸鳥蟲魚と成らむ。畏きかもよ、比類なき  
貴き靈しき神人の身を産靈得ながら、おどみの水のおどみ歸りて、卑しき身魂と

成らむ神理を、眞玉如す深く知り明に悟り極めぬれば、是をしも恐み畏み深く思  
ひて、身震ひ恐懼く迄に畏み恐み過ちて、今日まで起しつる獸鳥の心、蟲魚の行  
ひは朝津日の露霜を消し盡す如く、朝の深霧夕の深霧を志那戸の風の吹攘ひ清む  
るが如く、清め盡し攘ひ極めて、照り渡ります陽の一進みに神人の道に進み入り、  
空飛ぶ塵の塵の半分も私の思ひを起す事なく、吾身の爲に行ふ事なく、神人の名  
のまにまに行ひ澄まし、獸鳥蟲魚の心を持たず、行ひを爲さず、迷ふ事なく欲り  
する事なくして神人の道に入りぬれば、紫微宮に坐すの大神二柱の神も、そが  
神名のまにまに神の道のまにまに、夜の守り日の守りに幸ひ玉ひて、眞言爲す神  
人の道自ら思ひ願ふがまにまに、天界の本より備はれる自らなる大眞道永久に傳  
りて、天津日蔭普く照らし、天雲の普く潤ひて八隅知しの大神の惟神の大御座  
は、天地日月と共に常永に八十連に伊繼ぎ給ひて、且くも失はせ給はず、諸の神  
達おのもおのも生みの子の八十繼ぎいや繼ぎ伊繼ぎて、己が位のまにまにいや遠  
永に麻柱ひ仕へまつり、神人等が各自々々仕さしの神業を守り仕へて、の大神  
に仕へ奉り樂しみつ、神人の道に背く事なく、奥山の深山の奥、海の草、鹽焼き

漁るあさ小ちひさき神かみも飢う餓ゑに苦くるしむ事ことなく、暑あつさ寒さむさの惱なやみを知らず、上かみな中なか下しもの各く位らの神ひ  
人は、共ともに一ひとつの歡樂よろこびを受け、眞まことの大おほスの御みくに國くにと成なし玉たまへと願ねぎ奉まつる事ことの由よしを、  
高たか天あま原はらの紫か微みの宮みや居ゐの三み柱はしらの神かみ、百も千もち萬よろづの神かみ等たち共ともに聞きこ召しめし玉たまへと、畏かしこみ畏かしこみも拜をろが  
み白まをす。

玉野たまの丘おか膨ふくれ擴ひろがり眞まな鶴づるの

國くに土には固かたらに定さだまりにけり

久ひさ方かたの空そらにのび立たつ玉藻山たまもやまの

千ち條すぢの瀧たきは白しら絹ぎぬの旗はたよ

神かみがみ々の生いく言こと靈たまの幸さちひて

玉野湖たまのこすゐ水みづはほしあがりたり

玉野湖たまのうみの湖みづ水みづ次第しだいに高たかまりて

玉藻山たまもの山やまの傾な斜ぞ面へに生おふる藻草も

カコクケキ生いく言こと靈たまにあかときを

うたふ家鶏鳥生れ出でにけり

家鶏鳥の晨を歌ふ聲さやに

眞鶴の國はあけ渡りけり

未だ國土稚くありせばもやもやと

霧立ちのぼる六合のうち

玉藻山霧立ちのぼり白駒の

嘶き高し朝しづの庭に

未だ國土は稚くあれども主の神の

御稜威にここまで固まりしはや

萬代の末の末まで固めゆく

この國原のさかえを思ふ

主の神の生言靈の幸ひて

森羅萬象は日々に榮ゆくも

天も地もわかくるすばら若くへに

立ちて神國を固むる樂しさ  
やうやくに眞鶴の國は固まりぬ  
やがて生れまさむ國魂の神は

かく御歌うたひて大前を靜々と退き給ひ、我居間さして歸り給ひぬ。玉野比女の神、生代比女の神の二柱も、顯津男の神の御後に從ひ、大御前を退き一閒に御姿をかくさせ給ひける。

遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。

玉藻山頂上に立ちて國見すれば

目路の限りは靄立ちのぼれり

瑞御靈依さし給ひし南の

稚國原の秀は見えにけり

圓屋比古神はこれより三笠山の

聖所に鎮まり國守りませ  
眞鶴の稚國原は國中比古の  
神とこしへに依さしたまはれ

斯く歌ひ給ひし折しも、國中比古の神は玉藻山の新に生れたるを喜び、神々の功を言祝ぎまつらむとして、天の斑駒に跨り御歌終らぬに、早くもこの聖場につかせ給ひ御歌詠ませ給ふ。

主の神の神言のままに國土造り

國魂生ます瑞御靈はや

遠見男の神の神言に従ひて

われは治めむ眞鶴國原

玉野湖の底は膨れて玉藻山

東の方の傾斜面となりぬ

立ち昇る湯氣もやもやと眞鶴の

國土の窪所はかわき初めにき

生れまさむ國魂神を守り立てて

千代萬代に國土ひらかばや

百神の貴の功に眞鶴の

國土の形は定まりにけり

廣々と果しも知らぬ國原に

森羅萬象もえ立ち初めたり

鳥獸昆蟲までも瑞御靈の

スの言靈にわき出でにけり

わき出でし總てのものは天地の

御魂なりせばおろそかにせじ

神人は神人獸類は獸類鳥は鳥

蟲にも魚にも道はありけり

禽獸きんじうは禽獸きんじうの道みちゆきてこそ

この天界てんかいは永久とほに榮さかえむ

神人かみにしてもし禽獸きんじうの道みちゆかば

この天界てんかいはただちに亂みだれむ

禽獸きんじうの道みちはやすけし神かみの道みちを

踏ふむは容易よういにあらずかしこし  
』

圓屋まるや比古ひこの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

㊦ 眞鶴まなづるの國くにをうしはぐ國中くになか比古ひこの

神かみの神業みわざのただならぬを思おもふ

遠見とほみ男をとこの神かみの神言みことに從したがひて

東雲しののめの國くにを永久とほに守まもらむ

南みなみの國くにのすべてを治をさめます



遠見男の神の功かしこし  
いざさらば生言靈を宣りあげて  
生れます御子の幸を祈らむ  
玉泉瀧の清水にみそぎして  
玉野大宮に御子を祈らむ  
惟神神のよさしの神業と  
思へば樂し今日の袂は  
神と生れ獸と生れ御空とぶ  
鳥ともなりて神世を守らむ  
よしや身は獸の群に下るとも  
神國の爲には惜まざるべし

(昭和八・一一・一七 舊九・三〇

於水明閣

加藤明子謹録)

## 第八章 結の言靈（一九〇二）

太元顯津男の神が國魂神を生み給ふ神業に就き、言靈應用の大要を示さむとす。

すなは  
即ち、

アオウエイは天位にして、

ワヲウエヰは地の位なり、又、

ヤヨユエイは人位なり。

故にア、ワ、ヤの言靈の區別を正しくせざれば、天地人の眞理を説き明かすこ

と最も不便なり。現代は言靈の應用亂れてアワヤ三行の音聲の區別なく複雑極ま

れりと言ふべし。

又

アカサタナハマヤラワは、天位にして、天に座し、貴身の位置なり。

オコソトノホモヨロヲは、地の座にして、田身の位置なり。

ウクスツヌフムユルウは、結びの座にして、隱身の位置なり。

エケセテネヘメエレエは、水の座にして、小身の位置なり。

イキシチニヒミイリキは、火の座にして、大身の位置なり。

故に貴身は君、田身は民、隱身は神、小身は小臣、大身は大臣の意と知るべし。

アカサタナハマヤラワをア列といふ、其他は準じて知るべし。故に、

ア列は森羅萬象の天位に居り、

オ列は森羅萬象の地位に居り、

ウ列は森羅萬象の結びに居り、

エ列は森羅萬象の水位に居り、

イ列は森羅萬象の火位に居るなり。

是を以て一切萬有の名義の出づる根源を悟るべきなり。

今、生代比女の神が、國魂神を生ます時の迫りければ、顯津男の神は大前に額

きて神嘉言を奏上し給ひ、  
『ウクスツヌフムユルウ』と聲音朗かに言靈を奏上し

給へば、他の神々は御後に従ひて、異口同音に  
『ウクスツヌフムユルウ』を繰返し

し繰返し宣らせ給ひしぞ畏けれ。

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。

ウーウーウーウ 國魂神の生れまして

神國の柱と立たせ給はれ

クークークーク 太元顯津男の神御靈

生代の比女の御腹に宿らす

スースースース 生代の大神の言靈に

宿らせ給ふ國魂の神よ

ツーツーツツ 月満ち足らひ日を重ね

今生れまさむ御子ぞ畏き

又ー又ー又ー又 又奴羽玉の世をまつぶさに

照させ給ふ御子生れませよ

フーフーフーフ 振魂みそぎ清らかに

宿らす御子の光たふとし

ムームーム ム結びの神業の鳴り鳴りて

今生れまさむ國魂の神

ユーユーユー ヨ白雪よりも清らけき

畏き御子の生れます今日はも

ウーウーウーウ ウ美しの神瑞の御靈

御子生みの神業近づきにけり

生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

ウーウーウーウ ウ美しの岐美美しき

神の御子をば宿し給へり

クークークーク 國魂神を孕みつつ

これの聖所にわが來つるかも

スースースース 清し美し玉野宮に

祈りて國魂神を生まなむ

ツーツーツツ ツ月讀の神の神御靈

宿らせ給ふ御腹かしこし

又ー又ー又ー又 又奴羽玉の世を伊照らすと

今生れまさむ瑞の御子はも

ツーツーツツ ツ眞鶴國の國魂は

玉藻の山に生れまさむかも

フーフーフーフ フ應はしき御子生れませよ

千代を固めむ眞鶴の國に

ムームーム ム蒸しつ蒸されつ瑞の子の

宿らせ給ひしわが身は重し

ユーユーユー ユ雪霜よりも白く清しき御子なれや

瑞の御靈の御子にしあれば

ウーウーウーウ ウ嬉しさの限りなりけり吾は今

國魂神を生む日足らひて  
𠄎

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

𠄎  
美しき玉藻の山の頂上に

今日の吉日を迎へけるかも

國魂の神の生れます今日の日は

天地一度にひらく心地す

清しさの極みなるかも玉藻山の

これの聖所に生れます瑞子は

月も日も今日の吉日を祝ひてや

雲を霽らして輝きつよし

奴羽玉の闇もいよいよ晴れ行かむ

瑞子の岐美の生れます今日より

吹き送る風の響のたしたしに

聞えて常磐の松はゆらげり

昔より例も知らぬ喜びに

吾遇ひにけり國魂生れます

夢うつつ幻なせる稚國土を

御子生れまして生かせ給はむ

浮雲の漂ふ國土も今日よりは

うまらにかたらに榮えますらむ

遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。

美しき樂しき今日の生日こそ

瑞子の生れます喜びの日なり

國魂の神のいよいよ生れませる



玉藻の山の今日ぞ目出度き

主の神の生言靈の御水火より

森羅萬象は生れましにける

月も日も御空の雲霧押し分けて

光を地上になげさせ給ふ

ぬえ草の女にしあれども生代比女

神は雄々しき御子生ませませよ

伏し拜む玉野宮居の大前に

今日の生日の心清しも

結び結び水火合ひまして瑞の子の

生れます今日の月日さやけし

行く先のことを思へば嬉しもよ

永久に榮えむ眞鶴の國は

嬉しさの極みなるかも瑞の子の

國魂神くにたまがみと生あれます今日けふなり

宇禮志穗うれしほの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

浮脂うきあぶらなす稚國土わかくにの眞秀良場まほらばや

うまらにかたりに定さだまる今日けふはも

國魂くにたまの神かみの生あれます嬉うれしさに

身みの置おき所知しらずなりけり

主すの神かみの神言みこと畏かしこみわが岐美きみは

眞鶴國まなづるくにの魂たまを生うませり

月讀つきよみの神かみの御靈みたまの露つゆうけて

生代いくよの比女ひめは輝かがやき給たまふ

緯ぬきとなり經絲たていととなり主すの神かみは

國土くにとう生うみ神かみ生うみ依よさす尊たふとさ

降る雨も瑞の御靈の功績と

思へば畏し眞鶴の國に

結ばれし絲の亂れも解けにけり

心にかかる雲霧なければ

行き行きて行きの果なき大野原

拓かす岐美の功かしこき

宇禮志穂の神の心は勇むなり

嬉し樂しも今日の吉日は

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

美しき此の神國の世を拓く

神の御橋をかけまく思ふも

國土稚く草木は稚く神稚く

比ひ女め神が稚みきわか眞ま鶴なづるのの國くに

主スのの神かみの高たかきいさを功いさをはは目まののああたたり

玉たま藻ものの山やまのの尾を根ねにに見みるるかかも

鶴つるはは舞まふふ家か鷄け鳥どりはは鳴なくく梅うめ香かをるる

これこれのの聖すが所どにに生あれれまますす御み子こははや

奴ぬ羽ば玉たまのの闇やみををつつぎぎつつぎぎ明あかささむむと

月つき日ひににままささるる御み子こ生あれれまませせよ

二ふたつつななきき眞ま鶴なづる國くにのの眞ま秀ほ良ら場ばに

生あれれまますす御み子このの生いの命ちはは永と久はななり

燃むゆるゆる火ひのの火ほ中なかにに立たつつもも厭いとははままじ

生いく代よのの比ひ女めのの艱なやみみ思おもへへば

齋ゆみ庭にはにに御み魂たま清きよめめてて今け日ふのの日ひを

待まつつもも嬉うれししきき御み子このの生あれれままし

浮うき雲ぐものの漂ただよふふ如ごときき國くに原はらを

固<sup>かた</sup>めの神<sup>かみ</sup>は生<sup>あ</sup>れまさむとするも  
』

産<sup>うぶ</sup>玉<sup>だま</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

㌸  
産<sup>うぶ</sup>玉<sup>だま</sup>の神<sup>かみ</sup>と現<sup>あらは</sup>れ眞<sup>ま</sup>鶴<sup>なづる</sup>の

國<sup>くに</sup>に來<sup>きた</sup>りて御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を  
守<sup>まも</sup>るも

國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>は未<sup>ま</sup>だ稚<sup>わか</sup>くあれども瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>

御<sup>み</sup>水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に生<sup>あ</sup>れ  
ます御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>は尊<sup>たふと</sup>し

澄<sup>す</sup>みきらふ天<sup>あめ</sup>と地<sup>つち</sup>との中<sup>なか</sup>に  
して

生<sup>あ</sup>れ  
ます瑞<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>は世<sup>よ</sup>の寶<sup>たから</sup>かも

月<sup>つき</sup>讀<sup>よみ</sup>の神<sup>かみ</sup>靈<sup>たま</sup>は月<sup>つき</sup>を足<sup>たら</sup>はして

眞<sup>ま</sup>鶴<sup>なづる</sup>國<sup>くに</sup>の魂<sup>たま</sup>を  
生<sup>う</sup>ますも

ぬ  
るみたる玉<sup>たま</sup>の泉<sup>いづみ</sup>に魂<sup>たま</sup>線<sup>しひ</sup>を

洗<sup>あら</sup>ひてわが身<sup>み</sup>清<sup>すが</sup>しくなりぬ

吹く風も暖かなれど瑞の子の

生れます今日は清しすずしも

むくむくと煙の如く立昇る

霧は神山をつつまひにけり

湯氣立ちて生れます御子を守りつつ

これの聖所は八重垣築けり

上も下も狭霧つつみて瑞の子の

生れやすかれと八重垣つくるも

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

生の子の彌永久に生ひ立ちて

この國原を守りますらむ

國魂の神と生れます瑞の子の

生命いのちを永久とほに吾われは守まもらむ

主スの神かみの依よさし給たまへる魂たまきはる機張

生命いのち守まもらむ朝あさな夕ゆふなに

月つきも日ひも霧きりに隠かくれて風かぜもなし

眞まなづる鶴こゑの聲ひび響ひびくのみなる

ぬくもりを與あたへて御みこ子を生うまさむと

主スの大神おほかみの八重垣やへがき畏かしこし

吹ふく風かぜもあたらせまじと八重霧やへぎりを

起おこして守まもらす主スの神かみ畏かしこし

蒸むし蒸むして生あれます御みこ子の水い火きなれや

天地あめつち四方よもは霧きりの幕まくなり

湯ゆ氣げ立だちて天地あめつち四方よもはやはらかく

豊ゆたかなりけり御みこ子あ生あれます今日けふは

生うまれ出いづる御みこ子まもを守まもりて天地あめつちを

包みし霧の深くもあるかな

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

ウの聲に生れます御子の産聲を

待ちに待ちつつ今日とはなりぬ

國土を生み國魂神を生ます岐美の

功は御世の柱なりけり

主の神の依さしの言葉畏みて

瑞の御靈の御子生れますも

劍太刀鏡の如く照り渡る

みすまる玉の御子生れませよ

荒鐵の地にぬき足なしながら

よき御子生れよと吾祈るなり



振魂ふるたまの禊みそぎかしこし生代いくよ比女神ひめがみの

御子みこはいよいよ生あれませむとすも

蒸むし蒸むして水い火きと水い火きとを凝こらしつつ

生代いくよの比ひ女めの月つきは足たらへり

齋ゆみ清きよめ玉たまの泉いづみの瀧たき津つ瀬せに

洗あらひし御魂みたまの美うつくしきかも

浮雲うきぐものいやつぎつぎに集つどひ來きて

これこの聖すが所どを包つつまひにけりに

美味素うましもとの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☐ うまし御子みこはや生うまれませと祈いのるかな

われ美味素うましもとの神かみの心こころに

奇くびなる水い火きと水い火きとの活はたらきに

國魂神は生れまさむとすも

澄みきらふ御空の月日を隠したる

この深霧の心たふとき

月と日を霧に隠して御子生みの

はぢらひつつむ八重ぶすまかも

ぬえ草の未だ年若き生代比女の

御子生み守れ主の大御神

吹く風も今日は止まりて八重霧の

ふすまに神山は包まれにけり

結び合ひて生れます御子の幸ひを

永久に守らむ美味素われは

ゆるやかにいと静やかに安らかに

生れましませ國魂の神は

美しき眞鶴國の國魂と

生れませす御子を待つぞ久しき<sup>ひさ</sup>」

(昭和八・一一・一七 舊九・三〇 於水明閣 森良仁謹録)

第九章 千代の鶴<sup>つる</sup>〔一九〇三〕

顯津男の神始め、玉野比女の神、生代比女の神、其<sup>そ</sup>他の神々は、玉野宮の大<sup>おほ</sup>前に生言<sup>まへ</sup>靈<sup>いくことたま</sup>の祈願<sup>きぐわん</sup>をこらし給<sup>たま</sup>へば、生代比女の神はここにいよいよ月<sup>つき</sup>足<sup>た</sup>らひ日<sup>ひ</sup>經<sup>た</sup>ちて、玉の御子を安々と産み落し給ひける。

この御子産みの神業を助け奉りたるは、産玉の神にぞありける。  
生れませる御子の御名を、千代鶴姫の命と稱へ奉る。

顯津男の神は、御子の生れませる瑞祥<sup>ずいしやう</sup>を喜び給ひて、大御前に感謝の神嘉言<sup>かむよこと</sup>を宣<sup>の</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふ。

掛巻も綾に畏き、玉藻山の下津岩根に宮柱太敷立て、高天原に千木高知りて鎮  
まりいます玉野宮の大神の大前に、慎み敬ひ畏み畏みも白さく。八十日日はあれ  
共、今日の吉き日の吉き時に、千代萬代と榮え果てなき、眞鶴の國の貴の眞秀良  
場玉藻の山の頂上に、清しくも天降り鎮ります主の大御神天之峰火夫の神の大  
前に感謝言奉る。抑々此の眞鶴の國は未だ地稚く、朝夕の御霧は時じくに立ち籠  
め、月日の光さへ折々に曇らひぬるを、生言靈の御稜威によりて國魂神と神定め  
てし千代鶴姫の命は、ここに目出度大御産聲を擧げさせ給ひぬ。故此を以て大御  
前に海河山野の種々の美味物を八足の机代に置き足はして、御子の生ひたちを守  
らせ給へと、天に踊り地に踏して恐み畏み願ぎ奉るさまを、平けく安らけく聞召  
し相諾ひ給ひて、天と地とのあらむ限り、たまきはる生命永久に生ひ榮えて大御  
依さしの神業に仕へしめ給へと、恐み畏みもこひのみ奉らくと白す。

天地も一度に開く心地かな

國魂神は今生まれましぬ

呱呱の聲こゑ聞きくもさやけし玉藻山たまもやまの

玉野宮居たまのみやみに月日つきひかがよふ

八重垣やへがきとなりて包つつみし深霧ふかぎりも

産聲うぶこゑとともに晴はれ渡わたりける

天地あめつちの開ひらく思おもひや家か鶏けの聲こゑ

御子みこの泣なかせる聲こゑにつれつつ

千代鶴ちよつるひめ姫命ひめみことの行末ゆくすゑに幸さちあれと

玉藻たまもの山やまの聖所すがとに祈いのるも

主スの神かみの依よさし給たまひし神業かむわざを

やうやく終をへて御子みこ生あれましぬ

生あれませる御子みこの面おもてを眺ながむれば

眞玉まだま白玉しらたまのよそほひなるも

月つきと日ひになぞらへ得うべき二ふたつの目めも

澄すみきりてあり神かみのいさをに

つんもりと姿正しき鼻の峰すがただ はな みね

二つの穴もほどほどにしてふた あな

澄みきらふ玉の泉の口許にす たま いづみ くちもと

紅さして薰りこそすれくれなゐ かを

紅梅の露にほころぶ御子の口のこうばい つゆ み こ くち

そのやさしさに我見とれけるわれみ

兔も角も眞鶴山の國柱と かく まなづる やま くにはしら

生れます今日は嬉しかりけりあ けふ うれ

眞鶴の國の榮を言祝ぎてまなづる く に さかえ ことほ

千代鶴姫の命生れけるちよつる ひめ みことあ

眞鶴の國の司と生れませるまなづる く に つかさ あ

千代鶴姫の太りたるかもちよつる ひめ ふと

玉野比女の神は御歌詠ませ給ふ。たまのひめ かみ みうたよ たま

玉藻山たまもやまふくれ上あがりて空そら高たかき

これすの聖が所に御み子こ生あれましぬ

生あれませる千ち代よ鶴つる姫ひめの命みことはも

眞ま鶴なづる國くにの御み柱はしらなりける

生い代く比よ女ひめ神かみの功い績さをしなかりせば

國くに魂たま神がみは生あれまさざるを

天あめも地つちも今け日は一ひと入しほ澄すみきりて

生あれます御み子こを壽じゆぎほにけり

天あま渡わたる月つき日ひの光かげもさやかかなり

國くに津つ柱はしらの生あれましぬれば

主スの神かみの神み業わざに後おくれし吾われにして

今け日ふの喜よろこびたへがてに思おもふ

今け日ふよりは玉たま野の宮みや居ゐに額ぬかづきて

まことかの限ぎり仕つかへ奉まつらむ

千代鶴姫神の命の生ひ先きに

幸多かれと日夜を祈らむ

白梅の花はいみじく香るなり

これの聖所に姫生まして

眞鶴は今日の喜びことほぐか

常磐の松に群れつうたへり

家鶏鳥は時じく歌ひ姫命の

その生ひ立ちを壽ぐがに聞ゆ

白駒の嘶き高く聞ゆなり

御子生まれませる朝の庭に

眞鶴の國の四方八方包みたる

深霧晴れて月日は照らふ

晝月の光白白々と久方の

空にすみきりのぞかせ給ふ



生代比女の神は御歌詠ませ給ふ。

浮雲うきぐもの空そらにそびゆる玉藻山たまもやまの

聖所すがどに御子みこは生あれましにけり

顯津男あきつをの神かみの神言みことの水い火きこりて

國魂くにたまがみ神みことと命あ生あれましぬ

國魂くにたまの御子みこの泣なかせる産聲うぶごゑは

天津御空あまつみそらにひびき渡わたれり

六合よもやもにひびき渡わたりし言靈ことたまは

國魂くにたまがみ神みことの産聲うぶごゑなりけり

今日けふよりは眞鶴まなづるの國くにもかたらかに

いと安やすらかに榮さかえ行くかも

産玉うぶだまの神かみの守まもりに千代鶴ちよつるひめ姫ひめの

命みことは安やすく生あれましにける

神々かみがみは言いふも更さらなり後のちの世よの

人ひとにも幸さちあれ産玉うぶだまの嚴いづ

産玉うぶだまの神かみは今日けふより萬代よろづよの

末すゑの末すゑまで産屋うぶや守もりませ

昔むかしよりためしもあらぬ高山たかやまの

尾根おねに生あれます御子みこは氣高けだかき

うち仰あふぎ御子みこの面おもざし眺ながむれば

顯津あきつ男をとの神かみによくも似にませる

言靈ことたまの水い火きと水い火きとのむつび合あひて

生あれます御子みこのうるはしきかも

産聲うぶこゑを始はじめて聞ききたまゆらに

わが魂たましひ線しんは笑えみ榮さかえける

果はてしなき望のぞみ抱いだきて果はてしなき

この國原くにはらに榮さかえむとぞ思おもふ

千代鶴姫神の命を朝夕に

守りて國を治めむとぞ思ふ

わが戀はつもり積りて千代鶴姫の

國魂神と生り出でにけり

はしけやし國魂神の御聲に

四方の雲霧立ち去りにけり

天渡る天津陽光もさやかに

白梅薫るこれの聖所は

萬代の末の末まで國魂神の

御稜威照れよと吾は祈るも

朝夕に主の大神を祈りてし

むくいは今日の喜びなりける

眞鶴の山に歸りて國魂神を

永久にはごくみ育て守らむ

遠見男の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 瑞御靈神に仕へて今ここに

この喜びに會ひにけらしな

東雲と眞鶴の國を治めゆく

吾は嬉しも命生れましぬ

白駒の嘶き強く家鶏鳥の

鳴く音さやけし御子生れし今日は

常磐樹の松の梢にむらがりて

神世をことほぐ眞鶴の聲

玉藻山千條の瀧の音冴えて

吹く風すがし宮の清庭

種々のなやみ苦しみのびつつ

御子を生ませり顯津男の神は

八十年を待たせ給ひし玉野比女の

御心思へば嬉し悲しも

玉野比女の御手代となりし生代比女

神は功を立て給ひけり

瀧の音もいとさやさやに聞え来る

宮居の庭はいとも清しき

圓屋比古の神は御歌詠ませ給ふ。

玉手姫命を守る吾ながら

千代鶴姫の生れに會ひける

圓屋比古神は御魂を現して

瑞の御靈に従ひ來りぬ

御子産みの業をへ給ふ今日よりは

急いそぎ歸かへらむ三笠みかさの山やまに

三笠山みかさやまの百神等ももがみたちはわが歸かへり

待まちわぶるらむ空そらを仰あふぎて

いざさらば化身けしんのわれは歸かへるべし

瑞みづの御靈みたまよすこやかにませ

百神ももがみの御前みまへに白まをす吾われこそは

圓屋比古神まるやひこがみの御魂みたまなるぞや

圓屋比古神まるやひこがみの御魂みたまは右左みぎひだり

二ふたつに分わかれて守まもりゐたりき

いざさらば三笠みかさの山やまに歸かへるべし

百神等ももがみたちよすこやかなれかし

千代鶴姫命ちよつるひめみことの生おひ先さきを朝夕あさゆふに

吾われは祈いのらむ三笠みかさの山やまに

斯く述懐歌を歌ひ終り、圓屋比古の神は白駒の背に跨りて玉藻の山を下り、一  
目散に雲を霞と驅け出で給ふぞ雄々しけれ。

國中比古の神は御歌詠ませ給ふ。

久方の天は晴れたりあらがねの

地は澄み澄み射照らひにけり

天地も開くる思ひ今日の日の

千代鶴姫の生れまし目出度し

眞鶴の國の柱と生れませる

瑞の御靈の御子ぞうるはし

美しく雄々しくやさしくましまして

國魂神と生れます貴御子よ

玉藻山廻れる四方の國原も

今日の吉き日に霧晴れ渡りぬ

常磐樹ときはぎの松まつにむらがる眞鶴まなづるの

鳴なく音ねに千代ちよのひびきありける

東雲しののめの空そらに鳴なきたつ家鷄かけどり鳥の

聲こゑ清すがしもよ御子みこ生あれし今日けふは

駿馬はやこまの嘶いななき殊ことに美うるはしも

千代ちよ萬代よろづよのこゑをそるへて

たまきはる御子みこの生命いのちの永ながかれと

御名みな賜たまひけむ千代ちよ鶴つる姫ひめの命みことと

眞鶴まなづるの國くにの司つかさは生あれましぬ

恐おそれつつしみ朝夕あさゆふ仕つかへむ

四方よも八方やもに朝夕あしたゆふへの霧きり立たちて

小暗をぐらき國原くにはら今日けふより晴はれなむ

四方よも八方やもに霧きりなす湯氣ゆげの立昇たちのはる

わが國原くにはらの果はてもなきかな



果<sup>はて</sup>しなく擴<sup>ひろ</sup>ごり擴<sup>ひろ</sup>ごり限<sup>かぎ</sup>りなき

稚<sup>わか</sup>國<sup>くに</sup>原<sup>はら</sup>を知<sup>し</sup>食<sup>ら</sup>す御<sup>おん</sup>子<sup>こ</sup>よ

今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>よりは姫<sup>ひめ</sup>の命<sup>みこと</sup>の御<sup>み</sup>尾<sup>を</sup>前<sup>さき</sup>に

仕<sup>つか</sup>へて國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>を拓<sup>ひら</sup>きゆくべし

宇<sup>う</sup>禮<sup>れ</sup>志<sup>し</sup>穗<sup>ほ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

産<sup>うぶ</sup>聲<sup>こゑ</sup>を清<sup>すが</sup>しく聞<sup>き</sup>きぬ吾<sup>われ</sup>はただ

心<sup>こゝろ</sup>をどりてたへがたく思<sup>おも</sup>ふ

喜<sup>よろこ</sup>びの極<sup>きは</sup>みなるかも眞<sup>ま</sup>鶴<sup>なづる</sup>の

國<sup>くに</sup>魂<sup>たま</sup>神<sup>がみ</sup>は生<sup>う</sup>れましける

嬉<sup>うれ</sup>しさは何<sup>なん</sup>にたとへむ物<sup>もの</sup>もなし

かたじけなしと思<sup>おも</sup>ふのみなる

天<sup>あま</sup>渡<sup>わた</sup>る月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>の駒<sup>こま</sup>も歩<sup>あゆ</sup>み止<sup>と</sup>めて

みそなはすらむ生れし貴御子を

千代鶴姫命の生れまし壽ぐか

今日は梅ヶ香殊に芳し

白梅の花の梢に鳴きたつる

迦陵頻伽の聲も冴えたり

天そそるこれの高根に産聲を

擧げたる御子の姿たふとし

白玉のいすみ渡らひ赤玉の

輝き給ふ千代鶴姫の命よ

赤玉は緒さへ光れど白玉の

御子のよそほひ尊かりけり

たまきはる生命を永久に保ちまして

眞鶴の國を知食しめしませ

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

天津日もこれの聖所に降りまして

今日の吉き日を照らしましつ

天渡る月讀の舟は白玉の

光澄みきらへり白雲のあなたに

白雲のとばり破れて青雲の

肌ふかぶかと輝きにけり

主の神の澄みきらひたる御靈かも

この貴御子の面ざし清しも

足引の玉藻の山は高けれど

御子の功の高きに及ばず

顯津男の神の御稜威の尊さを

生れます御子の面に見るかな

生代比女戀の炎の燃え立ちて

固まり生れし貴の御子かも

天界は愛と善との世にしあれば

いかで恐れむ戀の思ひを

天界に戀てふ戀は多けれど

かかるためしは始めなりける

産玉の神は御歌詠ませ給ふ。

千代鶴姫命の産聲まつぶさに

聞きしゆ心とみに和めり

平けくいと安らけく産みませし

生代の比女の幸を思へり

眞鶴の國の要よ生代比女の

誠まことの戀こひは御子みこを生うませり  
水い火きと水い火き結むすび合あはせに生あれませし  
御子みこは國魂神くにたまがみにましける」

魂機張たまきはるの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

たまきはる生命いのちを永と久はに守まもるべし

國魂神くにたまがみと生あれます御子みこを

玉たまの緒をの生命いのちながらへ天界かみくにに

若返わかがへりつつ道みちに仕つかへむ

八雲やくも立たつ玉藻たまもの山やまの頂上いただきに

天地あめつち開ひらく神聲みこゑ聞きくかな

駿馬はやこまは御子みこの生あれます幸さちひを

うたふが如ごとく嘶いななきて居をり

眞鶴まなづるの聲こゑ勇いさましく聞きゆなり

常磐ときはの松まつのこずゑこずゑに

迦陵頻伽からびんが時ときじく歌うたひ家か鶏けの鳴なく

この神かみやま山かみは神みあらかの御舍みあらかよ

玉野宮たまのみやの清庭すがにはに立たちて國魂くにたまの

神かみの出いでまし壽ことほぐ今日けふかな

白梅しらうめの花はなの装よそほひ永とこし久へに

幸さきくあれませ千代鶴ちよつるひめ姫めの命みことよ

千代鶴ちよつるひめ姫め堅磐かきは常磐ときはの松まつヶ枝がえに

月日つきひ宿やどして幸さきくいませよ

結比合むすびあはせの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

水い火きと水い火き結むすび合あはせて生あれませる

國魂くにたまがみ神かみのすがた清すがしも

生代いくよひめ比ひ女め瑞みづの御靈みたまに水い火き合あせ

結むすび合あせて生あれます御子みこはも

主スの神かみの神言みことかしこ畏われみ吾われはしも

結むすび合あせの神かみと仕つかへし

むつかしき戀こひてふ戀こひもやすやすと

遂とげさせ給たまはむ結むす比あ合はの神かみは

山やまと海うみ結むすび合あせて燃もえ上ある

木き草ぐさも湯ゆ氣げも神かみ世よをうるほす

國魂くにたまの神かみ生あれましぬ生代いくよひめ比ひ女めの

神かみのよるこび思おもはるるかも

一ひと度たびは雄を猛たけび給たまひし生代いくよひめ比ひ女めも

なごみて御子みこを生うませ給たまひぬ

玉野湖たまのこの波なみををどらせ荒風あらかぜを

吹かせすさびし比女思ひ出すも  
今となりて白玉の御子を生みましし  
戀のすさびをあやしと思ふ  
神を戀ふるならば生代の比女のごと  
つらぬき通せ御子を生むまで

美味素の神は御歌詠ませ給ふ。

生れませる國魂神の御魂に  
美味はひおくり奉らむ  
美味素の神のさづくる味はひに  
四方の神々従ろひこそすれ  
味はひのなき御魂ならば如何にして  
この國原の治まるべきやは



天界かみくにのよろづのものはことごとく

味あじはひありて榮さかゆくものなる』

神々かみがみは各自おのもおのも述懐ゆつくわいを歌うたひ給たまひて、黄昏たそがれになりければ、各自おのもおのも寢所ふしどに入りて休やすませ給たまひぬ。

(昭和八・一一・一七 舊九・三〇 於水明閣 谷前清子謹録)

第三篇 眞鶴まなづるの聲こゑ

第一〇章 祈いのり言こと〔一九〇四〕

玉野比女の神、生代比女の神は、漸くに國魂神の安らに平に生れ給ひて眞鶴の國の基礎の固まりしを喜び給ひて、玉野大宮の清庭に立ち出で、白衣の長袖を山風かせにひるがへし乍ながら、左手ゆんでに白扇はくせんを持ち、右手めでに五百鳴いほなりの鈴すずを持ちて踊りをどつ舞まひつ、國土くにとう生かみうみ神生かみうみの完成くわんせいを祝しゆくし玉たまふ。即すなはち二女にぢよしん神は、

タタータラーリ タラーラー

タラー アガリ ララーリトー

チリーヤ タラーリ ララーリトー

と宇氣うけ伏ふせて踏ふみ轟とどろかし給たまひて、

アメツチ ヒラク トコヨナル

カミハキニケリ イサゴ イサゴ

イササゴ イサゴ ヤハレ ヤハレ

アハレ アハレ ワハレ ワハレ  
イヒレ イヒレ イヒレ イヒレ  
ヰヒレ ヰヒレ タラナ タラナ  
チリニ チリニ ツル又 ツル又  
テレネ テレネ トロノ トロノ  
コゴコ ククズ ケゲデ キギヂ  
タラナ トロノ ツル又 テレネ  
チリニ ハサザ ホソゾ フスズ  
へせぜ ヒシジタリ カムナガラホギス  
いろは にほへど ちりぬるを  
わがよたれそ つねならむ  
うみの おくやま けふこえて  
あさき ゆめみし 糸ひもせず

アアかむながらかむながら惟神々々 御みたま靈幸ひおはしませ』

斯かる所へ太元顯津男の神は薄き白衣を纏ひ給ひて大宮の沙庭に現れ、大麻を打振り打振り御聲も圓滿清朗に、少しの淀みもなく神言を宣り給ひぬ。其の祝詞の全文を此處に示し奉らむとす。

祈り

掛巻も畏き紫微天界に八隅知らすの大神の御靈代なる高天原は、天之峰火夫の神の住み極まり玉ふなる大御にしあれば、の神の彌廣殿にして、天津諸々數の極み孕み備はり神充實りに充實りて、一つの大御玉なるが、の巢定まるが故に天地火水の位を分ち、其天は道反の御玉を保ち、其地は足御玉を保ち、其火は幸御玉を保ち、其水は豊御玉を保ち保ち、其産靈は死反しの御玉を保つ。故れ地は高天原の中心に澱止り、水は地の守りとなり、火は磨擦て發り又相搏ちて燃え騰る。天は常しく定まりて伊機佐志を建つる、産靈は往來て誠を保つ、之を内外裏表とに結び統べ撮けて大靈元球と稱ふ。靈元球活用きて大御心となる。大靈

元球の精體大御身と成る。是故に世の皇胤は、大神の大玉體の内うちにまたく備はれる大御目なり、大御鼻なり、大御耳なり、大御口なり、大御手なり、大御足なり、大御胸なり、大御腹なり、御肺なり、御心なり、御脾なり、御肝なり、御腎なり、御筋骨なり、御腸なり、御腺なり、御爪毛なり。一つの大玉體にして諸の御名を分つ大元素は、是の神の項掛け玉たまふ美須麻留の大皇玉なるが故に、其組織分子の一條る脈にして、機臨旺精産靈せいじんて神人となり出でたるものにしあれば、敢て獨神立つ事ならず、皆諸共に産靈活りて全く纏り、更に私なく、更に離れ散る事なく、身擧りての神の皇胤なり。爰に大神は大御心を主どり玉ひて、紫微の天津高御座に大座しまし、大臣神は智慧を主どりて御火座に位し、小臣神は誨教を主どりて水座に位し、田身の神は手業足業を主どりて地座に位し、一つに産靈て天津大政事に事へ奉る。有りて久しき大神世を前後長く常しへに彌遠長く連らぎて、其條脈を守り、其姓を姓とし、其職を職とし、其家を家とし、交代かはるがはる生れ來りて、愛しく愛しく愛く愛く愛しく思ひやらる。其機綱きづなに寫り、み入りて、天津大至祖より幾萬數々の世を経て、今此身に至り、此身よりして子孫、曾孫、

玄孫、來孫、昆孫、仍孫、雲孫、脈孫、系孫、紀孫、遠孫、裔孫、やすさ孫、  
種孫、仁孫、素孫と成りて、數の限り繼ぎ繼ぎ連なりて常永に運りめぐる。其時々  
の色として、の大靈元球の組織經綸の條脈を、絲經、日次、月次、年次を貫緯  
て大神世を造らす。神御衣の神織に連なり、梭執る天津眞言を織り立て奉り、錦  
の花を開き、天津腺の眞實を産靈ぶ。故れ大神の大玉體は、世の腺を統  
べ坐せる大靈元球にして坐せば、大靈元球の腺なる神人として、獨り我立ち己  
立ち、身勝ち取り勝ち優勝劣敗類ひの穢き汚はしき鳥獸らの心を起し、魚蟲木草  
らの行を行ひて、神人の道に背く事しあれば、忽ち正しく天津誠の絲條を紊り、  
大靈元球の組織を破り、親心を亡ぼすにしあれば、即ち大神其儘の大玉體を  
亂り奉り、傷ひ奉り、惱め奉り、掛巻も綾に尊く言巻も綾に靈妙き大神の大  
玉體を穢し汚し奉る事にしあれば、諸の神人の惡む品となり、神の譴責る所とな  
り、御祖の崇る所となり、必ずしも溺れ漂ひと諸々の災にかかり苦しみ果てなむ  
を、畏きかもよ醜しきかもよ、大神の御心を痛め奉り、世を穢し己を苦しめ  
己を亡ぼし奉る。迷ひ溺るる事の甚しき憂とし思へば、現しく是禍津神の禍事な

れば、迅速く大麻を執り奉り、神直日大直日に見直し聞き直し奉りて、其過ちを改め奉り、其穢を潔ぎ奉り、其紊れを理め奉り、其破れをつなぎ奉り、清め潔め奉りて、再び犯し奉らしものをと誓ひ奉り、大い神小さき神人の悉々見慎み聞き慎み、伊澄み渡り奉る。かくての大御神其儘の大玉體は彌全く、彌尊く、彌貴く、彌靈妙に彌明りに澄み透らひ、大御稜威貫き徹りて、感伏ひ奉らざるものなく、大智慧の光りかがやきて、暗けき所なく、大御和みに賑み、大御温みに穆み、産靈徳り奉る。故れ今此の紫微天界の豊秋津洲の大御國に、神人と産靈成り出でたる神人は、即ち今の現にの大御神を五層の天界を知るしめし、大御座大神の大玉體の皇脈なれば、の神の大御心のまにまに畏み慎み、世の爲神人の爲と勵しむ勉め奉り、事に臨みては火に水に入る事を厭はず、誠の大神言とし知らば、道のまにまに白刃の林に入るも、亦烈しく射向ふ矢玉の中も更に厭はず、神進みに進みて、禍を攘ひ國を清むる、其麻柱の鋭き事、雷よりも烈しく、其程利の當れる事、太陽の往きます道よりも明白なり。諸々皆此の如くなれば、の大神は天津高御座にまし坐して、天津國を無窮に知るしめし、御褥の上に拱手まして、

御禱の神紋を融び徹して、十六面に普からしめ、數の限り理まりたる天津誠の大  
經綸を五ツ五ツに整き立て、大靈元球の組織のまにまに、世の事毎を明かに統べ  
知り玉ひて、天津法言の太法言を以て、禮のまにまに道のまにまに、明かに導か  
せ給ひて、助け玉ひ育て玉へと、高天原に有りとある大神等小神等、大臣神小臣  
神たち田身神等諸々を、乳兒の神に至るまで、一柱だも落し玉ふ事なく、生きと  
し生ける諸々は、塵の半分も残し玉はず、助け玉ひ恵ませ玉ひて、幾萬億々世々  
の後の後をも、政り治め玉ひて、天津の神の天津誠を祭らせ玉ひ、齋かせ玉ひ  
て、肝む天の誠を手握り玉ひ、無爲て事なき大神世を彌脩めに理め、彌平かに  
平らげ玉ひて、天津神代の神律その儘に、平けく安らけく、天津高御座に天津誠  
を聞しめし玉ひて、此皇脈を守り幸へ玉へと、畏み畏み伊宣り奉る

顯津男の神の御歌。

天晴れ天晴れ眞鶴の國は堅まりぬ



國魂神は生れましにける

ス  
の神の任さしの業のその一つ

目出度く成りし今日の嬉しさ

玉野比女生代の比女の眞心に

眞鶴國原輝き初めたり

男神我は高日の宮を出でしより

四柱の命生り出でにけり

八十比女神我を待ちつつ年さびむ

ことの悔しも獨り神われは

玉野比女神の誠に玉藻山の

常磐の松の色深みたるかも

麒麟鳳凰迦陵頻伽の聲冴えて

家鶏鳴き高し眞鶴國原

玉野比女の神の御歌。

𠄎 畏しや太元顯津男の神は

生言靈に國魂生ませり

生代比女神の神言のあらざらば

貴の神業は遂げざらましを

右左水火合はさねど斯の如く

御子生れまさば何を歎かむ

天渡る月さへ流轉の影を見る

われは全きを望むべしやは

生代比女の神の御歌。

𠄎 今となりて愧づかしきかも比古神を

想おもひて荒すさびし其そのの日ひおもへば

玉たま野の比ひ女め神かみの御み言ことを聽きくににつけて

足たらはぬわが身みの心こころ恥はづるも

よしやよし想おもひ死しなむとも愼つつしみて

あるべきものと思おもへば面おもほてる

貴うづの御み子こ生あれましし今日けふは嬉うれしくもあり

愧はづかしくも亦またありにけるかな

省かへりみれば諸も神がたちの御み面おもさへ

見みまゐらすも恥はづかしと思おもふ

玉たま野の湖うみの底そこまでかわきし情じやう熱ねつの

焰ほのほは遂つひに消きえてあとなし

今日けふよりは怪あやしき心こころを立たて直なおし

瑞みづの御み靈たまの神わ業ざさまたげじ

千ち代よ鶴つる姫ひめ命みこと生あれまし眞ま鶴なづるの

國くにに一つひとのわづらひもなし

わが業わざは千代ちよ鶴つる姫ひめの生あれましに

いよいよ重おもくなりなりにけらしな

別わかるべきべき岐美きみとし知しれど生あれし御子みこの

稚わかきを思おもへば岐美きみと在ありたき

岐美きみ戀こひて狂くるひし心こころのたまゆらの

萬世よろづよまでも残のこらむと悔くゆる

鬼おにとなり大蛇をろちとなりて狂くるひたる

わが戀こひごころ消けさむ術すべなし

成なり遂とげし戀こひにはあれど狂くるひたる

そのたまゆらの今いまに解とけなく

恐おそろしきものは戀こひかも身みも魂たまも

忘わすれ他のたの目めも愧はぢざりにけり

玉藻山たまもやま千條ちすぢの瀧たきに楔みそぎ身みして

この戀こひごころ萬代よろづよに消けさむ  
顯津男あきつをの神かみの心こころをなやませし  
吾われにも主すの神かみは赦ゆるし給たまひぬ  
この上うへはわが爲なせし業わざを改あらためて  
只ただひたすらに御み子こ育はぐまむ  
眞鶴まなづるの山やまの御魂みたまと永久とこしへに  
神かみのよさしの國土くにを守まもらむ  
顯津男あきつをの神かみは神生かみうみの職つかさなれば  
やがて眞鶴まなづる國くにを立たたさむ  
萬代よろづよの別わかれは吾われに惜をしけれど  
神業かむわざなれば諦あきらめむと思おもふ  
」

顯津男あきつをの神かみの御歌みうた。

生代比女神の心のすがしさに

われ安らげく旅立ちやせむ

我とても同じおもひの苦しさを

しのびて別れむ神生みの爲に

永遠の妻ならなくに悲しもよ

主の大神の神示重くして

たとへ我萬里の遠きに離るとも

汝がまことは永久に忘れじ

一度の水火と水火との結び合せも

御子生るまで深き赤繩よ

玉野比女神の心を思ふ時

われは涙に曇るのみなり

玉野森に久しく待たせ給ひたる

比女に對へむ言葉如何にせむ

荒野原萬里の旅に立ちながら

思ふは今日の別れなるべし

生れし御子の生長さへも知らずして

萬里の旅に立つ身は苦しき

八十柱比女神たちに次々に

逢ひつ別れつ苦しき我なり

木石にあらぬ身なれば我とても

もののははれは悟り居るなり

固まり初めし眞鶴の國今生れし

御子を殘して立たむ苦しき

常磐樹の松も榮えよ白梅も

時じく匂へわれはななくとも

凰も田鶴も家鷄鳥も諸鳥も

この神山に常永にうたへよ

迦陵頻伽清しき聲も今日よりは  
聽くすべなしと思へば惜しまる  
千木高く清く建ちたる玉野宮に  
別る思へばわが胸さびしも  
わが行かむ西方の國土は地稚し  
如何にせむかところ惱めり  
眞鶴國の神人等の心治めむと  
われは御前に神言祈れり  
天津御祖の大神の誠こそ  
神人の習ひて進むべき道よ

(昭和八・一一・二六 舊一〇・九 於高天閣 出口王仁識)

太元顯津男の神



本書紫微天界を説くに當り、同天界に於ける國土生み御子生みの神業に關して、最も關係の深き太元顯津男の神の神名に就いて、言靈學上より略解を試むる必要を感じたれば、その一言々々に依りて活用を示し置くなり。

オホモト四言の言靈解は、大正八年九月の「神靈界」雜誌「おほもと」號に略述しおきたれども、種々訂正すべき箇所多く、且茫漠として、捕捉するに難き點多々あれば、今回太元顯津男の神の神名を解釋せむとする機會に際し、今改めて其真相を言靈學の上より説明を加へ、以て瑞靈神の御職掌を明示せむと欲するものなり。

太元即ちオホモトの言靈を略解すれば、

オ聲は、ア行の第二段に位して即ち出なり、嚴也、稜威なり。總てア行は天位にして、父音なり、母音なり。アオウエイの五音は何れも横音に響くなり。是を天津祝詞には筑紫之日向之橋の大戸（音）と示されたり。

## オ聲の言靈

起る也、貴也、高也、於なり、興し助くる也、大氣也、大成也、億兆之分子を保  
有し且つ分子の始終を知る也。心の關門受納の義也、眞と愛の引力也、權利強烈  
なり、先天之氣也、大地を包藏し居る也、漸次に來りて凝固する也、外及也等の  
言靈活用を有せり。

## 水聲の言靈

天地萬有の始なり、母なり、矛盾なり、隱門なり、臍なり、也、袋なり、日の靈  
なり、上に顯る言靈なり、天の心なり、照り込む義なり、火の水に宿る也、掘な  
り、帆なり、父なり、太陽の名分なり、心に寫るなり、戀ふる也、見止る也等種々  
の活用あり。

## 毛聲の言靈

舫もやふなり、塊かたまるなり、亦またなり、者ものなり、累かさねなり、與くむなり、圓えんまん満まんを主つかさどるなり、  
下したに働はたらくなり、世よの芽め出だしなり、天あめ之の手てなり、數すう寄より數すう成なる也なり、伸しん縮しゆく有ある也なり、遂つひ  
に凝ぎようこ固こして物ものと成なるなり、本ほん元げんなり、土つちの上じやうめん面めんなり、水みづの座ざなり、分ぶん子しの精せいなり  
等とう種しゆじゆ々の活はたら用きあり。

## ト聲の言靈

男をとこなり、轟とどろくなり、解とくなり、基もとめなり、人ひとなり、昇のぼる也なり、萬ばん物ぶつの種たねを司つかさどつて一いちよ  
り百ももち千よろづ萬づの數すうを爲なす。夕きやう行うは總すべて前ぜん驅くの意い義ぎあり、十とう也なり、能よく産うみ出だす也なり、結むすび  
徹とほり足たる也なり、皆みな治をさまる也なり、結むすびの司つかさ也なり、形かたちの本ほん源げんなり、八や咫あたに走はしる也なり、世よの位くらゐな  
り等とう種しゆじゆ々の活はたら用きあり。

## ア聲の言靈

天也、地也、現也、無にして有也、顯出也、世の中心也、大物主也、晝也、御中  
主也、地球なり、圓象入眼なり、光線の力を顯す也、眼に留るなり、顯の形なり、  
近く見る也、大本初頭なり、名の魂なり、大母公なり、普くして仁慈也、の本  
質也、心の魂なり、其方面を見る也、低く居る也、全體成就現在なり、幽の形也、  
遠く達す也、陽熱備る也、アツクマリホトリマル也、悉皆歸之也、隠れ入る義な  
り、夜也、一切含藏する也。

### キ聲の言靈

上無き言靈也、君なり、一ツに盡し極め居る也、貫き續き居る也、スミキリなり、  
世を一眼に見定め居る也、靈魂球之精機也、靈魂現之神機也、打ち返す也、立返  
す也、世を統べ極まり居る也、持たざる物無き也、世の極祖極元の眞也、現在世  
を統べ主どり居る也、世を子に持つなり、本を結び結べ極まる也、限り極まり歸  
る也、人心一切に歸する也、神靈魂之極元府也、極母なり、下に這ひ渡るなり、

世界一切に歸し居る也、動植一切を握り居る也、打ち碎く也、築き堅むる也、イ  
聲の極上なり、下を助くる義なり、機也、木也、城なり、生なり、精なり、氣な  
り。

### ツ聲の言靈

強き也、續く也、機臨の大元なり、速力の極也、大造化の極力也、テウの結び也、  
突き貫く也、皆治まる也、大金剛力也、歸る事無き也、天神心氣機地妙體不離也、  
是をツと謂ふ。實相眞妙是をツと曰ふ。閒斷無き也、玉の藏也、靈々神々赫々也、  
平均の極也、の編羅紋也、是をツと曰ふ、此ツを身に私するを罪と曰ふ也、智  
量之府也、敢て生死無き也、機關の太元也、大元明王なり、決斷力也、凝縮まる  
也、宇の全象を保つ也、産靈の大元也、切り離す也、對偶力也、螺旋力也、照應  
力也、極度循環力也。

ヲ聲の言靈

結むすびて一いちと成なる也なり、食を也なり、シシモノ也なり、靈タ魂マ脈シ管ヒ也なり、ウオの結むすび也なり、靈たまの緒を也なり、  
形かたちを使し役えき爲なす也なり、自じ在ざいに使し役えき爲なす也なり、尾をなり、細ほそ長なが形かたちなり、緒をなり、長を也なり、治をさ  
まる也なり、教を也なり、躍を也なり、祭マツリ令マモ守ラシム也なり、マツヲレツク也なり、居を也なり、己おのれ也なり、呼よぶ聲こゑ也なり、をめ  
く聲こゑなり。向むかふものを緒を以もて繫つなぎ引ひき御ぎよする義ぎ也なり、男をとこの陰ヨ莖なり也。啼ヲ承ヲ諾ヲ也なり、上オ  
命オ下オ諾なり也、大オ氣ひとのすぢ一なり條なり也、青あを也なり、劣おとり降くだる也なり、別べつ派ぱの形かたち也なり、解とき分わけ掌つかさどる也なり、遠とほ  
く至いたる所ところ也なり、息いき也なり。

以上いじやうの言こと靈たま解かいに由よりて、太おほ元もと顯あき津つ男をの神かみの御ご名めい義ぎ、御ご活くわ動どうの大たい要えうを窺き知ちし得うべ  
きなり。

(昭和八・一一・二六 舊一〇・九 於更生館 出口王仁識)

第一章 魂反し〔一九〇五〕

魂こんさい祭さいを行おこなひ玉たまふその御みうた歌。  
太元おほもとあきつ顯津男をの神かみは、如衣ゆくえひめ比女かみの神かみの御魂みたまを招まねくとして、八種やくさの神歌みうたを歌うたひ、鎮ちん

(一)

アチメ オオオオ アメツチニ

キユラカスハ サユラカス カミハカモ

カミコソハ キネキコウ キユラカス

(二)

アチメ オオオオ イソノカミ

フルノヤシロノ タチモカト

ネカフソノコニ ソノタテマツル

(三)

アチメ オオオ サツヲラガ  
モタキノマユミ オクヤマニ  
ミカリスラシモ ユミノハスユミ

(四)

アチメ オオオ ノボリマス  
トヨヒルメガ ミタマホス  
モトハカナホコ スエハキホコ

(五)

アチメ オオオ ミワヤマニ  
アリタテル チガサヲ  
イマサカエデハ イツカサカエム

(六)

アチメ オオオ ワキモコガ  
アナシノヤマノ ヤマヒトト



ヒトモミルカニ　ミヤマカツラセヨ

(七)

アチメ　オオオ　タマハコニ

ユウトリシデテ　タマチトラセヨ

ミタマカリ　タマカリマカリ

マシシカミハ　イマゾキマセル

(八)

アチメ　オオオ　ミタマカリ

イニマシシカミハ　イマゾキマセル

タマハコモチテ　サリタルミタマ　タマカヤシスヤナ

斯かく招せう魂こんの神み歌うたをうたひ給たまふや、如ゆ衣く比え女ひめの神かみの神しん靈れい忽たちまち感かん應おう來らい格かくして、春しゆん風ふう  
到いたり芳はう香かう薰くんじ、常と磐きは樹ぎの松まつは前ぜん後ご左さい右うに揺ゆれ動うごきて、他た神しんの目めにも歴れき然ぜんと御み姿すがたを  
拜はいし得うるに至いたれり。茲こゝに顯あ津きつ男をとこの神かみは御み歌うた詠よませ給たまはく。

神かむさ去りし如衣比女神ゆくえひめがみは大前おほまへに

珍めづらし御姿かげを顯あらはし給たまへり

我われと俱ともに在ありし其その日ひと比くらぶれば

一ひと入しほ御姿すがたたふとくおはすも

四よは柱しらの御子みこ生うみをへし今日けふの日ひを

祝いはひて比女ひめの御魂みたま招まねきぬ

靈界れいかいによし坐ましますともわが造つくる

紫微たかあまはら天界あまを守まもらせたまへ

如衣比女神ゆくえひめがみの神去かむさりましてより

われは心こころを建たて直なほしたり

公きみの魂たまわが身邊しんべんを守まもりますか

今日けふまで事こと無なく神業みわざ仕つかへし

朝夕あさゆふに公きみを慕したひしわが靈たまも

神業みわざせはしくかへりみざりき

漸やうやくに眞まなづる鶴つるの國くにの生なりたれば

公きみの功いさををおもひてまねきし

在ありし日ひの事こと思おもひ出いで比ひ女めの魂たまを

わが眞まごころ心に招おぎ奉まつりける〆

如ゆ衣くえ比え女ひめの神しん靈れいは、しとやかに御み歌うた詠よませ給たまふ。

何なに事ことも主すの大神おほかみの御み心こころぞ

御み魂たまとなりてわれ仕つかへゐるも

瑞みづ御み靈たまわれを招まねかす眞まごころ心に

ほだされ此こ處こに降くだりつるはや

八やく雲も立たつ出いづ雲もの雲くもの八や重へく雲もを

かきわけ玉たま藻もの山やまに降くだりし

身からだ體たは太を蛇ろちに吞のまれ失うするとも

わが魂線の生命は永久なり

中津瀧にわが魂線は洗はれて

罪穢れなき今日の身軽さ

幽界に吾生き生きて瑞御霊

大御神業を守りまつらむ

千代鶴姫命の生ひ先き朝夕に

岐美の御霊と思ひて守らむ

頼みなき顯世を吾のがれ出でて

永久の生命の天國に榮えつ

八十比女神御魂守りて主の神の

よさしの神業あななひまつらむ

いざさらば雲路を別けて歸るべし

主の神います天津高宮へ

戀ひなづむ心なけれど別れゆく

このたまゆらの惜しまるるかな

顯津男の神の御歌。

果てしなき紫微天界の中にして

水火と水火とを合せたる公よ

天路はるか下り來まして今直ぐに

歸らす公を惜しくも思ふ

主の神のよさしの神業をへぬれば

われも天界に昇らむと思ふ

久方の天津高宮主の神の

御前戀ふしくわれなりにけり

眞鶴の國はやうやく生れたり

この行く先の悩みを如何にせむ

さまさまの惱みにあひて國土造る

われをたすけよ如衣比女の御魂

如衣比女の神は輕き御姿を現しながら、御空の雲を押し別け神馬に跨り、いう

いうとして、天津高日の宮のあなたをさして歸らせ給ひぬ。

玉野比女の神は、そのやさしく神々しき御姿を拜しまつりて、御歌詠ませ給ふ。

畏しや如衣の比女の神の御魂

紫微宮の状を具さに宣らせり

仰ぎみるさへも眩きばかりなる

如衣の比女の姿たふとき

生死の差別さへなき天界と

悟りてわれは神世を楽しむ

死りたる神も姿を現して

言靈宣らす神世ぞ畏し  
ことたまの  
みよかしこ

朝夕を玉の泉に禊して  
あさゆふ  
たま  
いづみ  
みそぎ

清まりし目にうつらす御姿  
きよ  
め  
うつらす  
みすがた

魂は幾萬代の末までも  
たましひ  
いくよろづよ  
すゑ

生きてはたらく由を悟りぬ  
い  
よし  
さと

吾は今年さびぬれど魂線の  
われ  
いまとし  
たましひ

生命の若きを思へば樂しも  
いのち  
わき  
おも  
たの

生替り死替りつつ神の世に  
いきかは  
しにかは  
かみ  
よ

永久に仕へて國土を守らむ  
とほ  
つか  
くに  
まも

中津瀧の大蛇の腹に葬ふられし  
なかつたき  
をろち  
はら  
は

如衣の比女は生きてゐませし  
ゆくえ  
ひめ  
い  
ま

顯津男の神の悲しき御心を  
あきつを  
かみ  
かな  
みこころ

思へば知らず涙こぼるる  
おも  
し  
なみだ

鶏の尾の長の別れと思ひてし  
とり  
を  
なが  
わか  
おも

如衣ゆくえの比女ひめに岐美きみはあひませり』

生代比女いくよひめの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

☪  
神去かむさりし如衣ゆくえの比女ひめの御姿みすがたを

いま目まのあたり拜をがみて驚おどろきぬ

かねてよりかかる例ためしのある事ことは

聞きけども今更いまさらおどろきにけり

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやに仕つかへます

如衣比女神ゆくえひめがみの御姿みすがた清すがしも

顯津男あきつをの神かみの御心みこころ推おしはかり

われは思おもはず涙なみだにくれたり

生き生きて神かみの御殿みとのに仕つかへます

如衣ゆくえの比女ひめの幸さちを思おもふも



愛善あいぜんの天界てんがいなればスの神かみの  
厚あつき心こころに護まもられにけむ  
生死いきしにのなき天界てんがいに玉たまの緒をの  
生命いのちを保たもつ身みこそ幸さちなれ㊦

遠見とほみ男をの神かみの御歌みうた。

玉藻山たまもやまの上うはつ岩根いはねの清庭すがにはに  
天降あもりて御言みこと宣のり給たまふ比女ひめよ  
隠かくり世よに坐いませし神かみの瑞御靈みづみたまの  
生言靈いくことたまによみがへり坐ましぬ  
たまきはる生命いのちを常永とほに天國てんごくに  
保たもちて神業みわざに仕つかふる比女神ひめがみよ  
愛善あいぜんの光ひかりと徳とくに充みたされし

神國の神人の姿やさしも

御子生みの神業をへて神國に

のぼりし神人の姿生きたり

玉藻山の此の清庭に天降りたる

如衣比女神のいとしき心よ

瑞御靈の神の心の雄々しさよ

すべての執着を打ち拂ひつつ

宇禮志穗の神の御歌。

足引の山の尾の上に袂身して

死りし神人に逢ひし不思議さ

死りたる神人と思ひしを目のあたり

生ける御姿拜みけるかも

玉たまの緒をの生いきの命いのちの果はてしなきを  
見みつつ天界みくにに生あれしを嬉うれしむ  
眞まなづる鶴つるの國くに生あれ出いでし目め出で度たさに  
天あ降もり坐ましけむ如ゆくえ衣ひ比め女の神かみは  
生い代くよ比ひ女め神かみは嘸さそかし嬉うれしからむ  
國くに魂たま神がみの子こやすく生うまして  
御み子こ生あれし玉たま藻もの山やまの頂いた上だきに  
玉たまの神かみの子こ生あれし嬉うれしさ  
みまかりし神かみも御山みやまに降くだりきて  
御み子こ生あれますを壽ことほぎ玉たまへり  
」

美波志比古みはしひこの神かみの御歌みうた。

久方ひさかたの空そらにも御橋みはしの架かれるか

如衣比女神往來ましけり

久方の天の浮橋渡らひて

天津高宮に歸らず女神はも

眞鶴の國やうやくに固まりて

死れる神もことほぎに来る

目出度さの限りなるかも眞鶴の

國魂神は産聲冴えにつ

瑞御靈御魂反しの宣り言に

如衣比女神天かけり來ませる

言靈の御稜威の力今更に

覺らひにけり魂反しの祝詞に

村肝の心正しき神司の

生言靈の神妙なるかも

産玉うぶだまの神かみの御歌みうた。

ㄣ  
かくり世よの神かみも来りて玉藻山たまもやま

御子みこ生れし日ひをことほぎ玉たまへり

神妙くすしくもあるかな既にすで身死みまかりし

神かみも天降あもりて國くにを祈いのらす

顯津男あきつをの神かみの苦しくるき御心みこころを

俣しのびまつれば吾堪われたへ難がたきも

地つち稚わかき國くに土つは次つぎに固かたまりて

隱世かくりよの神かみさへ天降あもり坐ましぬる  
ㄣ

魂機張たまきはるの神かみの御歌みうた。

ㄣ  
魂機張たまきはるる神かみ人の神言みことの尊たふとさよ

生死いきしにひとつ一如さかに榮はえ果はてなき

萬ものみな有つかさの主あ宰あと現あれし神かみ人みの身みは

とこしへまでも亡ほろびざるべし

常とことは遠いのちの生たも命たも保かみちて天かみ界くにの

神みわざ業つがに仕かふる神かみ人みぞ幸さちなる

鎮たましづ魂やくさの八かみ種ことの神かみ言こと宣のりまして

死まかれる神かみ人みを招おぎ給たまひしはや

言こと靈たまの天あまて照たすり助くる國くになれば

斯かかる例ためしもあるべかりける

千ちよつ代るひ鶴め姫み命ことの生あれますこの山やまに

鶴つるのうたへる聲こゑは澄すめるも

幾いくちとせ千よ年うづとせ萬よ年うづとせまでひめみこと姫み命こと

しづまりいまして國くに土まも守もりませ

美味素の神の御歌。

天國は尊き國よ甘美し國よ

常永に生死の境なれば

生き生きて生きの榮えの果てしなき

天津神國の住居たのしも

吾は今生死一如の眞諦を

悟りて心勇み立つなり

久方の天津高宮ゆはるばると

天降りし神の心愛はし

愛善の天津神國の眞諦を

いま目のあたり見つつ樂しも

玉の緒の生命は永久に亡びざるを

覺る今日こそ樂しき吾なり

地つち稚わかき玉たま藻もの山やまの山やまの尾をに

死まかりし神かみの御み姿かをがめり

瑞みづ御み靈たまの生いく言こと靈たまの味あぢはひに

天あも降たまり給たまひぬ如ゆくえ衣ひめ比が女神がみは

愛あいの善ぜん信しんの眞しんをも旨むねとして

生あれし天みくに國には歡よろこ喜びの園そのなり

とこしへの生いのち命を保たもつ天かみ界くにに

生うまれし幸さちをたふとみ思おもふも  
㊦

結むす比び合あの神かみの御み歌うた。

㊦ 久ひさ方かたの御み空そらは高たかしあらがねの

大おほ地ぢは廣ひろし生いのち命はながしも

生いき死しの別わかちなき天よ界に生うまれあひて



樂たのしきものは言こと靈たまの幸さちなり  
』

國くに中なか比ひ古この神かみの御み歌うた。

㊦ 地つち稚わかき眞まな鶴づる國くにの國くに中なかに

珍めづしき神み事わざをろがみにけり

アチメオオ 才たま魂がへ反たしの行わざに

如ゆ衣くえ比ひ女め神がみ天あ降もりましけり  
』

（昭和八・一一・二六 舊一〇・九 於更生館 出口王仁識）

第一二章 鶴つるの訣わか別かれ（一）（一九〇六）

天地の一切萬有は、總て言靈の水火の活用によりて生れ出でたるものなる事は、  
前卷既に述べたるが如し。例へばカコクケキの言靈幸ひて鳥、家鷄鳥、鵲等の鳥  
族生り出で、其聲音も亦カコクケキを發するは其象徴なり。雀、鼠、其他の禽獸  
は、タトツテチの言靈幸ひて生れたるをもつて、今に其聲音を保ち、猫の如きは  
ナノ又ネニに生れ、牛の如きはマムメミより、馬の如きはハホフヘヒより、犬  
の如きはワヲウエトより、其他各禽獸蟲魚は生れたる言靈の聲音を萬世に通じて  
發するものなり。

茲に顯津男の神は眞鶴國の修理固成やや緒につきたれば、七十五聲の言靈を宣  
り給ひて、天界に必要な禽獸蟲魚及び木草のはしに至るまで、生言靈の水火に  
よりて生み出で給ひたるこそ畏けれ。

☞ 天晴れ天晴れ生言靈の幸ひに

百の翼はなり出でにけり

畏くも生言靈の天照りて

國土は次ぎ次ぎ固まりにける

冴えわたるスの言靈に天地を

包みし雲も消え失せにける

立つ雲のかげも消えたり言靈の

御稜威は天地に澄みきらひつつ

長き世の末の末まで言靈の

水火は榮えて生命を守らむ

花咲きて稔り豊けき國原は

スの言靈の幸ひにこそ

まるまるとわが言靈は響くなり

吹き來る風も柔かにして

安國と治め澄まさむ言靈の

嚴の力を腹に充たして

若草の妻は御子をば生ましけり

この眞鶴まなづるの國くにの柱はしらと

いすくはし生言靈いくことたまに生なり出いでし

森羅萬象すべてのものに生命いのちありけり

木きに草くさにおく白露しらつゆの光ひかりさへ

生言靈いくことたまの水みづ火かのこもれる

白雲しらくもの墜居をりゐ向伏むかふすそのかぎり

ススの大神おほかみの御水み火かに生うまれし

塵芥ちりあくた積つもり積つもりて地つちとなり

木草きぐさの種たねは萌もえ出いづるなり

賑にぎはしく榮さかゆる國土くには言靈ことたまの

水みづ火かの力ちからの功いさをなりけり

日ひも月つきもスの言靈ことたまの御水み火かより

生あれしを思おもへば畏かしこくぞある

水みづ清きよき千條ちすぢの瀧たきも非時ときじくに

宣の言こと靈たまはさやかなるかも

五十いそ鈴すずをふれるが如ごとく常とき磐はぎ樹ぎの

こずゑは風かぜに言こと靈たま宣のるも

生いき生いきてまかるべきもの一ひとつなき

わが天かみ界くには言こと靈たまの國くに土によ

美うつくしき天あま津つ神み國くにのなり立たちも

スの言こと靈たまぞはじめなりける

國くに土につく造みり御み子こ生うむ神わ業ざも言こと靈たまの

水い火きの力ちからの功いさをなりけり

スの聲こゑは總すべてのもの元もと津つ親おや

スの神かみこれに現あれましにける

月つきも日ひも澄すみきらひつつ大おほ空ぞらに

輝かがきたまふも言こと靈たまの水い火き

奴ぬ羽ば玉たまの闇やみも晴はれゆく言こと靈たまの

水火いの力ちの大おいなるかな

吹ふく風かぜの音おとにも見みゆる言こと霊たまの

強つよき力ちからのたふとき功いさよ

蒸むしわかし天地あめつちなりし其その元もとは

水い火きと水い火きとのむすびなりけり

ゆがみなき誠まこと心の言こと霊たまは

生いきて活は用たらきすべてをを生うませり

美うしき生い言こと霊たまの幸さちひに

この天か界みくには生あれ出いでしはや

ゑらゑらに歡よろこぎ賑にぎはふ言こと霊たまの

水い火きと水い火きとは神かみをうませり

景け色しきよき眞ま鶴づる國くにの國くに形がたは

皆みな言こと霊たまゆ生あれ出いでしはや

跼せまりぬきあしなしつ天地あめつちの

中なかに生いきたるわが言こと靈たまよ

光てり照てりて神みくに國を清きよむる天あま津つ日ひの

光ひかりもいづの言こと靈たまなりける

音ねいろ色よきよき蟲むしの鳴なく聲こゑ耳みみすませ

聞きけばのこらず言こと靈たまの水い火きよ

荒あらの野はら原へめぐ經めぐ廻りここに眞ま鶴なづるの

生いく國く原にはらは生あれ出いでにけり

目め出で度たさの限かぎりなるかも國くに魂たまの

神かみ生あれましぬ生いく言こと靈たまに

選えらまれて瑞みづの御み靈たまと生うれたる

我われは言こと靈たまの局つぼなるかも

笑ゑみ榮さかえ果はてしも知しらぬ喜よろこびの

國くに土に言こと靈たまに永と遠はを生いくるも

起おきて見みつ寢ねてみつ玉たま藻もの山やまの上へに

心こころ樂たのしき眞ま鶴なづるの國くに

衣ころも手を撫なでゆく風かぜも言こと靈たまの

水い火きと思おもへば尊たふとかりける

そよと吹ふく風かぜの響ひびも言こと靈たまの

水い火きの力ちからの幸さちひにこそ

鳥獸とりけもの蟲類むしけらまでも言こと靈たまを

のらざるはなし神かみの御國みくには

野のに山やまに生いく言こと靈たまの幸さちひて

百もも花ばな千ち花ばな咲なきみつるなり

ほのぼのと遠とほ山やま霞かすみ近ちか山やまは

緑みどりに萌もゆる言こと靈たまさき國くによ

もろもろの鳥獸とけだものや草木くさき蟲むし

魚うをも残のこらず生うみし言こと靈たま

夜晝よるひるの差別けぢめわかちて萬有もろもろを



動かうごかせやすことます言こと霊たまの幸さちよ

面白おもしろし心こころ爽さわけし言こと霊たまの

水い火きにみちたる國くに土にに生うまれし

國くに魂たまの神かみ生あれましぬ生い代くよ比ひ女め

育はぐくみまつれ神かみのちからに

我われは今いま國くに魂たま神がみを生うみへて

西にし方かたの國くに土にいざや拓ひらかむ

玉たま野の比ひ女め神かみの神み言ことは玉たま藻も山やま

神かみの御み前まへに永と遠はに仕つかへよ

國くに中なか比ひ古こ神かみは國くに魂たま神かみ守もりて

眞ま鶴つるの國くにを永と遠はにひらかせ

遠とほ見み男をとこの神かみは南みなみの國くに原はらを

すべ守まもります職つとめ掌めなるぞよ

産うぶ玉たまの神かみは千ち代よ鶴つる姫ひめ御み子この

生おひたたすまで守まもりたまはれ

美み波は志し比ひ古こ神かみは往ゆ來きの道みち芝しばを

永と遠はに守まもりて神み業わざたすけよ

魂たま機きは張はる神かみは眞ま鶴なづる國くに魂たまの

命みことを守まもれ千ち代よに八や千ち代よに

萬もろ有もろの水い火きと水い火きとを結むすび合あせ

國くにの榮さかえを永と遠はに守まもらへ

眞ま鶴なづるの國くにに生なり出いづる萬もろ有もろに

味あぢはひ與あたへて世よを守まもりませ

いざさらば我われは別わかれむ玉たま藻も山やま

ふたたびふまむ時とき樂たのしみて

斯かく生いく言こと靈たまを宣のらせつつ玉たま野の宮みや居ゐの神しん靈れいに別わかれをつげ、天あめの白しろ駒こまにひらりと跨またが  
り、單たん騎き出しゅ發つぱつせむとし給たまひしぞ雄を々をしけれ。

仰あふぎ見みれば雲くもの彼かなた方たにかすみたる

西にし方しかたの國くにの遙はるけくもあるか

國くに土にを生うみ御み子こを生うみつつ果はてしなき

旅たびゆく我われはやすらふ間まもなし

萬よろづよ代の基もと礎とみを定さだむる言こと靈たまの

わがゆく旅たびに曲まがなさやりそ

久ひさ方かたの天あめの高たか日ひの宮みやを出いで

けながくなりし國くに土に生うみの旅たび

わが思おもひはるけかりけりスの神かみの

います宮みや居ゐにかへり言こと申まをすまで

八や十そ比ひ女めはあれどもわが身み一ひとつにて

國くに魂たま生うまむことの苦くるしき

御み子こ生うまばすぐ立たち出いづる言こと靈たまの

わが旅たびこそは何なにかさみしき

玉野比女生代比女神のやさしかる

心思ひて去りがてに居るも

常磐樹の松の梢に鳴く鶴の

聲も一人今日はかなしき

家鶏鳥の鳴く音も曇る心地して

名残惜しみつ別れむとすも

行く先は如何にならむとわづらひつ

スの言靈を力と出でゆかむ

國土稚き大野の原をはしりゆく

駒の蹄のゆきもなやまむ

いざさらば百神達よ別れむと

駒に鞭うちいでむとしたまふ

茲に玉野比女の神をはじめ、御供に仕へ來りし神等は別れを惜しみ、顯津男の

神かみの乗のらせる駒こまの轡くつわをとり、暫しばしの間まと引きとめながら名残なごりの御歌詠みうたよませ給たまひける。

（昭和八・一一・二七 舊一〇・一〇 於水明閣 加藤明子謹録）

### 第一三章 鶴つるの訣別わかれ（二）「一九〇七」

太元おほもと顯津男とあきつをの神かみは白駒しらこまに跨またがり、西方にしがたの國土くにを指さして、御子みこ生うみの神業みわざに立たたむとし給たまふや、玉野たまの比女ひめの神かみは御馬みうまの轡くつわを片御手かたみてに採とり、片御手かたみてに御杯みさかづきを捧ささげて訣わか別れを惜をしみつつ、御歌詠みうたよませ給たまふ。

☞ 天晴あはれ天晴あはれ岐美きみは今旅いまたびに立たたすかも  
玉藻たまもの山やまの御前みまへに仕つかへむ吾われは淋さびしも  
惟神かむながらかみの經綸しぐみと思おもへども

あまり本意なき今日の訣別よ

榮え行く國土の秀見つつ出で立たす

岐美の心を愛しとおもへり

立ち別れ出で行く岐美を懐かしみ

燃ゆる心を消すすべもなし

何事も主の大神の御心と

思へど苦しき訣別なるかも

白梅の花白々と匂へども

岐美なき春は淋しかるらむ

眞清水に心清めて岐美が行く

道の隈手の幸を祈らむ

八洲國水火を凝らして國土を生み

御子生ます岐美の雄々しくもあるか

若草の妻は彼方此方岐美を待てど

忘れ給ふな玉野の比女を  
生代比女神は國魂神の御子

育くみながら岐美慕ひまさむ

霧立ちて玉藻の山の中腹に

迷ふを見ればわれはかなしも

白雲の向伏す彼方の稚國土に

立たさむ岐美を思へば悲しも

千早振る神も諾ひ給ふらむ

今のかなしきわが心根を

西方の國土は曲神澤ありと

聞けば一入岐美をあやぶむ

晝も夜も岐美のみゆきに幸あれと

吾は祈らむ玉野宮居に

瑞御靈進まむ道に仇神は

なしと思へど心もとなき

幾千代の末の末まで岐美の神業

幸くあれかし榮えあれかし

玉泉瀧となる世のためしあり

再び會はむ日こそ待たれつ

美しく國土生み御子を生みをへて

岐美は立たすも西方の國土に

國土稚く國魂の神稚くして

旅に立たする岐美ぞ畏き

主の神の神言畏み片時も

心ゆるめぬ雄々しき岐美よ

月も日も岐美の行手を照らしつつ

貴の神業をたすけ給はむ

奴羽玉の闇迫るとも月讀の



神は岐美の邊照らし給はむ

降る雨も雪霜霰も心せよ

國魂生ます岐美の旅路を

むつまじく仕へ奉りし瑞御靈に

今は悲しき訣別となりぬる

夢うつつ幻のごと思ふかな

岐美に別るるこのたまゆらを

浮雲の空に聳ゆる玉藻山の

聖所に今日は心しづむも

縁あらばまた逢ふ事のあらむかと

頼りなき日を頼りにまつも

汚れたる心もたねど瑞御靈

岐美に別るる今日は悲しも

背に腹は代へられぬ世と覺りつつ

岐美きみの旅出たびでを止とめたく思おもふ

手てを合あはせ神かみの御前みまへに祈いのれども

岐美きみの旅立たびだち止とどむる由よしなき

懇篤ねもごろに教をしへ給たまひし言靈ことたまの

光ひかりは吾われに添そはりてあるも

上うへもなき生言靈いくことたまの清すがしさに

玉藻たまもの山やまは高たからみにけり

めきめきと伸のび擴ひろごれる玉藻山たまもやまも

汝なが言靈ことたまの水い火きのたまもの

神々かみがみは歡よろぎ喜よろび萬代よろづよの

端はしまで岐美きみが功いさををあがむ

選えらまれて神生かみうみの神業わぎつか仕つかへます

戀こふしき岐美きみと別わかるる悲かなしさ

畏かしこしや訣別わかれむとして今更いまさらに

戀ふしくなりぬ瑞御靈の岐美を

心より慕ひ奉りし岐美ゆゑに

今日の訣別は一入つらし

いざさらば神酒きこしめせ永久の

訣別の涙ささげ奉らむ

常永に忘れ給ひそ御杯に

漂ふ神酒はわが涙ぞと

この神酒を半ば飲ませて其半ば

吾に賜はれ戀ふしきの岐美

一夜の水火の契は交はさずも

われは正しく汝が妻ぞや

茂久榮に榮えましませ萬世の

終なき神世の果つる時まで

世を固め國土を治むる神業の

一方ひとかたならぬ岐美きみの旅たびはも

太元おほもとの顯津男あきつをの神瑞御靈かみみづみたま

御名みなは心こころの永久とこほの光ひかりよ

生代比女いくよひめの神かみは、訣別わかれを惜をしみて御歌詠みうたよませ給たまふ。

可あたら惜しも岐美きみははるばる今日けふの日ひを

限かぎりに訣別わかれて旅たびに立たたすも

悲かなしきは今日けふの訣別わかれよ眞鶴まなづるの

聲こゑもさびしく梢しずなに鳴なけり

冴さえ渡る御空みそらはひたに曇くもらひつ

岐美きみが訣別わかれを惜をしむがにみゆ

たらちねの母はははあれども父ちちのなき

千代鶴ちよつるひめ姫ひめの命みこと愛かなしも

涙なみだもて別わかるる岐美きみの御姿みすがたを

永久とほに偲しのびて吾われは泣なくなり

果はてしなき荒野あらのが原はらを旅たび立たす

雄を々をしき岐美きみを思おもひて涙なみだす

まめやかに生いき榮さかえつつ國くに土に生うみの

神業みわざいそしみ榮さかえませ岐美きみ

八洲やしまくに國くに土にのこごと御子みこ生うみて

主すの大神おほかみに報むくい給たまはれ

若草わかぐさの妻つまは彼方あちこち岐美きみ行ゆかす

吉日よきひ待まちつつ指折ゆびをらすらむ

いすくはし岐美きみの姿すがたは永久とこしへに

いのち死しすまで忘わすれざるらむ

岐美きみ坐まさぬ眞鶴山まなづるやまに淋さびしくも

鎮しづまり御子みこを吾われは育そだてむ

白駒しらこまの嘶いななきさへも今日けふの日は

別わかれ惜をしむか悲かなしげなりけり

千早ちはや振ふる神かみの神國みくにを固かためむと

岐美きみは朝夕あさゆふ心こころなやますも

和衣にぎたへの綾あやの薄衣うすぎぬまとひつつ

風かぜに吹ふかるる岐美きみぞいたまし

晝夜ひるよるの差別けぢめもわかずなりにけり

訣別わかれの涙なみだに目めはくもらひつつ

瑞御靈みづみたま今日けふの訣別わかれを思召おぼしめし

思おもひ起おこせよ生代いくよの比女ひめを

五百いほなり鳴なの鈴すず打ち振ふりて瑞御靈みづみたま

今日けふの旅立たびだち送りまつらむ

いざさらば踊をどり奉まつらむみそなはせ

生言靈いくことたまの鈴すずの音ねの冴さえを

斯く歌ひ給ひて、生代比女の神は左手に鈴を持ち右手に榊葉を振り翳しながら、  
しとやかに歌ひ踊り舞ひ、瑞の御霊の旅立ちを慰め給ふ。

美しの國土は生れし美しの

岐美は今日を旅立ち給ふ

國魂の神を生みをへ國魂の

又神生まむと出で立つ岐美はも

澄みきらふ御空も今日は曇りたり

訣別のなみだ雲とのぼりつ

月も日も隠るるまでに包みたる

御空の雲はわが思ひかも

奴羽玉の心は闇にあらねども

今日の訣別にふさがりにけり

吹く風も力なきまで弱りたり

岐美きみの旅たびだち惜をしむなるらむ

生うまれ逢あひてかかる悲かなしき日ひに逢あふも

神かみの御み爲ためと思おもひて慰なぐさむ

ゆるせかしわが繰くり言ことをとがめずに

女神めがみのよわき心こころはかりて

憂うきことの次つぎ次つぎ重かさなる神み世よなれや

紫たか微あま天ま界はらの貴うづの眞ま秀ほ良ら場ばにも

天地あめつちの縁えにしの絲いとにむすばれて

瑞みづの御み靈たまの御み子こ生うみにける

怪けしき心こころ永は久はに持もたねど汝なが岐き美みに

訣わか別かる思おもへば涙なみだあふるる

せきあへぬ涙なみだとどめて雄を々をしくも

旅たび立だつ岐き美みを送おくる今け日ふかな

手ても足あしも動うごかぬまでにゆるぎたり



訣別わかるる今日けふを力ちからおとしつ

ねもごろなる言靈ことたまの水い火き凝り凝りて

國魂くにたま神がみはうまらに生あれましぬ

隔へだてなき水い火きと水い火きとの結むすび合あせも

今日けふを終をりと思おもへば悲かなしも

目めに涙なみだあらはさじものと思おもへども

とどめあへぬかな瀧津たきつな涙みだは

笑顔えがほして訣別わかるる岐美きみの心根こころねを

思おもへば一入ひとしほ悲かなしかりけり

永久とことはの訣別わかれと思おもへば悲かなしもよ

千代鶴ちよつる姫ひめを抱かかへしわが身みは

大野原おほの駒こまに跨またり出いで立たたす

岐美きみのみゆきに御幸みさちあれかし

越國こしくにの果はてに居あますも時折ときをりは

千代鶴ちよつるひめををかへりみましませ

そよと吹ふく風かぜの響ひびきも心こころして

岐美きみの言靈ことたまとうかがひ奉まつらむ

遠とほき近ちかき差別けぢめなけれど別わかれ行ゆく

岐美きみの御姿みすがた悲かなしかりけり

野のに山やまに百花ももばな千花ちばな匂にほへども

岐美きみなき春はるは樂たのしくもなし

ほのぼのとあらはれ初そめし眞鶴まなづるの

山やまの尾をの上へは空そらに霞かすめり

もろもろの生命いのちをうます言靈ことたまの

岐美きみに別わかるる今日けふとはなりぬ

世よの中に斯なかる悲かなしき例ためしありと

今いまの今いままでさとらざりしよ

大方おほかたの春はるはふけつつ白梅しらつめの

花も今日より散り初めにけり  
晴れし空に雷轟く心地して  
悲しきものは今日のおどろき  
果しなき思ひ抱きて旅立たす  
岐美のうしろで送る悲しさ  
駿馬の脚許遅くあれかしと  
思ふもわが身の誠なりけり  
束の間も止まりませと祈るかな  
われ愚なる戀心より』

(昭和八・一一・二七 舊一〇・一〇 於水明閣 森良仁謹録)

第一四章

鶴の訣別(三) [一九〇八]

國中比古の神は、御歌詠ませ給ふ。

真鶴の中津神國を固めまし

今立たすかも瑞の御靈は

朝夕に仕へまつりし瑞御靈に

別るる今日を惜しまるるかな

神風はそよりに吹きて玉藻山の

常磐の松は囁きそめたり

笹の葉にうつや霰のたしたしに

國魂御子は生まれましにける

ちちのみの父まさずともははそはの

母に千代鶴姫は育たむ

旅立たす岐美を送らむ今日こそは

めでたくもあり悲しくもあり

涙<sup>なみだ</sup>もて嬉<sup>うれ</sup>しく迎<sup>むか</sup>へしわが岐美<sup>きみ</sup>を

今日<sup>けふ</sup>は涙<sup>なみだ</sup>に送<sup>おく</sup>らむとすも

春<sup>はる</sup>たけし山<sup>やま</sup>の尾<sup>を</sup>の上に瑞御靈<sup>みづみたま</sup>と

別<sup>わか</sup>るる朝<sup>あさ</sup>を白梅<sup>しらうめ</sup>の散<sup>ち</sup>る

眞鶴<sup>まなづる</sup>の國<sup>くに</sup>はつぎつぎ固<sup>かた</sup>まりて

百<sup>もも</sup>の生物<sup>いきもの</sup>わきいでにけり

八百萬<sup>やほよろづ</sup>神<sup>かみ</sup>を生<sup>う</sup>みまし千萬<sup>ちよろづ</sup>の

ものを生<sup>い</sup>かせて旅<sup>たび</sup>立たす岐美<sup>きみ</sup>よ

若草<sup>わかぐさ</sup>の妻<sup>つま</sup>の神言<sup>みこと</sup>に別<sup>わか</sup>れゆく

岐美<sup>きみ</sup>の旅路<sup>たびぢ</sup>は雄<sup>を</sup>々しかりけり

いすくはし生代<sup>いくよ</sup>の比女<sup>ひめ</sup>の御姿<sup>みすがた</sup>を

その折々<sup>をりをり</sup>に偲<sup>しの</sup>ばせ給<sup>たま</sup>へ

岐美<sup>きみ</sup>待ちて氣<sup>け</sup>永<sup>なが</sup>く仕<sup>つか</sup>へし玉野比女<sup>たまのひめ</sup>の

眞心<sup>まごころ</sup>ゆめにも忘<sup>わす</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふな

白梅しらつめの花はなより清きよき玉野たまの比女ひめの

姿すがたをが拜をがめばわれも悲かなしき

力ちからおちしおもひするかな今日けふよりは

岐美きみに別わかれて國くに土につく造りすも

西方にしかたの國くにに立たたさむ瑞御靈みづみたまの

行手ゆくて遙はろけきを思おもへば悲かなしき

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやに永とこしへ久へに

いませる神かみも嘉よみし給たまはむ

瑞御靈みづみたま今日けふを限かぎりと眞鶴まなづるの

國くにを立たたすも空そらくも曇らひつ

百神ももがみの水い火きのくもりて雲くもとなり

霧きりとなりつつ空そらをふたげり

いささ川水がはみづのながれは涸かるとも

われは忘わすれじ岐美きみの功いさをを

現世も幽世もまた天界も

主の大神の水火の中なる

國といふ國は多けれど主の神の

生きの命の照らざるはなし

主の神はいや永遠の天地を

固めむとして岐美を降せり

月讀の神の御靈と生れませる

岐美にしあへば心豊けし

豊なりし岐美に別れて只一人

眞鶴國土を開くは淋しも

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

美しき國土を造りて旅立たす

岐美の出でまし嬉しかりけり

國土も神も嬉し嬉しの花咲かせ

瑞の御靈は今や立たすも

主の神の御水火に生りし白梅の

花は散れども實り嬉しき

月讀の神は御庭の白梅に

露を宿してかがやき給ふ

奴羽玉の闇はなかりき月讀の

神の光のかがよふ限りは

ふさがりし心も開く白梅の

花の粧ひ愛しき岐美はも

結び合ひし水火と水火との固まりて

生れます御子や千代鶴姫の命

雪よりも白き肌の御子なれば



一入ひとしほ清すがしくましましにけり

産うぶだま玉かみの神ちからの力あに生あれし御み子こは

玉たまにもままして清きよくまします

歡よろこぎまして旅たび立ちませよ眞まなづる鶴つるの

國くに土には萬よろづよ世よまでも動うごかじ

現うつしよ世かみの神あと生あれましし瑞みづみたま御み靈たまは

今けふ日かぎを限かぎりに旅たびに立たたすも

背せの岐き美みに別わかれて一人ひとり玉たま藻も山やまに

宮みやづか仕かへせむ玉たま野の比ひ女めあはれ

てらてらと松まつの梢こすゑに天あま津つ日ひは

輝かがやき給たまひて國くに土かた固かためましぬ

山やまも野のも瑞みづの御み靈たまの言こと靈たまに

いや榮さかえましぬこれの國くに原はらは

われはただうれしうれしほ神かみにして

岐美きみの出いで立たち笑ゑが顔ほに送おくるも

いすくはし眞鶴まなづるの國くにの山やまも野のも

百花ももばな千花ちばな咲さき匂におひつつ

岐美きみが行ゆく大野おほのの果はても百千ももちばな花

咲さき匂におひつつ慰なぐさめまつらむ

白梅しらうめの花はなは漸やうやく散ちり初そめぬ

後あとの實みのりを思おもへば樂たのし

眞鶴まなづるは言いふも更さらなり百千ももちどり鳥

林はやしに鳴なきて岐美きみを送おくるも

西方にししかたの國土くには廣ひろけく限かぎりなし

はてなき望のぞみ持もたす岐美きみはも

右左みぎりひだりの契ちぎりを終をへて御子みこ生うませ

立たたさむ岐美きみの功いさをを思おもふ

充みち満みちて隙間すきまもあらぬ言靈ことたまの

生きの力の大いなるかも

勇ましく駒嘶きぬ今立たす

岐美のすがたは此上なく勇まし

水火と水火凝り固まりし眞鶴の

國魂神のみさち多かれ

甘美國尊き國土よ眞鶴の

稚國原に月日照らひて

天津日は隈なく照らひあしびきの

山野の木草日々に榮ゆも

御榮えのいやますますもあれかしと

朝夕をわれは祈るも

遠見男の神の守らす南の

國土にめづらし眞鶴の國

住み心地よき天界に生れあひて

如何いかにで心こころの濁にごらふべきやは

瑞御靈みづみたまよさしの言靈ことたまかしこ畏おそみて

吾われは仕つかへむ千代ちよに八千代やちよに

美波志比古みはしひこの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

瑞御靈みづみたま今日けふの旅たび立ち守まもりつつ

われは行手ゆくてにみはしを架かけむ

天あめに照てる太陽おほひのかけも時折ときをりは

曇くもらふ世よなり心こころして行ゆきませ

かき曇くもる空そらのしたびを走はしり行ゆく

駒こまの脚あしなみ安やすかれと思おもふ

さまざまの惱なやみ苦くるしみ凌しのぎつつ

國魂神くにたまがみを生うます旅たびかも

玉たまの緒をの命いのちの限かぎり仕つかふべし

岐き美みのみゆきのみはし守まもりて

鳴なく鶴つるの聲こゑもかすみて聞きゆなり

岐き美み旅たび立たす今日けふの神苑みそのは

春はるたけて白梅しらうめの花はなは散ちりぬれど

岐き美みの心こころに開ひらく百花ももばな

眞まな鶴づるの國くには廣ひろけし一日ひとひ二日ふたひ

駒こま驅かけらすもなほ餘あまりあり

七なな日かな七なな夜な駒こまに鞭むちうち走はしらせて

いよいよ西にしの國くにに着つかさむ

山やまを生うみ地つちを固かためて旅たび立たす

岐き美みの功いさをの重おもくもあるかな

吾われもまた瑞みづの御靈みたまの御尾みをさき前に

仕つかへてみゆきを安やすく守まもらむ

五百鈴いほすずの清きよき小鈴こすずを駒こまの尻しりに

飾かざりてしやんしやん野の路ぢを行ゆかなむ

今日けふよりは岐美きみの旅たび立ち駿馬はやこまの

しりへに鈴すずを飾かざりまつらむ

萬世よろづよの末すゑまで駒こまに鈴すずかけて

岐美きみのみゆきの形かたみ見みとなさばや

白駒しらこまも五百鈴いほすずの音ねに勇いさみ立ち

蹄ひづめも輕かるく逸はやり進すすまむ

右左草みぎひだりくさにひそみてなく蟲むしの

聲こゑにも似にたり五百鈴いほすずの音ねは

清すがしくも岐美きみゆく野の邊べに鈴蟲すずむしや

松蟲まつむしなきて行手ゆくてを慰なぐさめむ

鳳凰ほうわうは御空みそらに舞まひつをどりつつ

駒こまは地上ちじやうを嘶いななきて行ゆかむ

言こと靈たまののアこゑ聲こゑにに生なりしし顯あきつ津つ男をの  
神かみのの出いでで立たちち勇いさまししききかかも  
吾われもも亦またウの言こと靈たまにに生うままああひひて  
今け日ふののみみゆゆききをを送おくるる樂たのししさ  
空そら高たかみみ道みち遠とほみみつつ大おほ野の原はら  
駒こまををううたたささすす岐き美みぞぞ勇いさましし」

産うぶ玉たまのの神かみはは御み歌うた詠よませせ給たまふふ。

□  
いいつつままででもも名な残ごりははつつききじじ瑞みづ御み靈たまの  
ややささししきき神かみはは今け日ふをを立たたたすすも

情なさけ深けきき岐き美みにに別わかれれてて眞ま鶴なづるの  
國くににに仕つかへへむむ御み子こをを守まもりりつ

いいすすくくははしし岐き美みのの御み水みづ火かのの現あらははれれて

千代鶴姫の御姿くはし

ははそはの母に抱かれ育ちます

千代鶴姫の命やあはれ

年月を御子に仕へて眞鶴の

國の千歳の礎守らむ

生れし御子の生ひ立ちまさむよき月日

岐美の御靈とわれは待つなり

生代比女淋しかるらむ背の岐美に

生きて別るる心思へば

玉藻山この頂上の聖所に

玉野の比女を補けて仕へむ

玉藻山眞鶴山と日毎夜毎

天翔りつつわれは守らな

果しなき稚國原を旅立たす



岐美きみの雄々をしき心こころを思おもふ

萬世よろづよの名残なごり惜をしみて別わかれゆく

瑞みづの御靈みたまを思おもへば悲かなしも

さりながら主すの大神おほかみの御旨みむねなれば

吾われ如何いかんともせむ術すべなけれ

主すの神かみは皇神國すめらみくにを固かためむと

任まけ給たまひけむ瑞みづの御靈みたまを

何なにひと一つなき大空おほぞらに天津國あまつくにを

生なり出いでましし主すの神尊かみたふとき

かたちなき生言靈いくことたまの凝こり凝こりて

うつしき天界みくには生なり出いでしはや

言靈ことたまの御稜威みいづを思おもへば有難ありがたし

萬世よろづよ生いきて神かみに報むくいむ

眞鶴まなづるの山やまの麓ふもとを白雲しらくもは

深く包めり岐美を惜むか

玉藻山わきたつ雲のつぎつぎに

膨れあがりて空曇らへり

落ちたぎつ千條の瀧も見えぬまでに

白雲つつみて風静なり

見渡せば眞下の國原霧立ちて

あやめもわかずなりにけらしな

百鳥の聲は聞けどもその姿

霧の中なる今のながめよ

玉藻山尾の上へ立ちて見渡せば

この國原は霧の海なり

大空の雲ちりゆきて紺碧の

空はつぎつぎあらはれにけり

大空を包みし雲の破れより

天津日かげはさし初めにける<sup>あまつひ</sup>

(昭和八・一一・二七 舊一〇・一〇 於水明閣 白石恵子謹録)

第一章 鶴の訣別(四) (一九〇九)

魂機張の神は名残の御歌詠ませ給ふ。<sup>たまきはる かみ なごり みうたよ たま</sup>

はるばるも御供に仕へ今ここに<sup>みとも つか いま</sup>

瑞の御靈と別る惜しさよ<sup>みづ みたま わか を</sup>

あきたらず吾は思ふも岐美に仕へて<sup>われ おも きみ つか</sup>

樂しかりしを今日別るとは<sup>たの け ふ わか</sup>

斯くあるはかねて覺りつ今更に<sup>か さと いまさら</sup>

名な残しり惜をしくも別わかれがてに居ゐる

榮さかえます岐き美みの御み姿すがた伏ふし拜をがみ

別わかるる今け日ふの名な残しり惜をしけれ

立たち別わかれ神かみの御おん爲ため國くにの爲ため

今け日ふより淋さびしく仕つかへむと思おもふ

嘆なげかじと思おもひ諦あきらめ居ゐる身みにも

今いまは堪たへがたくなりにけらしな

はしけやし岐き美みの御み姿すがた今け日ふよりは

懷なつかしむよしもなかりけるはや

眞まな鶴つるの國くにの生おひ先さきおもひつつ

岐き美みなき神かみ世よをかなしみ思おもふ

八や洲しま國くに生いく言こと靈たまの幸さいひて

岐き美みの行ゆく手ての安やすくあれかし

玉たま藻も山やま後あとに別わかれて旅たび立たたす

岐美を一人かなしみ思ふ

幾千代を経るとも吾は忘れまじ

ゆたけき岐美に抱かれし日を

岐美まさぬ眞鶴の國の山河は

草木の端までしをれこそすれ

白雲も今日はばかり山裾に

まよひて岐美のみゆきを送るも

八千草の色も變りて見ゆるかな

瑞の御靈の旅ゆかす今日は

西方の國ははろけし岐美が行く

道の隈手も恙なかれと思ふ

久方の天津高宮ゆ降りましし

岐美は今日より御姿見えぬも

水清き千條の瀧もとどろきを

をさめて岐美を送るがに思ふ

五百鳴の鈴打ち振りて神も駒も

岐美のみゆきを送る今日なり

いさぎよき岐美の姿を背に乗せて

天の駿馬勇みいなく

現世の總てのものを生みまして

國土つくりをへし岐美は畏し

國原は未だ稚けれど岐美が行く

蹄のあとは花咲きみのらむ

進み行く駒の蹄の音清く

鳴り響くらむ貴の言靈は

白雲の帳を開けて月讀は

淡き姿をあらはし給へり

月讀の御靈に生れし岐美なれば

奴ぬ羽ば玉たまの世よは永と久はになからむ

ふみてゆく稚わか國くに原はらの百も千ち草くさ

花はなをかざして岐き美みを待まつらむ

むしむして生おひ榮さかえたる足あし引びの

山やま野ぬの木き草くさもしをれ顔がほなる

縁ゆかりある人ひとに別わかれて旅たび立たす

岐き美みの心こころの雄を々をしさを思おもふ

産うぶ玉たまの神かみに貴うづ御み子こ任まかせつつ

安やすく行ゆきませ顯あき津つ男をの神かみ

草くさも木きも葉は末うれの色いろを變へんじつつ

嘆なげくが如ごとし岐き美みの出いで立たちを

すずやかに尾をの上へを渡わたる松まつ風かぜの

音おとに鳴なきたつ田た鶴づの數かず々かず

清すが庭にはに家か鷄け鳥どりなきて白しら梅づめの

花はこぼれぬ春の山風に  
朝に夕に仕へ奉りしわが岐美に  
別るる今日のおもひはるけし  
久方の天にかへらす瑞御靈の  
神の功をわれ祈るなり

結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

あはれあはれ瑞の御靈は今日の日を  
限りとなして旅に立たすか  
かけまくも畏き神の出でましを  
われは謹み壽ぎ奉るも  
さまざまの悩みに堪へて眞鶴の  
國土をつくりし岐美ぞ畏き



靈線たましひの力ちからのあらむその限かぎり

つくして神國みくにを生まうませし岐美きみはも

泣なかむとも止とどむる術すべはなかりけり

ただ勇いさましく岐美きみを送おくらな

花はな匂におふ彌生やよひの春はるも更ふけにつつ

岐美きみに別わかるる神山みやまさび淋しみしも

迦陵頻伽からびんがの聲こゑはかすみて聞きゆなり

松まつ吹ふく風かぜもしのばひにつつ

山やまの上へのこれの聖所すがとに永久とこしへの

別わかれを告つぐる今日けふぞかなしき

まだ稚わかき千代鶴ちよつるひめ姫ひめの生おひ先さきを

われは守まもらむ心安いしんやすかれ

いきいきして生いきの果はてなき天界かみくにに

いや榮さかえまさむ千代鶴ちよつるの命みことは

岐美行かば眞鶴の國は淋しからむ

ただ生れし御子を力とたのむも

白妙の薄衣に朝夕包まれて

命は日々に生ひ立ちまさむ

千代鶴姫命の生ひ立ちを村肝の

心にかげず旅に立ちませ

吾も亦西方の國の境まで

駒をうたせて従ひ奉らむ

西方の國の境に日南河

廣く流ると吾聞きしはや

滔々と流るる水瀬打ち渡り

山越え野越え行きます岐美はも

水火と水火稜威に結びし駒なれば

日南の河瀬も安く渡らむ

いすくはしあめのしらこま白駒にむち鞭うちて

渡わたらむそ其のひ日のみかげ雄姿をおも思ふ

魚うろくづ族もみづ水のも面にう浮きてき岐美がこま駒を

迎むかへまつ奉らむひなた日南のかは河に

國くに見すればにしかた西方のくに國土くも雲のおく奥に

かすみてみ見えずこころ心はるけし

澄すみきらひ澄すみきらひおほぞらたる大空は

岐き美のみみゆきにふさはししきかも

月つきもひ日もひかり光さ冴えつつつ玉たま藻山やまを

下くだらすき岐美のみ御尾み前さき照てらせり

奴ぬ婆ば玉たまのやみ闇をは晴はらしてすす進みます

岐き美はひかり光のかみ神にぞありける

葭よしあし葦のお生くふるくに國原はら踏ふみわ別けて

進すすまむみち道につつが恙あらすな

蟲の音も道の左右に冴えにつつ

岐美のみゆきを壽ぎ奉らむ

行きゆきて日南の河の河岸に

立たさむ日こそ待たれけるかも

浮雲のあそべる彼方の大空の

下びに横たふ日南河はも

億萬年の末まで國土を固めむと

心をくだき給ふ岐美はも

八雲立つ紫微天界は皇神國の

基とおもへば尊かりけり

主の神は億萬年の末までも

永遠無窮に主の國守りますらむ

滔々と流るる日南の河の瀬を

やがて渡らす岐美ぞいさまし

よき事ことに曲事まがこといつく神世みやよなれば

心こころしづかに岐美きみ進すすみませよ

森羅もろもろ萬象ばんざうの稚わかき國原くにはら永久とこしへに

固かためて生いかす岐美きみの旅たびはや

ふくれふくれ擴ひろがり果はてしなき國土くにを

固かたむる岐美きみの神業みわざかしこし

目路めぢの限かぎり八雲やくもたちたち曲神まがかみは

果はてなき國くににむらがると聞きく

永久とこしへの礎いしず固かたむる國土くに生うみの

神業みわざ仕つかふる苦くるしかる岐美きみよ

かかる世よに生うまれあひたる嬉うれしさは

國土くに生うみの神業みわざに仕つかふる吾われなり

雄を々をしくもあれます岐美きみの御姿みすがたを

今日けふより拜をがまむ術すべなき神山みやまよ

越國こしくにの果はてまで岐美きみの御功みいさをは

かがやき渡わたらふ月日つきひとともに

上うへも下したも右みぎも左ひだりも打うち揃そろひ

うら安國やすくにをひらかす岐美きみはも

永久とこしへの生言靈いくことたまの生命いのちもて

百ももの神かみたち守まもらす岐美きみなり

野のも山やまも今日けふはことさら明あかるかり

岐美きみの旅立たびだち守まもらす月日つきひに

萬世よろづよのほまれとならむ瑞御靈みづみたまの

今日けふの苦くるしき心こころづかひは

百鳥ももどりの聲こゑ勇いさましくなりけり

岐美きみの出いでましを諦あきらめにけむ

夜晝よるひるの差別けぢめもしらに進すすみます

岐美きみの功いさをは世よの鏡かがみなる

音おとにきく天津あまつたかみや高宮の莊いかし嚴さを

おもへば岐美きみの尊たふとくなりぬ

天あめと地つちの水い火きをつばらむすに結あはび合せ

あれますかもよ瑞みづの御みたま靈は

美味うまし素もとの神かみは御みうた歌よ詠たまませ給ふ。

うましし國くに元もと津つ神みくに國を生うみをへて

出いでます岐美きみをとど止むるすべ術なき

諦あきらめてみむとおもと思へど堪たへやらぬ

今け日ふのい出いでた立たちわれ吾はかなしも

輝かがけるき岐美みのおも面てはくも曇らひぬ

今いまあらためてく繰り言こと宣のらじ

玉たま野の宮みやにと常は永ににつか仕ふるたま玉の野ひ比め女の

たすけとならむ神ぞほしけれ

久方の御空は清く冴えにつつ

岐美の出でまし清しみ送るも

玉の緒の命の限り仕へむと

思ひし岐美は今やたたすも

永き世の末の末まで眞心を

捧げて仕へむと思ひたりしよ

春たちて夏は漸く來向へど

何か淋しきわれなりにけり

西方の國土の境に横はる

日南の河まで送り奉らむ

松を吹く風の響も静なり

岐美の出でまし松も惜しむか

四方八方にふさがる雲霧吹き拂ひ



つきひて  
月日照らして出でます岐美はも

わかぐさ  
若草の妻のみことを後におきて

たび  
旅に立たさむ岐美を偲ぶも

いほすず  
五百鈴の音は冴えにつつ駿馬は

はや  
早たたむとや勇み出でけり

きぎす  
きぎす啼くこの高山の頂上に

ちとせ  
われは千歳をおもひてなみだす

しらくも  
白雲のたなびく遠き國原に

い  
出でます岐美に別る惜しさよ

ちから  
わが力とみに落ちたる心地して

きみ  
岐美を送らむ國境まで

にしかた  
西方の國土は曲神澤ありと

き  
聞けば一入こころわづらふ

たきつせ  
瀧津瀨の水の流れはさかしとも

おそれ給はじ御稜威の岐美は

幾千代の末の末まで神々の

かたらひ草とならむ今日の日

生みの子のいや次ぎ次ぎに至るまで

かたり傳へむ今日の別れを

奇びなる生言靈の幸ひに

眞鶴の國土はうまらになりぬ

澄みきらふ瑞の言靈幸ひて

眞鶴の國土は固まりにけり

罪穢れかげだにもなきわが岐美の

行く先き先きにさやるものなし

天と地の水火と水火とに温めて

瑞の御靈は御子を生まれせり

二柱水火を合せて國魂の

神かみをう生ませしことの尊さたふと

紫むらさきの雲は次ぎ次ぎ重りて

玉たま藻もの山を包まひにけり

夢ゆめなれや瑞の御靈の現あれましし

日ひより百日の日はたちにけり

美うつくしき山やまとなりけり玉野の湖の

底そこはかわきて傾斜な面へとなりぬ

斯かくの如尊ごとき言靈こともたす岐美きの

功いさをは天界みくにの寶なりけり

葭よしあし葦を踏ふみ別け進ますわが岐き美みの

旅たびはまさしく幸多さちからむ

吾われも亦ウの言こと靈たまに生れ出でて

瑞みづの御靈みたまに仕へ奉りし

天あめ地つちの生みの司つかさと任けられし

瑞みづの御靈みたまの功美いさをするはし

瑞御靈みづみたま七十五聲ななそまりいつつの言靈ことたまに

眞まなづる鶴るく國土くにを生うみましにけり

地つち稚わかくふくれ上あがりし眞まなづる鶴るくの

國土くにはやうやく固かたまり初そめたり

目めに見みえぬ國土くにの果はてまで言靈ことたまの

幸さちにうるほふ神み世よは尊たふとき

神々かみがみはゑらぎ樂たのしみ眞まなづる鶴るくの

國土くにの千歳ちとせを祝いはふなるらむ

斯かくまでも固かため給たまひし眞まなづる鶴るくの

國土くに汚けがさじと吾われは仕つかへむ

惜をしむとも詮術せんすべなけれ主スの神かみの

御旨みむねにしたがひたす岐美きみなり

木き草くさも瑞みづの御靈みたまの現あれし日ひゆ

光ひかりを増まして榮さかえ初そめけり

榮さかえゆく神み世よ壽ことほぐか眞ま鶴なづるも

常とき磐はの松まつにさやかまかにうたふ

今いまははや迦かり陵よう頻びん伽がも眞ま鶴なづるも

家か鷄け鳥すの鳴なく音ねも冴さえ渡わたりけり

百もも鳥どりも岐き美みの出いで立たちあきらめて

神みくに國くにのためと勇いさむなるらむ

遠とほき近ちかき國くに土にのことごと守まもります

岐き美みの功いさをぞたふとかりけり

長のど閑かなる春はるの終をはりを旅たび立たす

岐き美みの行ゆく手に匂におへ百もも花ばな

萬よろづ世よのほまれなりけり玉たま藻も山やまの

今け日ふの別わかれは國くに土に生うみの爲ためと

百もも鳥どりは千ち歳とせを歌うたひ百もも千ち草ぐさは

神かみ世よ壽ことほぎて風かぜにそよげる

國くに土に生うみの神かみ業わざの御み供とも仕つかへつつ

今け日は悲かなしき別わかれするかも

大おほ空そらの雲くもかき別わけて天あま津つ陽ひは

岐き美みが行ゆ手を照てらさせ給たまへる

顯あき津つ男をの神かみは、馬ば上じやうより諸しよ神しんに向むひ御み歌うた詠よませ給たまふ。

百もも神がみの心こころかしこしわれは今いま

今け日の門かど出でにかたじけなみ思おもふ

わが姿すがたここに見みえねど靈たま線しひは

永と久はに鎮しづめて國くに土にを守まもらむ

玉たま野の宮みやに朝あさな夕ゆふなに仕つかへ奉まつる

神かみをくだして形かた見みとやせむ

玉野比女心安かれ汝が爲に  
たすくる神のいまや降らむ

斯く歌ひ終り、諸神に名残を惜しみつつ駒に鞭うち、玉藻山の傾斜面を右に左に折れ曲りて靜に下らせ給ふ。百神は各自國境まで御供に仕へむとして駒にまたがり、御尾前に仕へ給ふ。さり乍ら國中比古の神は生代比女の神を守りつつ、千代鶴姫の神を育くまむと駿馬に跨りかへらせ給ひ、玉野比女の神は玉藻山に残りて、大宮に親しく仕へ給ふぞ畏けれ。

(昭和八・一一・二七 舊一〇・一〇 於水明閣 内崎照代謹録)

第一六章 鶴の訣別(五) (一九一〇)

ここに顯津男の神は、その神業の成れるを機會に、諸神におくられて玉藻山を

しづしづ下り給ひければ、玉野比女の神は淋しさに堪へかねて、玉野宮の大前に  
蹲まりつつ神言を奏上し終りて、靜に御歌詠ませ給ふ。

顯津男の神は國土生み御子生みの

神業終りて歸りましける

神の世を固めむとして出でましし

瑞の御靈の後姿なつかしも

冴え渡る月日の光も何處となく

淋しかりける岐美のなければ

高地秀の山より下りし瑞御靈

その御姿は雄々しかりける

南の國土を固めむと出でましし

岐美は今なし白梅は散る

春の陽は靜に更けて夏草の



萌ゆる玉藻の山の淋しさ

圓屋比古の神は三笠の山の根に

歸らせ給ひていよよ淋しも

八洲國ことごとめぐり神生ます

岐美はやさしも又つれなしも

わが岐美と名乗る言葉も口ごもり

ただ一言の名乗りさへせず

いすくはし神の姿の目に浮きて

いよよ戀ふしく淋しくなりぬ

岐美の姿玉藻の山に現れしより

早も百日を過ぎにけらしな

白梅の花にも似たる粧ひを

持たせる岐美は懐かしきかも

主の神の誓ひは重しさりながら

氣け永ながく待まちて年としさびにける

西にし東ひがし南みなみや北きたとめぐらして

神かみ生うみのわざ仕つかへますはも

日ひを重かさね月つきをけみしてわが岐き美みは

四よ方もの國くに々くにめぐりますかも

右みぎり左ひだり契ちぎりなけれどわが岐き美みの

御み姿すがた思おもへば戀こふしかりける

水い火きと水い火き合あせて御み子こをたしたしに

生うまむ術すべなきわが身みを悲かなしむ

いろいろに花はなは匂におへど白しろ梅うめの

薰かをり床ゆかしも主すの種たね宿やどせば

梅うめは散ちり櫻さくらは散ちりて夏なつの日ひも

いや深ふかみ草くさ深ふかくなりぬる

奇くしびなる縁えにしの綱つなにからまれて

背<sup>せ</sup>とし名<sup>な</sup>のれど水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>あはざりき

主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>はわれをたすけむ司<sup>つかさ</sup>神<sup>がみ</sup>

天<sup>あ</sup>降<sup>も</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふと聞<sup>き</sup>くぞ嬉<sup>うれ</sup>しき

獨<sup>ひと</sup>りのみ只<sup>ただ</sup>獨<sup>ひと</sup>りのみ清<sup>すが</sup>庭<sup>には</sup>に

神<sup>み</sup>世<sup>よ</sup>を祈<sup>いの</sup>れどうら淋<sup>さび</sup>しもよ

月<sup>つき</sup>と日<sup>ひ</sup>と二<sup>ふた</sup>つ竝<sup>なら</sup>べる世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に

われは淋<sup>さび</sup>しもひとり住<sup>す</sup>まひて

奴<sup>ぬ</sup>婆<sup>ば</sup>玉<sup>たま</sup>の闇<sup>やみ</sup>は迫<sup>せま</sup>りぬわが心<sup>こころ</sup>

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>に別<sup>わか</sup>れしそのたまゆらに

再<sup>ふた</sup>びは會<sup>あ</sup>はむ術<sup>すべ</sup>なきわが心<sup>こころ</sup>に

別<sup>わか</sup>れし今<sup>け</sup>日のつれなさおもふ

結<sup>むす</sup>比<sup>び</sup>合<sup>あ</sup>の神<sup>かみ</sup>はあれども年<sup>とし</sup>さびし

われには何<sup>なん</sup>の甲<sup>か</sup>斐<sup>ひ</sup>なかりけり

豊<sup>ゆた</sup>なる岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>のよそほひ見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>りて

ふたたび涙あらたなりける

浮雲うきぐもの流ながる見みつつ思おもふかな

わが行ゆく道みちのはかなかる世よを

玉野丘たまのをかは瑞みづの御靈みたまの言靈ことたまに

ふくれ上あがりつ淋さびしさまさる

景色けしきよき玉藻たまもの山やまの眺ながめさへ

今日けふはうれたく思おもはるるかな

背せの岐美きみは今いまやいづくぞ大野原おほのはら

醜草しこぐさわけて鞭むちうたすらむ

天地あめつちにひとりの岐美きみを慕したひつつ

長ながの訣別わかれを生いきて見みるかも

蟲むしの音ねもいと悲かなしく聞きこゆなり

わが目めの涙なみだかわき果はてずて

隔へだてなき岐美きみの心こころを悟さとりつも

かすかにうらみ抱いだきけるはや

愚おろかなるわが魂たましひ線をたしなめて

笑ゑがほ顔に迎むかへし時ときのくるしさ

生代比女いくよひめの神かみは國魂神くにたまがみの御子みこ

安々やすやす生うませ給たまひけるはや

生代比女いくよひめ若もしなかりせば眞鶴まなづるの

國魂神くにたまがみは生うまれざるべし

生代比女いくよひめ神かみの功いさをを喜よろこびつ

何なにかうらめし心こころの湧わくも

恐おそろしきものは戀こひかも心こころかも

よしとあしとの差別けぢめなければ

わが心こころ亂みだれけむかも生代比女いくよひめの

貴うづの功いさををうらやましみおもふ

背せの岐美きみと水火いを合あせて生うみませる

千代鶴姫の命めぐしも

わが腹に宿らす御子にあらねども

わが子となりし國魂神はや

國魂の御子の生ひたつあしたまで

生代の比女は育くみ給はむ

生代比女國魂神の乳母神と

なりて仕へむさまのめぐしも

常磐樹の松の心を持ちながら

ややともすれば色褪せにつつ

長閑なる春の心も戀ゆゑに

曇ると思へば恥づかしのわれよ

愛しさと戀ふしさまさり背の岐美の

御前にふるふ言の葉うたてき

百千々に碎く心を語らはむ

暇いとまもあらに別わかれけるはや

主スの神かみにいらへむ言葉ことばなきままに

われは許ゆるしぬ戀こひの仇あだ神がみを

起おきて見みつ寝ねて思おもひつつ御み子のなき

われを悲かなしむ玉藻たまもの山やまに

斯かく歌うたひ給たまふ折をりしも、玉藻山たまもやまの常磐ときはの松まつの梢こすゑを前後ぜんご左右さいうにさゆらせつつ、雲路くもぢ  
を別わけて玉野宮居たまのみやゐの清庭すがにはに、二柱ふたはしらの神かみ悠然いいうぜんとして天降あもりまし、玉野比女たまのひめの神かみの御みそ  
側ば近く立たたせ給たまひつつ御歌詠みうたよませ給たまふ。

☐ われこそは主スの大神おほかみの神言みこともて

ここに降くだりし魂結たまゆひの神かみ

中津柱神なかつはしらかみは天降あもりぬ主スの神かみの

神言みこと畏かしこみ汝なれたすけむと

ふ。

玉野比女の神は、且つ喜び且つ驚きつつ、謹みて二柱の神に向ひ御歌詠ませ給

☐ 朝夕のわが願ぎ言の叶ひしか

尊き神の現れませしはや

中津柱神の天降りしと聞くからに

わが魂線はよみがへりつつ

魂結の神のこの地に天降りまさば

わが神業も易く成るべし

背の岐美の旅に立たせる淋しさに

われは神前に繰言宣りぬ

二柱神の神言の耳に入らば

吾は消えなむ思ひするかも

さすがにも女神なるかもかへらざる



ことをくどくど繰返しつつ  
今更にわが身恥づかしくなりにけり  
神に仕ふる身ながらにして

ここに魂結の神は御歌詠ませ給ふ。

眞鶴の國漸くになりたれば

汝たすけむとわれは天降りぬ

玉野比女心安けくおはしませ

汝の眞心天にかよへり

主の神は汝が眞心をさとりまし

神業たすくとわれを降せり

眞鶴の國は廣けし遠見男の

神一人して如何で治め得む

今日よりは玉野宮居の清庭に

仕へて汝を補けまつらむ

有難き神世となりけり主の神の

折々天降らす玉藻の神山

中津柱の神は御歌詠ませ給ふ。

眞鶴の廣國原の中津柱

神と現れわれ天降りけり

主の神の嚴の言靈畏みて

われ治めむと降りけるはや

顯津男の神のまことの願ぎ言を

主の大神は許し給ひぬ

顯津男の神の御水火の正しさに

われ紫微宮しびきうゆ天降あまくだりたり

新あたしく造つくり固かためし眞鶴まなづるの

國くに土にの木草きぐさの稚々わかわかしもよ

主スの神かみの神言みことまも守もりて氣け永ながくも

待またせる玉野たまのの比女ひめのかしこさ

國魂くにたまの神かみ生あれませり生代いくよひ比女ひめの

御子みこには非あらず汝なれが御子みこなり

汝なが腹はらゆ生あれます御子みこと諾うべなひて

めぐしみ給たまへ國魂くにたまの御子みこを

今日けふよりは眞鶴まなづる國くにを經巡へめぐりて

汝なが神業かむわざをあななひまつらむ

遠見とほみ男をの神かみは總すべての司つかさぞや

玉野たまの宮居みやゐの司つかさは汝なれぞや

永久とこしへに玉野たまの宮居みやゐに仕つかへまして

國魂神を守らせたまへ

三笠山眞鶴山と經巡りて

國土のはしばしひらき守らむ

眞鶴の國原詳細に固まらば

われは歸らむ天津高宮へ

顯津男の神に代りてわれは今

國土固めむと降りつるはや

多々久美の神はあちこち經巡りて

何時か姿をかくしましける

多々久美の神の功に眞鶴の

國土すみずみまでひらかれて行く。

アカサタナ

ハマヤラワ

ガザダババ

いく言靈ことたまの幸さいはひて

眞鶴まなづる國くには生あれましぬ

國魂くにたま神がみは健すこやかに

生うまれましける千代ちよ八千代やちよ

榮さかゆる神み世よは眞鶴まなづるの

千歳ちとせの齡よはひと諸もろ共に

月日つきひと共に動うごかざれ

國くにの宮居みやゐの清庭すがにはは

雲井くもゐの上うへにいや高たかく

そそり立たちつつ主すの神かみの

光ひかりを四よ方に照てらすなり

われは主すの神かみ神言みこともて

中津柱なかつはしらと現あらはれつ  
魂結たまゆひの神かみと諸もろとも共に  
これの聖所すがどを永遠とことはに  
守まもり守まもりて主すの神かみの  
榮さかえを委曲うまらに開ひらくべし  
幾億萬いくおくまんの年とし月つきを  
隔へだててやうやう皇國すめらくに  
大おほやまと國くに固かたむべき  
今日けふの神業みわざの尊たふとさよ  
今日けふの神業みわざの畏かしこさよ  
あかむなあかむな惟ながら神かむながら々々  
言靈ことたま御稜威みいづたふと尊たふとけれ  
言靈ことたま御稜威みいづたふと尊たふとけれ

(昭和八・一一・二七

舊一〇・一〇

於水明閣

林彌生謹録)

第四篇 千山萬水

第一七章 西方の旅（一九一）

古來文學者等が、天地開闢以後の史實を説明せむとするに當り、二つの方法を用ゐて來た。其一つは史詩であり、其一つは傳奇物語であつた。而して史詩は歴史と空想との交錯であり、傳奇物語は史的要素を、より濃厚な空想で賦彩したものである。ダンテの詩の如き、又は竹取物語の如きは、總て傳奇物語の形式を取つたものである。中にも史詩は其大多數を占めて居たやうであるが、後世に至つて學者達が散文體に翻譯し、之を廣く發表するに至つたものである。併しながら我國は言ふも更なり、泰西諸國に流布さるる史的物語にも、英雄、神、惡魔等を取扱つて居るもの多く、吾が述ぶる『天祥地瑞』の如く、言靈を取扱つた書籍は絶無である。要するに言靈學は深遠微妙にして、凡庸學者の腦髓に到底咀嚼し能

はず、又夢にも窺知するを得ざる玄妙なる學理なるが故に、今日迄閑却されて居たのである。一知半解の頭腦をもつては、到底言靈學を題材とする史詩又は傳奇物語は絶對不可能である。私は大膽にも不敵にも、大宇宙の極元たる言靈の活用に基づき、宇宙の成立より、神々の御活動に就いて、史詩の形式を借り、彌々茲にその大要を述べむとするものである。

未だ天地茫漠として修理固成の光輝かざりし時代の物語にして、言靈の妙用より發する意志想念の世界を説明せむとするものなれば、現代人の目より耳より不可思議に感ずる事最も多かるべし。人間は神の形に造られたりと、總ての學者は言つて居る。故に神は總て人間の形をなしたるものと想像して居る人々が多いのである。然れども意志想念の情動によりて、最初の世界は一定不變なる形式を保つ事の出来ないのは明瞭なる眞理である。龍體の神もあれば獸體の神もあり、又山嶽の形をなせる神もあり、十數箇の頭を有する大蛇身もあり、千態萬様である。何故なれば、意志想念其ものの形の現れであるからである。人間の面貌は精神の索引なりと稱ふるも此理由である。併しながら今日にては人間の形態定まりたれ



ば、意志いし想念しさうねんによりて其體そのたいを變へんぜず。唯ただ面貌めんぼうに變へん化くわを來きたすのみとなつたので、表へう面めんより見みては其性そのせい格かくを容よう易いに知しる事ことが出來できなくなつて居ゐる。外げ面めん如に菩ぼ薩さつ、内ない心しん如に夜やしや叉ごとの如ごとき惡あく魔まの横わう行かうするのも、善ぜん惡あく共ともに同どう一いつ形けい態たいを備そなふるに至りしより、惡あく魔まに便べん宜ぎを與あたへて居ゐるのである。細さい心しんに注ちう意いする時ときは、形けい態たいは人にん間げんなれども、其面そのめん貌ぼうに、聲せい音おんに、動どう作さに、惡あく魔まの状じやう態たいを現げんずるものなれども、一いつ般ぱんの人にん間げんの目めより、其精そのせい神しん状じやう態たいの善ぜん惡あくを容よう易いに窺き知ちする事ことが出來できないやうになつたのである。正ただしき神かみの道みちを踏ふみ、日にち夜やに魂たまを清きよめ、智ち慧ゑい證じやう覺かくを得えたる眞ま人にん間げんの眼まなこよりは、容よう易いに之これを觀くわん破ぱする事ことが出來できるのである。盲めくら千せん人にん目め明あき一人ひとりの世よの譬たとへに漏もれず、大だい多いた數すうの人ひとは欺あまかむれ禍わざはひひにかかかるものである。茲ここに主すの大神おほかみは、ミロクかむぼしの神かみ柱しらを地ち上じやうに下くだして、正ただしき教をを天てん下かに布しき施ほし人にん類るゐの眼まなこを覺さませ、光ひからせ、惡あく魔まの跳てう梁りやうを絶ぜつ滅めつし、以もつてミロクみろくの神かみ世よを樹じゆりつ立りつせむとし給たまへるこそ、有あり難がたき尊たふとき限かぎりなれ。

茲ここに太おほ元もと顯あきつ津つ男をの神かみは

玉たま藻もの山やまの聖すが所どこに

ふたはしら  
二柱の女神めがみのこ残しおき

たまのみやゐ  
玉野宮居に禮辭あやひこと

の  
宣り終へまして悠々いっとうと

こま  
駒に跨り鈴の音ねも

い  
いと勇いさましく百神ももがみに

その御尾前みをさきを守まもられて

な  
傾斜面なぞへの坂路さかみち右左みぎひだり

つた  
傳つたひ傳つたひて下くだりまし

ちすぢ  
千條ちすぢの瀧たきよりおちくだつ

たに  
谷たにの清水しみづに楔みそぎして

うま  
馬うまに水飼みづかひ荒野原あらのはら

いさ  
勇いさみ進すすみて出いでたまふ

その  
其御姿そのみすがたの雄々ををしさよ

ももがみたち  
百神等ももがみたちは御尾前みをさきに

仕へまつりて靈光の  
輝きたまふ御後より  
畏れ謹み出でたまふ  
紫微天界の國土生みや  
御子生みの旅の物語  
水明閣に端坐して  
東雲社員に筆とらせ  
心いそいそ述べてゆく  
嗚呼惟神々々  
神の御靈の幸ひて  
此の物語いや廣に  
いや審かに後の世の  
鏡ともなり鹽となり  
花ともなりて世の人の

御魂みたまに光ひかり與あふべく  
守まもらせ給たまへと願ねぎ奉まつる。

顯津男あきつをの神かみは宇禮志穗うれしほの神かみ、魂機張たまきはるの神かみ、結比合むすびあはせの神かみ、美味素うましもとの神かみの四柱神よはしらがみと  
共に、玉藻山たまもやまの千條ちすぢの瀧水たきみづの集あつまれる大瀧川おほたきがはの清流せいろに楔みそぎし給たまひ、おのもおのも駒こまに  
水飼みづかひながら、主すの大神おほかみを遙はるかに伏ふし拜をがみ、西方にしかたの國くにの國土くにつ造つくり神生かみうみの神業みわざを、  
うまうままに委曲つばらに完成くわんせいすべく、聲こゑも清すがしく祈いのりの御歌詠みうたよませ給たまふ。

久方ひさかたの天津高宮あまつたかみやの主すの神かみに

楔終みそぎをはりて願ねぎ言申ことまをさむ

眞鶴まなづるの國土くにはやうやく固かたまりぬ

西方にしかたの國土くに生うみ守まもらせたまへ

玉野丘たまのをか膨ふくれ上あがりし神業かむわざに

ならひて我われは國土くに生うみせむとす

もろもろの曲神等を言向けて

神の依さしの國土生みをせむ

わが伊行く道の隈手も恙なく

進ませたまへ主の大御神

科戸邊の風も靜にふくよかに

わが行く道に幸ひあれかし

宇禮志穗の神は御歌詠ませ給ふ。

わが岐美の御後に從ひ進みゆく

道の隈手も恙あらずな

眞鶴の國の境の日南河

向つ岸までおくらせたまはれ

眞鶴の國土はやうやく固まれど

まだ地<sup>つち</sup>稚<sup>わか</sup>し駒<sup>こま</sup>はなづまむ

玉藻山<sup>たまもやまちずぢ</sup>千條<sup>せんじょう</sup>の瀧<sup>たき</sup>の集<sup>あつま</sup>りし

大瀧川<sup>おほたきがは</sup>の水底<sup>みそこ</sup>は澄<sup>す</sup>めり

澄<sup>す</sup>みきらふ大瀧川<sup>おほたきがは</sup>の眞<sup>ま</sup>清水<sup>しみづ</sup>は

瑞<sup>みづ</sup>の御靈<sup>みたま</sup>の心<sup>こころ</sup>なるかも

大瀧川<sup>おほたきがは</sup>清<sup>きよ</sup>き流<sup>なが</sup>れに楔<sup>みそぎ</sup>して

わが魂<sup>たましひ</sup>線<sup>せん</sup>は甦<sup>よみが</sup>へりぬる

水底<sup>みなそこ</sup>の砂利<sup>じやり</sup>さへ小魚<sup>さな</sup>さへ透<sup>す</sup>きとほる

大瀧川<sup>おほたきがは</sup>の清<sup>きよ</sup>くもあるかな

駿馬<sup>はやこま</sup>は嘶<sup>いなな</sup>き鶴<sup>つる</sup>は萬代<sup>よろづよ</sup>を

うたひて岐美<sup>きみ</sup>がみゆき送<sup>おく</sup>るも

大瀧川<sup>おほたきがは</sup>岸邊<sup>きしべ</sup>に萌<sup>も</sup>ゆる夏草<sup>なつぐさ</sup>の

緑<sup>みどり</sup>の若草<sup>わかぐさ</sup>わけて進<sup>すす</sup>まむ

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

魂機張る命の清水よ眞清水よ

千條の瀧より落つる流れは

たうたうといや永久におちたぎつ

瀧のごとあれ岐美の齡は

永久に涸るるためしはあらたきの

いや高長に流るる生命よ

かかる世に生れてかかる楽しさを

味はひにけり岐美に仕へて

玉藻山千條の瀧の音高く

響きわたらへ岐美の御名は

百千草四方に香ひて百鳥の

聲牙え渡る大瀧川の邊へ

川水に五つの駒の水飼ひて

進まむ今日の旅面白し

行く先に如何なる神のさやるとも

退けたまへ言靈の水火に

旅立たす岐美の御供に仕へつつ

わが身わが魂わくわく躍るも

極みなき望みかかへて旅立たす

岐美の面わを勇ましく思ふ

御面は月日の如くかがやきて

射向ふ神とならせたまひぬ

わが神は面勝神よ射向ふ神

如何なる曲もさやらむすべなし

大野原吹き来る風も柔かに

みゆきことほぐ響をつたふ



結比合の神は御歌詠ませ給ふ。

大瀧川清き流れは永久の

岐美の生命と澄みきらひたり

雲の上に浮きたつ玉藻の神山は

紫の雲に包まれにけり

紫の雲の上より玉野比女

生代の比女は岐美を送らむ

生れませし御子の生ひ立ち楽しみて

西方の國土に立たす岐美はも

眞鶴山玉藻の山や三笠山は

眞鶴國の要なるかも

月も日も清く流るる大瀧の

川は底まで澄みきらひたり

夕ゆふざれば星ほしの眞砂まさごの數々かずかずは

水面みのもに清きよく浮うかぶなるらむ

靈線たましひの結むすびの力ちからに月つきも日ひも

星ほしも虚空こくうにやすく定きまれり

まだ稚わかき國くに原はらなれど月つき日ひ星ほしの

靈線たましひの絲いとに動うごくともせず

天あまの川かは南みなみゆ北きたに大空おほぞらを

くぎりて清きよき眞鶴まなづるの國くに

美味素うましもとの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

玉藻山玉たまもやまたまの泉いづみゆおちたぎつ

千條ちすぢの瀧たきの水みづはあまきも

地ちの上うへの總すべてのものを露しほして

育はぐくみ守まもれ千條ちすぢの瀧たき水みづ

神かみがみ々の食くひて生いくべき稻種いなだねは

この川かは水みづに育はぐくまるなり

天あめの狭さ田だ長なが田たに注そそぐ大瀧おほたきの

川かはの清しみづ水の味あぢはひよきかも

言こと靈たまの水い火きこもらずば眞ま清しみづ水みづも

あまき味あぢはひ備そなはらざらむを

天あめ地つちの總すべてのものら美味素うましもとの

神かみの守まもりの味あぢはひもてるも

神かみがみ々の魂たましひ線しんまで味あぢはひを

授さづけて守まもる美味素うましもとの神かみよ

川かはの邊べに鳴なく鈴すず蟲むしの聲こゑさへも

味あぢはひうましく耳みみに響ひびけり

おちくだつ千條ちすぢの瀧たきの響ひびさへ

耳みみなぐさむる味あじはひなりけり

いざさらば岐美きみよ召めしませ駒こまの背せに

吾われは御供みともに仕つかへまつらむ

斯かく歌うたひ終をはり給たまへば、太元おほもとあきつを顯津男をの神かみは、

美味素神うましもとかみの言葉ことばの味あじはひに

我われは進すすまむ駒こまに鞭むちうちて

と宣のたまらせつつ、馬背こまのせに跨またがり、五色ごしきの絹きぬもて造つくりたる御手綱みたづなを左手ゆんでにもたせ、右手めでに玉鞭たまむちを打うち振ふりながら、駒こまに翳かざせる鈴すずの音ねもさやさやに、神跡みあとなき若草原わかくさばらを進すすませ給たまへば、宇禮志穂うれしほの神かみは案内あないの爲ためと御前みまへに立たち、三柱神みはしらがみは御後みしりへに従したがひまつり、湯氣ゆげ立ち昇のほる大野原おほのがはらを、西にしへ西にしへと進すすませ給たまふぞ勇いさましき。

(昭和八・一一・二九 舊一〇・一二 於水明閣 加藤明子謹録)

第一八章 神の道行（一九一二）

宇禮志穗の神は馬上豊に、  
顯津男の神の御前に立ちて進ませながら、  
御歌詠ませ給ふ。

☐ 紫微天界の中にして

うまらに委曲に固まりし

眞鶴國の尊さよ

顯津男の神出でまして

未だ地稚き國原を

生言靈の幸ひに

造らせ固めなし給ひ

國魂神と定まりし

千代鶴姫の命まで

生うみ落おとしまし漸やう々やうに  
玉たま藻もの山やまを立たち出いでて  
黒くろ雲くもふさがる常とこ闇やみの  
西にし方しかたの國くに土に生うまさむと  
出いでます今いまの旅たび立だちを  
送おくる吾われこそ樂たのしけれ  
天てん地ちに黒くろ雲くもふさがりて  
行ゆく方へもわかぬ西にし方しかたの  
國くに土に曲まが神かみ五さ月ば蠅へなし  
萬よろづの災わざはひ日ひに月つきに  
起おこると聞きけば主すの神かみは  
瑞みづの御み靈たまを遣つかはして  
堅かき磐は常とき磐はの天あま津つく國くにを  
開ひらかせ給たまふぞ尊たふとけれ

道の隈手も恙なく  
萬里の駒に跨りて  
胡砂吹く風をあびながら  
縹渺千里の荒野原  
右左に鳴く蟲の  
音もさやさやに草の根に  
響き渡りて肝向ふ  
心は勇み駒勇み  
出で立つ今日ぞ樂しけれ  
嗚呼惟神々々  
美波志比古神は今何處  
岐美のみゆきを守らむと  
先に立たせる功績は  
今目の前見えにつつ

岐美がみゆきの道芝は

彌固まりて駿馬の

蹄を運ぶあらがねの

地を進むも安けかり

嗚呼惟神々々

恩頼の幸ひて

今日の御空に雲もなく

吹き來る風もなごやかに

吾等が面をなでて行く

げに天國の旅立と

思へば樂し吾は今

日南の河の河岸に

岐美を送りて進むなり

岐美を送りて進むなり



顯津男の神は暫し駒を止めて、來し方を顧み給ひつつ、遠く霞める玉藻山を仰ぎて、御歌詠ませ給ふ。

☞ 振返り眺むる空に玉藻山は

紫雲の衣着てかすめり

紫の雲のとばりを引き廻し

玉野の比女は宮仕へまさむ

眞鶴の山遠みつつ見えねども

生代の比女は安くいまさむ

わが道の隈手も恙なかりけり

主の大神の守らす恵に

仰ぎ見れば行手遙けし西方の

國土の御空に黒雲立つも

日々竝べて神生みの神業に仕へ行く

我われはせはしき御み靈たまなるかも

醜しこ神がみの醜しこの災わざはひ免めがれつつ

我われは今日けふまで進すすみ來こしはや

今いまとなりて高たか日の宮みやに仕つかへます

八や柱しら神がみの俣しのばれにける

東とう南なんの空そらを眺ながめて八や柱しらの

比ひ女め神がみわれを俣しのぶなるらむ

一ひと日ひだも御み靈たま安やすむるいとまなく

旅たびに立たつ身みは苦くるしかりけり

國く土にを生うみ神がみを生うまむと出いでて來こし

我われは世よの味あぢつぶさに覺さとりぬ

宇う禮れ志し穗ほの神がみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 瑞御靈神の功を今更に

さとりにけるかな大野の旅路に

四方八方に雲立ちのぼり月も日も

かくろひし國土を照らし行く岐美よ

百鳥の聲は千歳をうたひつつ

八千草の根に蟲鳴き渡る

若草の萌ゆる大野を進み行く

岐美の行手に幸あれと思ふ

もうもうと霧立ち昇る國原を

照らして出でます岐美の旅はも

仰ぎ見れば眼くらまむ顯津男の

神より出づる貴の光は

御空行く大鳥小鳥悉く

岐美の御後に従ひ奉るも

幾千萬の鶴は翼を揃へつつ

岐美がみゆきを送りて舞へるも

大空は明らみにけり眞鶴の

數多の翼白く光りて

魂機張の神は御歌詠ませ給ふ。

駒止めて四方の國形眺むれば

目路の限りは雲界なりけり

雲界の中に漂ふ心地して

岐美の御後に従ひ行くも

雲の浪立ち騒ぎつつ岐美が行く

西方の國土は遙けくもあるか

眞鶴は千歳をうたひ駿馬は

萬世よろづよいなく今日けふの旅たびなり

岐美きみが生命いのち幾億かきはときは萬年すゑの末すゑまでも

國土くに守まもるべく保たもたせ給たまへ

たまきはる神かみは守まもらむ瑞御靈みづみたまの

生命いのちを永久とほに若返わかがへらせつつ

若返わかがへり若返わかがへりつつ幾億萬世よろづよの

岐美きみは神國みくにの柱はしらとならせよ

行先ゆくさきに八頭やつがしら八尾やつをの大蛇神をろちがみ

岐美きみが出いでまし迎むかへまちつつ

この大蛇をろち幾山脈いくやまなみに跨またがりて

怪あやしき水火いきを四方よもに放はなてる

西方にしかたの國土くにを曇くもらす大蛇神をろちがみの

水火いき被はらはむは言靈ことたまの幸さちなり

わが力ちから如何いかで及およばむ大蛇神をろちがみの

怪あやしき水い火きに立たち向むひなば

わが岐き美みの生いく言こと靈たまの御み水い火きには

醜しこの大を蛇ろちも服まつ従ろひ奉まつらむ

日ひ南なた河がを前まへに控ひかへて醜しこの大を蛇ろちは

山やまの姿すがたと化なりて待またなむ

山やまと化なり河かはとも化なりて醜しこ神がみは

岐き美みのみゆきを艱なやめむとすも

如い何かならむ事ことのありともたまきはる

岐き美みの生いのち命ちは永と久はに落おさじ

果はてしなき神み業わざに仕つかふる岐き美みなれば

醜しこの大を蛇ろちももの數かずかは

結むす比び合あの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

久方ひさかたの御空みそらは高たかし地廣つちひろし

この中國なかくにを行ゆきます岐美きみはも

仰あふぎ見みれば玉藻たまもの山やまは雲くもの上へに

その頂上いただきをかがやかし居をり

玉藻山たまもやま傾斜面なぞへに一處ひとところ黒くろき影かげの

走はしるは雲くものうつれるなるらむ

ちぎれ雲くもちぎれぬ雲くものはざまより

玉藻たまもの山やまの肌はだは見みゆるも

玉藻山たまもやまの貴うづの姿すがたはくづれつつ

遠とほく來きにけり大野おほのが原はらを

立たち迷まよふ霧雲きりぐもの野のを照てらしつつ

出いでます岐美きみの御稜威みづは高たかし

玉藻山たまもやま立たち出いで給たまひしわが岐美きみは

光ひかりますます強つよまりにけり

かくの如<sup>ごと</sup>畏<sup>かしこ</sup>き岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>と知<sup>し</sup>らずして

吾<sup>われ</sup>は光<sup>ひかり</sup>に包<sup>つつ</sup>まれにけむ

今<sup>いま</sup>となりてわが目<sup>め</sup>覺<sup>さ</sup>めしか瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の

強<sup>つよ</sup>き光<sup>ひかり</sup>を仰<sup>あふ</sup>ぎぬるかな

行<sup>ゆく</sup>先<sup>さき</sup>に八<sup>や</sup>岐<sup>また</sup>の大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>すむと聞<sup>き</sup>きて

わが魂<sup>たましひ</sup>線<sup>せん</sup>は立<sup>た</sup>ち勇<sup>いさ</sup>むなり

わが岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>の光<sup>ひかり</sup>にて

服<sup>まろ</sup>従<sup>つ</sup>ひ奉<sup>まつ</sup>らむ醜<sup>しこ</sup>の大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>は

山<sup>やま</sup>となり又<sup>また</sup>河<sup>かは</sup>となり雲<sup>くも</sup>となりて

道<sup>みち</sup>にさやらむ醜<sup>しこ</sup>の大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>は

心<sup>こころ</sup>して行<sup>ゆく</sup>きませわが岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>山<sup>やま</sup>も河<sup>かは</sup>も

醜<sup>しこ</sup>の大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>の化<sup>け</sup>身<sup>しん</sup>なりせば

行<sup>ゆく</sup>先<sup>さき</sup>を醜<sup>しこ</sup>の大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>はいろいろに

身<sup>み</sup>を變<sup>へん</sup>じつつさやらむとすも



河も沼も木草も悉言問ひて

世を亂さむとするぞゆゆしき

五月蠅なす醜神等の雄猛びを

被ふは岐美の言靈あるのみ

いすくはし生言靈の御光に

この地の上の曲津は亡びむ

天界は言靈の國よ意志の國よ

想念の國よ果のなき國土

意志想念曇りて醜の醜神は

生れ出づると聞くぞ恐ろし

掛巻も畏き皇大神の

水火の光を力ともがな

主の神の依さしの儘に旅立たす

岐美の行手に功あれかし

八柱やはしらの女神めがみを宮みやに残のこし置おきて

御子みこ生うみに立たたすヒーローの岐美きみよ  
㊦

美味素うましもとの神かみは馬上ばじやうゆたか豊よに御歌詠みうたよませ給たまふ。  
㊦

㊦ 駒止こまとめて岐美きみと休やすらふ大野原おほのはらに

吹ふき渡わたる風かぜも言靈ことたまの水い火きよ

心地こちよくわが面おもを吹ふく科戸邊しなどべの

風かぜは正まさしく神かみの水い火きなり

八千草やちぐさの蔭かげに潜ひそみて鳴なく蟲むしの

聲こゑも残のこらず言靈ことたまの水い火きなり

岐美きみが功慕いさをしたひて玉藻たまもの山鶴やまづるは

翼揃つばひぞろへて見送みおくり來きたるも

何處どことなく白梅しらうめ香かりさやさやに

音楽響く岐美の旅立ち

玉藻山西吹く風に梅櫻

清き花辨舞ひ来るかも

久方の雲井の上にも梅咲くか

岐美の頭上に花びらの散る

心地よく澄みきらひたる大空の

したびを伊行く吾ぞ楽しき

書月の光は御空に白々と

圓き姿を浮べ給へり

書ながら彼方此方の大空に

輝き初めぬ大なる星は

駒止めてゆるゆる憩ひ玉へかし

この行先に曲津の待てれば

曲神を言向け和す言靈の

水火を固めて用意せむかな

地稚き八雲立ちたつ國原は

醜の魔神の棲所なりけり

月も日も照男の神の治めます

西方の國土は未だ地稚し

地稚き西方の國土の彼方此方に

湧き立つ雲は魔神を隠せる

日南河越ゆれば最早西方の

曲津の棲む國常闇の國土よ

いざさらば轡を竝べて進むべし

岐美の光に包まれにつつ

顯津男の神は駒に鞭うち、宇禮志穗の神を後方に廻らせ、眞先に進ませながら、  
御歌詠ませ給ふ。

☐ 國魂くにたまがみ生うむ我われなれば御供みともがみ神

如何いかで頼たよらむ獨神ひとりすす進すすまばや

大勢おほぜいの力ちからを借からむをぢなさを

恥はぢらひ我われは前さきに進すすまむ

我われは只ただ一人ひとり進すすまむ百神ももがみよ

心こころに任まかせて従したがふもよし

言靈ことたまの水い火きの力ちからを學まなぶべく

従したがひ來くるも我われさまたげじ

森羅もろもろ萬象ばんざうは言靈ことたまの水い火きに生うまれたる

思おもへば何なにかわれ恐れおそれめや

我われも亦また言靈ことたまの水い火きを照てらしつつ

醜しこの曲靈まがひを言向ことむけ和やはさむ

濁にごりたる數かずの言靈ことたま放はなつより

良よき言靈ことたまのひと一つつよが強つよし

襖みそぎして清きよめ澄すませし言こと靈たまに

我われは和なごめむ醜しこの魔ま神がみを

百もも神がみの厚あつき心こころは思おもひやれど

我あは國くに土に生うみよ一人ひとり進すすまむ  
□

斯かく歌うたひ終をはり、駒こまの蹄ひづめの音おとカツカツと嘶いななき高たかく勇いさましく、鈴すずの音ねもさやさやに、

若わか草ぐさもゆる大おほ野の原がはらを前さきに立たたせ進すすませ給たまふ。四よ柱はしらの神かみは恐おそる恐おそる御み後あと方はたに從したがひな

がら續つづかせ給たまふ。

宇う禮れ志し穗ほの神かみの御み歌うた。

□ 知しらず識しらず心こころ傲おごりてわが岐き美みの

前さきに立たちたる心こころを悔くゆるも

愚おろかなる吾われにもあるか吾わが岐き美みの

光ひかりも知しらず前さきに立たちける

百神もろがみの言靈ことたまよりもわが岐美きみの

生言靈いくことたまは輝かがやくものを

言靈ことたまの水い火き完またからずして吾われは今いま

御前みさきに仕つかへし愚おろかさを悔くゆ

眞鶴まなづるの國くには廣ひろけし言靈ことたまの

水い火きを清きよめて仕つかへ奉まつらばや

わが岐美きみの尊たふとき光ひかりみながらに

氣き付づかざりしよ愚おろかなる吾われは

山やまも野のも木き草ぐさもすべて言靈ことたまの

水い火きに生うまると始はじめて覺さとりぬ

千代ちよつる鶴ひめ姫みこと命も岐美きみの清きよらけき

水い火きに生あれますを思おもへば畏かしこし

わが岐美きみの生うませ給たまひし眞鶴まなづるの

國く土にを汚けがすと思おもへば恐おそろし

わが御魂濁らひあれば言靈の

水火も曇りてはづかしきかも

今日よりは袂の神事を勵みつつ

心みがきて言靈生かさむ

魂機張の神の御歌。

思ひきや瑞の御靈のわが岐美は

水火の光の神にますとは

わが岐美の雄健び言葉聞きしより

わが魂線はをのきにけり

天地の神の御用に仕へしと

誇り居たりし心の恥づかし

天地の神の御用に使はれ居ながらも



知らず識らずに心傲りぬ

主の神の恵によりて朝夕を

神に仕ふるわが身なりしよ

果しなき生命の種を抱へつつ

言靈の岐美を覺らざりける

永久の生命保ちて瑞御靈

國魂生まさむ萬世までも

恥づかしく吾なりにけり知らず識らず

心傲りて光を忘れし

結比合の神の御歌。

𠄎  
駒の背に跨り御供に仕へ行く

今日のわが身は樂しかりけり

天も地も澄みきらひたる國原を

鶴に送られ蟲に迎へられつ

眞鶴の幾千萬の翼に送られて

國土生みの供に仕ふる嬉しさ

わが爲を思はず國の御爲に

盡すは善とわれは思へり

わが爲を思ひて國を次にする

心は正しく悪なりにけり

善惡の差別を立てて今日よりは

神の御供につかへ奉らむ

よしやよし荒野の果に倒るとも

神國の爲には厭はざるべし

國土を生み御子生みませるわが岐美の

御供に仕ふるは清き御魂なるべきを

わが魂はひたに曇れば言靈の

水火も濁りて恥づかしきかも

わが岐美の神宣なれば今日よりは

曲津に向ひて言靈宣らじ

美味素の神の御歌。

天地の中に抱かれ進み行く

岐美の御供は畏かりけり

西方の國土ははるけし八雲立つ

雲井の空も濁らひて居り

曇りたる西方の國土を照らします

岐美の功の大きさを思ふ

わが岐美は言靈神にましましぬ

出で行く先に輝き給へば  
天地の水火を合せて進み行く  
岐美の旅路にさやる神なし

神々は各自述懐歌をうたひながら、果しも知らぬ大野原を、  
顯津男の神の御後方に従ひ心いそいそ進ませ給ふぞ畏けれ。

(昭和八・一一・二九 舊一〇・一二 於水明閣 森良仁謹録)

第一九章 日南河(一九一三)

ロシアの俚言に、お伽噺は作り事にして、傳説は實際あつた事なりと言つてゐるのは、要するに傳説の確實性を言つたものである。わが唱ふる物語は、お伽噺でもなく、傳説でもなく、傳奇物語でもなく、確實なる言靈學上より見たる史詩

である。傳説とは後世の人々の口に傳はり、其の事實が次第々々に誇張され、又は濃厚の度を重ねて面白く出来上つてゐるが、この「靈界物語」は何人にも傳はつたものでなく、只單に天地に充滿せる水火の妙用原理にもとづき、宇宙創造の状態より、諸般の事象に就いて説示したるものである。

この物語を著すに就いては、日夜神界の樞機に參じ、宇宙萬有發生の歴史的事實に到るまで開示したるものなれば、現代學者の耳目には怪しく思はるるは當然である。

未だ見ざる、聞かざる、傳はらざる幽玄微妙の宇宙の物語にして、有史以前の事象なれば、何人も善惡の批判を加ふる餘地はなかるべし。萬々一この物語に對して、批判を加ふる者あらば、そは迂愚の骨頂にして、論議すべき價値なきものである。

惟神的道德上の義務に服し、天界に奉仕し、自己を制して自己以外に寛大なる神人は、其實際に於て精神上的の自由を有し、一切萬事公共の爲、何一つ成らざるはなきものである。之に反し、惟神的道德上の義務を省みず、自己の欲望にのみ

執着し、自己に寛大に、他に對して殘忍である所の神人は、其の實運命の手に縛られてゐるのである。

天之峰火夫の神の、皇神として君臨し給ふ紫微天界は、未だ靈と言靈の世界にして、形あるものは氣體の凝れるもののみなれば、一に意志想念の世界と稱しても他なき事である。故に善良なる意志想念は、善良なる神人の姿を現じ、醜惡なる意志想念は、最も醜惡なる形を現するも、自然の理である。八岐の大蛇神あり、十二の頭を持つ鬼神あり、半鬼あり、大山を懷に包みて提げ歩く如き巨大なる神あり、山の姿を爲し、河の形を爲し、岩石の形を現する神等數多あるも、意志想念の現する姿なのである。我説くところの物語も、種々の神、動物の現るる事あれども、決して怪しむに足らずと知るべし。

顯津男の神は、七日七夜の旅を重ねて、濁流滔々と漲る、幅廣き水底深き日南河の南岸に着かせ給ひけるが、この時早くも天津日の神は三十度の位置に昇らせ給ひ、晁々と輝き渡りて、日南河の速瀨の波を、金銀色に彩らせ給ひける。顯津男の神は、日南河の岸邊に駒を下り立ち、激流を眺めて御歌詠ませ給ふ。

日け竝ならべてあらの荒野はらが原を渡わたり來きつ

日ひ南なたの河かはの岸きし邊へにつ着つきぬ

滔たう々たうと流ながる水みづの波なみ頭がしらに

かおほがやくひ太陽こがねの黄金いろ色はも

日ひ南なた河かは黄金こがね白しろ銀がね紫らさきの

波なみを交まじへて永と遠はに流ながる

目め路ぢはるか彼かな方たの岸きしに霞かすめるは

大を蛇ろちのすめるスウヤトやまゴルの山た

スウヤトやまゴルの山たに立たちたつ黒くろ雲くもは

曲まが神みの水い火きか天あめをにごせる

駿はや馬こまは嘶いなき勇いめど日ひ南なた河かは

流ながれを渡わたる術すべもなきかな

さりことながらたまわが言ひ靈かりに光ひかりあれば

この河かは水みづも暫しばしは引ひかむ

日け竝ならべて晝ちう夜のや旅たびをつづけつつ

諸も神がみも亦またつかれけるかな

駿はや馬こまの脚あしを休やすめて今いま暫しばし

河かは水みづ引ひかむ時ときを待またむか

足あし引びきの山やまはあなたに霞かすみをり

燃もゆるが如ごとく雲くも立たち昇のぼる

眞ま鶴なづるの國くにの廣ひろ原はら渡わたり越こえて

今いまや進すすまむ西にし方かたの國くに土にへ

河かは中なかに波なみせき止とめて聳そびえ立たてる

巖いはほは曲まがの化け身しんなるらむ

いざさらばわが言こと靈たまに拂はらはばや

醜しこの大を蛇ろちの化け身しんの巖いはほ。



ひとふたみよいつむゆななやこのたり  
一二三四五六七八九十

ももちよろづちよろづ  
百千萬千萬の

いくことたま  
生言靈の神々は

ここに天降りて醜神の

御魂をきたため給へかし

くに  
國土を生み御子生みの旅にさやりある

まがかみ  
この曲神は主の神の

みわざ  
神業にそむく醜大蛇

まも  
守らせ給へ神々よ

みづ  
瑞の御靈の言靈に

まごころ  
眞心こめて願ぎ奉る

かむながらかむながら  
ああ惟神々々

みたま  
御靈の幸を給へかし

斯く歌ひ給へば、激流をせき止めて、峙ちし千引の巨巖は、忽ち水中に沈むよ  
と見る間に、巨大なる蛇體となりて、北側の岸邊にかけ上り、忽ち暴風雨を起し、  
黒雲に乗り、一目散に逃げゆきぬ。

この巨巖の怪物退きしより、河水は次第々々にその量を減じ、時ならずして向  
つ岸邊に渡り得る所まで引きたれば、ここに顯津男の神はひらりと駒に跨り、河  
に向つて御歌詠ませ給ふ。

主の神の生言靈の助けにて

わが宣る水火は輝きしはや

曲神は千引の巖と身を變じ

わが行く道にさやりゐしかも

わが目路のとどかぬ迄にいや廣き

河の流れもあせにけらしな

言靈の水火の光の尊さを

今更ながら悟らひしはや

この先は曲津のすさぶ醜の國土よ

心そそぎてわれは進まむ

四柱の神勇ましくわが後を

守りて此處に送り來ませり

四柱の神よこれより歸りませ

眞鶴國土を開かむために

いざさらば別れて行かむ西方の

國土は眞近に迫りけらしな

ここに宇禮志穗の神は、顯津男の神の乗らせる神馬の轡に手をかけ乍ら、御歌  
詠ませ給ふ。

『ヒーローの岐美とは知れど斯くまでも

光ひかりますとは思おもはざりしよ

吾われは今いま岐美きみに別わかれむ苦くるしさに

空そらにしられぬ雨あめぞ降ふるなり

いざさらばまめにおはして國くに土に生うみの

神業みわざうままららに仕つかへませ岐美きみよ

いや廣ひろき日南ひなたの河かはの河水かはみづも

岐美きみの言葉ことばにあせにけらしなな

魂機張たまきはるの神かみは、別わかれの御歌詠みうたよませ給たまふ。

卍  
八や十そ日か日ひを岐美きみに仕つかへて今いま此處ここに

別わかる思おもへばさみしかりけり

恙つつがなく道みちの隈手くまでを渡わたり來きて

光ひかりの岐美きみに別わかれむとすも

眞鶴まなづるの翼つばさそろへて送りける

この河岸かはぎしは國くにの境さかひよ

わが岐美きみの生言靈いくことたまに醜神しこがみの

巖いはは碎くだけて河かはあせにける

斯かくの如ごと水火いの光ひかりを満みたせまず

岐美きみの行ゆく先さき思おもはるかな

果はてしなき思おもひ抱いだきて玉藻山たまもやま

眞鶴山まなづるやまに吾等われらは歸かへらむ

遠見とほみ男をとこの神かみに仕つかへて今日けふよりは

神國みくに守まもらむ安やすく思おもほせよ

結比合むすびあはせの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

はろばろと岐美きみを送おくりて今いま此處こに

別わかると思おもへば何なにか悲かなしき

愛あい善ぜんの國くにに悲かなしみなけれども

今いまは涙なみだの止とめどなきかも

嬉うれしさに又また悲かなしさに迸ほとばしる

わが目めの涙なみだいぶかしきかも

スウヤトゴル山やまにひそめる曲まが神かみを

言こと向むけ和やはすと出いでます岐き美みはも

山やまも河かはも巖いはもことごと醜しこ神がみの

化け身しんなりせば心こころし行ゆきませ

この河かはは高たか照てる山やまの溪たに々だにゆ

流ながると思おもへば尊たふとかりけり

日ひ南なた河が見はるにつけても思おもふかな

如ゆ衣くえの比ひ女め神がみ神かむさ去さりし日ひをひ

美味素の神の御歌。

高照の山より落つる日南河の

水はあせけり生言靈に

河底の岩むら見えて水浅み

大き小さき魚族はねをり

魚族も神の水火より生れたる

御魂なりせばおろそかならじ

いざさらば岐美に別れむ眞鶴の

國治むべく後にかへさむ

さりながら向つ岸邊に着かすまで

われは佇み見とどけ奉らむ

顯津男の神は諸神に答へて御歌詠ませ給ふ。

種々の悩みしのぎてわが旅を

送りし功うれしみ思ふ

玉野比女生代比女神その外の

神につたへよわが河越を

ここに顯津男の神は諸神に別れを告げ、馬背に鞭を加へ、水あせし河底を悠々として、またたく間に彼方の岸に上らせ給ひければ、四柱神は安堵の胸を撫で下し、ひらりと駒に跨り、元來し道をたどりたどり、兩聖地をさして急がせ給ひける。

(昭和八・一一・二九 舊一〇・一二 於水明閣 谷前清子謹録)

第二〇章 岸邊の出迎(一)(一九一四)



スウヤトゴルは、聖なる山の義である。ここに天地の邪氣凝り固まりて、十二頭の大蛇神となりけるが、忽ち姿を變じ、スウヤトゴルの連峰となりて、日南河の西北方に高く聳え、邪氣を日夜發生して、紫微天界の一部を曇らせ、數多の神々をなやませて居たのである。スウヤトゴルは偽名にして、その實は大曲津見の神、八十曲津見の神の惡靈が割據してゐるのである。

顯津男の神は、西方の國土を拓かむとして、先づ第一に惡神の化身なるスウヤトゴルを歸順せしめむと、日南河を北岸に打ち渡り給へば、ここに照男の神は内津豊日の神、大道知男の神、宇志波岐の神、白造男の神、内容居の神、初産靈の神、愛見男の神の七柱を從へて出で迎へ給ひ、別れて程經し挨拶を述べ終り、その御健在を祝しつつ御歌詠ませ給ふ。

照男の神の御歌。

☐ 氣永くも待ちわびにける顯津男の

神は來ませりわが守る國土に

西方にしきたの國土くには曲神まががみ塞ふさがりて

日ひに夜よに邪氣じやきを吹ふきまくるなり

如何いかにしてこの曲神まががみををさめむと

心こころを千々ちぢに碎くだきけるはや

顯津男あきつをの神かみの出いでます今日けふよりは

西方にしきたの國土くにの月日つきひ冴さゆらむ

時ときじくに黒雲くろくも起おこし雨降あめふらせ

風吹かぜき荒すさぶスウヤトゴルやまの山

スウヤトゴルやまの山ときは時ときじく黒煙くろけむり

吐はきて四方よも八方やもに邪氣じやきを散ちらすも

草くさも木きも木の實みも五穀たなつものさへも

この邪氣じやきのため伊竦いすくみにけり

育そだつべきものも育そだたず日ひに月つきに

しをれ行くゆかなスウヤトゴルくもの雲くもに

言こと靈たまの光ひかりの岐き美みにめぐり會あひて

わが雄をし心ころの高た鳴かなりやまずも

高たか照てるの山やまより落おつる日ひ南なた河がの

水みづも濁にごりぬ曲まが津つ見みの邪じ氣やきに

神かみ々がみの生いの命ちを奪うばひ草くさや木きの

生おひたちまでも虐しげしはや

この上うへは言こと靈たまの水い火きの光ひかりにて

スウヤトゴルを退しけたまはれ  
』

顯あ津きつ男をの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

月つきも日ひも照てる男をの神かみの功い績さをしに

西にし方かたの國くに土には明あか

我われは今いま眞ま鶴つるの國くに土にを造つくりをへて

日南の河を渡りつるかも

西方の國土の有様知らねども

汝の案内に進まむとぞおもふ

照男神心安かれ主の神の

生言靈を受けし我あれば

如何ならむ醜の曲津見猛ぶとも

われには諸の備へありせば

日南河渡りしばかりの我なれば

西方國の状はわからず

照男の神は再び御歌もて答へ給ふ。

力なきわれ恥づかしも言靈の

水火の濁れば曲津見は猛ぶ

スウヤトゴルの清き神山に身を變じ

大曲津見は國土を亂しつ

朝夕に曲津見の吹く水火の色は

黒雲となりて四方を包めり

われは今七柱の神從へて

岐美がみゆきを迎へまつりぬ

七柱神の神言はウの聲の

生言靈ゆ生れし神ぞや

主の神の神言畏みウ聲より

七柱の神は生れましにけり

七柱神を率ゐてわれは今

岐美がみゆきを迎へまつりぬ

ここに七柱の神の一柱、内津豊日の神は御歌もて壽ぎ給ふ。

久方ひさかたの高地たかちほ秀よの山やまゆ下くだりましし

岐美きみを初はじめて拜をろがみけるはや

言靈ことたまの光ひかりの岐美きみに今いまあひて

心こころ明あかるくなりいにけらしな

國くに土つちを生うみ御み子こを生うまさむ瑞御靈みづみたまの

神業みわざたふとみ待まち迎むかへゐし

月つきも日ひも照てる男をとこの神かみの御供みともして

日南ひなたの河かはに立たち向むかひける

日南ひなた河水がみづは俄にはかに清きよみけり

岐美きみの御水みい火ひの光ひかりにふれて

瑞御靈みづみたま現あられませしたまゆらに

わが魂線たましひはひろごりにけり

かくの如尊ごとたふとき光ひかりの神かみますとは

夢ゆめに現うつつに思おもはざりしを

われこそは内津豊日の神なるよ

守らせ給へ言靈の水火に

今日よりは岐美の御尾前を守りつつ

國土生みの業に仕へまつらむ

美波志比古の神は先つ日現れまして

スウヤトゴルに登りましける

美波志比古神の便りは絶えにけり

大曲津見にとらはれ給ひしか

ともかくも神の心に任せつつ

吉日良辰待たむと思ふも

大道知男の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ われは今照男の神の御供して

光ひかりの岐美きみを迎むかへけるかな

月つきも日ひも照男てるをの神かみの功績いさをしに

大曲津見おほまがつみの禍わざはひ少すくなき

さりながらこの稚わかき國土くに廣ひろき空そら

一柱神ひとしらがみの如何いかに堪たふべき

國津神くにつかみは岐美きみの出いでまし待まちにつつ

空そらを仰あふぎて歎なげきぬしはや

畏かしこくも光ひかりの岐美きみの出いでましに

河水かはみづさへも澄すみきらひたり

曲津見まがつみは山河やまかはと化なり巖いはと化なりて

神々等かみがみたちを惑まどはせてをり

スウヤトゴル山やまの姿すがたは清きよけれど

表面うはべを飾かざる曲津まがつのたくみよ

美うつくしき山やまの姿すがたとなりながら



日ひに夜よに邪氣じやくきを吐はき散ちらすなり

西方にししかたの國土くにはよしあし茂しげらひて

神かみの住すむべき所ところ少すくなき

スウヤトゴルの山やまの裾野すそのに住すむ神かみは

何時いつも魔神まがみの餌食えじきとなれり

折々をりをりは八十曲津見やそまがつみは河中かはなかの

巖いはほとなりて堰せき止とめにけり

瑞御靈光みづみたまひかりの岐美きみの言靈ことたまに

曲津見まがつみの巖いはは碎くだかれしはや

曲津見まがつみの醜しこの猛たけびの強つよければ

野邊のべの木草きぐさもことごとしなへり

今日けふよりは岐美きみの御尾前みをさきに仕つかへつつ

西方にししかたの國土くにの邪氣じやくきを拂はらはむ

ありがたく尊たふとくおもふ西方にししかたの

國くに土にに天あ降もりし瑞みづの御み靈たまを

駿はやこま馬いななの嘶いななきにさへも四よ方も八や方もを

ふたぎし雲くもは散ちり初そめにけり

永とこしへ久ひかりの光ひかりに満みてる岐き美みゆゑに

醜しこの黒くろくも雲ち散ちり初そめにけり

今け日ふよりは天あま津つ御み空そらの日ひも月つきも

光ひかりさやけく照てらしますらむ

宇う志し波は岐ぎの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ 吾われこそは稚わか國くに原はらを宇う志し波は岐ぎの

神かみなりながら力ちから足たらずも

待まち待まちし光ひかりの神かみのいでましに

山やま河かは一いち度どに晴はれ渡わたりつつ

ひさかた 久方の天津高宮あとにして

ひかり 光の岐美は此處に來ませり

とこやみ 常闇の西方の國土を照らさむと

い 出でます岐美の姿雄々しも

かみ ヒーローの神いまさずば西方の

くに 國の曲津見は歸順はざるべし

やくも 八雲立つ出雲八重雲重なりて

つきひ 月日もたしに拜めざる國土

つきひ 月と日の光をさへぎる曲津見の

いき 水火かたまりて黒雲となりぬ

つきつき 次々に湧き立つ雲の天に満ちて

くにはら この國原の水火をそこなふ

すみ 主の神のウ聲に生れ出でしわれも

ちからた 力足らずてもてあましつつ

かく四柱神は、顯津男の神の御降臨を喜び給ひて、壽ぎ歌を詠ませつつ、天に向ひて合掌禮拜久しくし給ふぞ畏けれ。

折しもあれや、天地も割るるばかりの雷鳴轟き、稻妻走り、大雨沛然として臻り、みるみる日南河は濁流漲り、岸を呑み、河底の巨巖を鞠の如くに下流に流し初めにける。

(昭和八・一一・二九 舊一〇・一二 於水明閣 林彌生謹録)

## 第二章 岸邊の出迎(二) (一九一五)

顯津男の神はこの光景を打ち眺め、莞爾として愉快げに御歌詠ませ給ふ。

風も吹け雨も降れ降れ雷も轟けわれは樂しみて見む

雷いかづちは天あめにとどろき稻妻いなづまは

闇やみを裂さきつつひた走はしるかも

日ひ南河濁水みなたくすゐみなぎり河底かはそこの

巖いはほは下手しもてにころがり落おつるも

曲津見まがつみは力ちからの限かぎりを現あらはして

われ威嚇おどさむと雄猛をたけるらしも

曲神まがかみよ力ちからの限かぎりをわが爲ために

猛たけびて見みせよ地割つちわるるまで

かくのごと兒戯じぎに等ひとしき雄猛をたけびを

何か恐おそれむ光ひかりのわれは

面白おもしろき雄猛をたけび見るもスウヤトゴルの

山やまよりおろす雨風あめかぜいかづち

言靈ことたまの幸さちはふ國くに土によ曲津見まがつみの

雄猛をたけび強つよくもわれは恐おそれじ

茲こゝに白うす造つくり男りの神かみは、瑞みづの御み靈たまの不ふ退たい轉てんの態たい度どにいたく驚おどろきつつ、御み歌うた詠よませ給たまふ。

曲まが神かみの雄を猛たけび強つよき河かはの邊へに

立たたせる岐き美みの大おほらかなるも

岐き美みこそは紫たか微あま天ま界はらの中なかにして

國く土に生うみませるヒーローの神かみよ

スウヤトゴルの山やまの曲まが津つ見み今いまここに

力ちからの限かぎり雄を猛たけびけるかも

國くに津つか神かみはこの雄を猛たけびになやめども

光ひかりの岐き美みは動うごきたまはず

河かは水みづはいやつぎつぎに澄すみきらひ

河かは底ぞこまでもすきとほりけり

日ひ南なた河が水はの底そこひの小さ魚なのかげ

見えわくるまで澄みきらひたり

曲津見の神の雄猛びも束の間の

河水濁せしばかりなりけり

もろもろの鳴物入りの曲津見の

業も忽ち消え失せにける

瑞御靈光の岐美の現れましし

西方の國土はいよよ榮えむ

西方の國の司の照男神も

大曲津見になやみ給ひぬ

山となり巖となりて曲津見は

西方の國土を曇らせ行くなり

朝夕を雲に包まれ西方の

稚き國原は月日だもなし

今日よりは光の岐美の現れませば

御空の月日も輝き給はむ  
上と下の白を造りて神々の

食物の種磨くわれなり

左より右にめぐりて五穀の

荒皮をはぎ神にまゐらす

天の狭田長田に生ひし稲種も

實らずなりぬ曲津見の水火に

今日よりは天地清くひらけなむ

光の神の出でましぬれば

内容居の神は御歌詠ませ給ふ。

☐  
われは今照男の神の御供して  
瑞の御靈を迎へむと來し



幾萬里山野を越えて出でましし

光の岐美を雄々しく思ふ

國土を生み國魂神を生ましつ

萬里の旅に立たす岐美はも

西方の國土は曲津見はびこりて

草木も萌えず稻種みのらず

神々のなげきの聲は西方の

國土の天地をとざしてやまず

曲津見は十二の頭を持ちながら

時折風雨をおこして荒ぶも

曲津見の荒ぶ度毎神々は

邪氣に打たれて倒るる悲しさ

朝夕に禊の神事をいそしみて

われは漸く生命保てり

えんえんと天てんに冲ちゆうする黒雲くろくもは

みな曲津見まがつみの水みづ火かなりにけり

愛善あいぜんの國くににもかかる曲津見まがつみの

潛ひそみあるとは知しらざりにけり

力ちからなき吾われにはあれど村肝むらきもの

心こころをきよめ言靈ことたまきよめむ

駿馬はやこまの嘶いななきさへも清すがすが々がし

光ひかりの岐美きみの出いでませしより

日けなら竝ならべて曇くもり重かさなる西方にしかたの

國土くにの行末ゆくすゑ案あんじつつるし

かくのごと光ひかりの神かみの現あれまさば

西方にしかたの國土くにに望のぞみわきけり』

初産靈はつむすびの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

言靈の光の岐美の現れますと

聞きしゆわれはいさみ迎へぬ

眞鶴の國土を固めて瑞御靈

今西方の國土に來ますも

嬉しさの限りなるかも惱みてし

國土を救ふと神現れませる

生れませる神悉く亡びゆく

西方の國土を悲しみしはや

曲津見の大蛇の邪氣に襲はれて

神も草木も萎れつ亡びつ

亡びなき天津神國の中ながら

醜の猛びは防ぐよしなし

ヒーローの神現れましぬ光り満てる

神現れましぬ目出度き今日を

月つきも日ひも御空みそらの雲くもに包つつまれて

今日けふまで亂みだれし西方にしかたの國くに土に

スウヤトゴルの清きよき山脈やまなみの頂上いただきゆ

折々をりをりはな放はなつ邪氣じやきはうれたき

高照たかてるの山やまより落おつる日南河ひなたがはの

清瀨きよせにたちてわれ楔みそぎせむ

一日ひとひだも楔みそぎの神事わぎを怠をこたらば

曲津まがつ見忽みたちまちわれを襲おそふも

國津神くにつかみは朝夕あさゆふ日南ひなたの河波かはなみに

楔みそぎをはげみて息いきつきて居ゐし

今日けふよりは西方にしかたの國くに土にの大空おほぞらに

月日つきひも清きよく照てり渡わたるらむ

仰あふぎ見みれば雲くものはざまゆ天津陽あまつひの

光かげはさしけり河かはのおもてに

天津陽の輝く日こそなかりけり

岐美河岸に立たせし日までは

國津神は御空に輝く天津陽の

光を始めて拜みけるかも

西方の國土に集る曲津見の

水火重なりて黒雲となりぬ

黒雲を晴らさむよしもなかりけり

生言靈の力足らねば

愛見男の神は御歌詠ませ給ふ。

待ち待ちて今日のよき日にあひにけり

この河岸に岐美を迎へて

スウヤトゴルの山の姿は麗しく

はき出す水火は天を包めり

萬丈の黒煙はきて大空の

月日を包みし雲の憎かり

今日よりは曲津見の邪氣つぎつぎに

散りて御空は清くなるべし

朝夕を袂の神事に仕へつつ

岐美の出でまし久しく待ち居し

男の神に黙禮しつつ、御歌詠ませ給ふ。  
かかる所へ、美波志比古の神は駒に鞭うち、しづしづと此場に現れ給ひ、顯津

わが岐美の旅に先立ち出でて來し

われは神業をあやまりしはや

御供に仕ふべき身を知らず識らず

心傲りて先き立ちしかも

何事もおもひにまかせず苦しみぬ

岐美より先に出でにし罪かも

みゆきある道の隈手をみはしかくると

出でにし吾は夢となりける

美波志比古の神にはあれど瑞御靈

御許しなくば何事も成らず

今となりてわが愚しき心根を

つくづく思へば恥づかしきかな

瑞御靈ゆるさせ給へ今日よりは

神言のままに動きまつらむ

曲津見の神の輩下に捕へられ

われは今日まで苦しみにけり

瑞御靈ここに渡らせし功績に

曲津まがつの神かみはわれを許ゆるせり

曲津見まがつみの神かみはいろいろ手向てむかひの

わざととのへて岐美きみを待まち居をり

心こころして進すすませ給たまへ曲津見まがつみは

光ひかりの岐美きみを亡ほろぼさむとすも

八尋殿やひろどの數多あまた竝ならべて曲津見まがつみは

岐美屠きみはぶらむと待まちかまへ居ゐるも

曲津見まがつみの喉下のどもとに入りて漸やうやくに

虎口ここうを遁のがれ歸かへり來こしはや

表おもてむき曲津まがつの神かみに使つかはれつ

暫しばしの間あひだをたすかりて居ゐし

ここに美波志比古みはしひこの神かみは、わが身みの職掌しよくしやうを尊そん重ちようするあまり、瑞みづの御靈みたまのみゆきに  
先さきき立ち、渡わたり難がたき難なん所にみはしを架かけ渡わたし、御便ごべん宜ぎを計はからむとして先さきに立たち



出で給ひしが、瑞の御靈の御許しなかりし爲に、一切萬事齟齬を生じ、一も取らず二も取らず、遂には曲津見の神の謀計の罠に陥りて、生命さへも危くなりけるが、早速の頓智に曲津見の神に媚びへつらひ、今まで虎口を遁れ居たりしぞ嘆てかりける。

(昭和八・一一・二九 舊一〇・一二 於水明閣 白石恵子謹録)

## 第二章 清淨潔白(一九一六)

圓満にして靈肉の合致したる顯津男の神は、禮儀に富み、慈愛に富み、風雅の道に富み給へば、到る處物に接し事に感じて、御歌詠ませ給へり。顯津男の神は今や日南河を渡り、惡魔のはびこれる西方の國土を造り固めむとして神心を惱ませ給ひ、高地秀の宮にまします八柱の比女神や、八十比女神の身の上を追懐し、しばし悲歎の涙にくれ給ひつつ、御歌詠ませ給ふ。

☞ 若草わかぐさの妻つまをやもめに生あれし子こを

父ててなしとするわが旅たび淋さびしき

空くう閨けいに泣なく妻つまの身みをおもひやり

我われは日ひに夜よに血ちを吐はくおもひすも

國くに魂たまの御み子こを生うめども永とこ久しへに

あひみることのかなはぬ父ちちなり

斯かくの如ごと苦くるしき神み業わざに仕つかふるも

世よのため道みちのためなればなり

スウヤトゴルの峰みねは遙はろかの野のの奥おくに

よこたはりつつ邪じ氣やきを吐はくなり

今いまよりは心こころの駒こまを立て直なほし

スウヤトゴルの曲ま津が言こと向むけむ

國く土に生うみと御み子こ生うみの神わ業わざに仕つかへ來きて

わが身みはいたく疲つかれたりけり

この疲れ休めむとする暇もなく

また立ち向ふ曲津のすみかへ

巖となり山河となりて曲神は

わが行く先きにさやらむとすも

澄み渡る日南の河に楔して

いざや進まむ曲津の在所に

茲こゝに顯津男あきつをの神かみは、日南河ひなたがはの流れながに下り立ちたて楔みそぎの神事わざを修し給たまへば、八柱やはしらの神々かみがみも吾後われおくれじと速瀨はやせに飛び込みこ、浮きつ沈みつ天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうしながら、楔みそぎの神事わざを修し給たまひける。

顯津男あきつをの神かみはじめ八柱神やはしらがみは、漸く岸邊きしべに立ち上りあが「わが心地清々こちすがすがしくなりし」と宣のらせ給たまひて心静こころづかに御歌詠みうたよませ給たまふ。

顯津男あきつをの神かみの御歌みうた。

高照たかてるの山やまより落おつる河水かはみづに

心こころすがしく禊みそぎせしはや

氣魂からたまにかかれる罪つみや穢けがれまで

洗あらひおとしぬ速河はやかはの瀬せに

水底みなそこをかい潛くぐりつつ氣魂からたまの

汚けがれを全またくはらひし清すがしさ

村肝むらきもの心こころ清すがしも眞清ましみづ水の

流ながれに禊みそぎをはりしわれは

水底みなそこも明あかるきまでに光ひかりたり

わが氣魂からたまの清きよらかにして

かくの如ごと光ひかりかがやく氣魂からたまを

八十やそ比ひ女のめ前まへに見みせたくぞ思おもふ

我われながら驚おどろきにけり何時いつの間まにか

わが氣魂からたまは光ひかりとなれる

身も靈も光り輝き水底の

魚族までも歡ぎつどひ來

我こそは生言靈の幸ひて

光の神となりにけらしな

眺むればわが身は骨まで透き徹り

まさしく瑞の御靈となりぬ

水晶の如くに骨まで透き徹る

わが身は少しの曇りだになき

斯の如光となりし我なれば

伊行かむ道に夜はなからむ

天傳ふ月の光もかくまでに

光らざるべし照れるわが身よ

四方山の百花千花にいや増して

美しきかなわが氣魂は

美波志比古の神は御歌詠ませ給ふ。

わが岐美の後に従ひ速河の

瀬々の流れに禊せしはや

わが魂は大曲津見の水火うけて

墨の如くに穢れりたりき

河水の色變るまで氣魂の

垢ながれける禊の神事に

斯の如わが氣魂は清まりぬ

いざや進まむ曲の征途に

村肝の心くもれば忽ちに

曲津見の罨に落さるるなり

肝向ふ心くもりて美波志比古

われは曲津見にかされにけり

斯<sup>か</sup>くの如<sup>ごと</sup>光<sup>ひか</sup>らす岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>を<sup>し</sup>知<sup>ら</sup>ず<sup>し</sup>て

先<sup>さ</sup>行<sup>き</sup>し<sup>ゆ</sup>われの愚<sup>おろ</sup>さを<sup>か</sup>悔<sup>く</sup>ゆ

日<sup>ひ</sup>南<sup>なた</sup>河<sup>が</sup>に御<sup>み</sup>橋<sup>はし</sup>か<sup>け</sup>むと進<sup>すす</sup>み<sup>き</sup>來<sup>き</sup>て

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>の巢<sup>す</sup>に迷<sup>まよ</sup>ひ<sup>い</sup>り<sup>け</sup>り

雄<sup>を</sup>健<sup>たけ</sup>びの楔<sup>みそ</sup>の神<sup>わ</sup>事<sup>ざ</sup>に<sup>わ</sup>が神<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>

眞<sup>ま</sup>清<sup>しみ</sup>水<sup>みづ</sup>のごと清<sup>きよ</sup>まりに<sup>け</sup>り

内<sup>うち</sup>津<sup>つ</sup>豊<sup>ゆた</sup>日<sup>ひ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>迎<sup>むか</sup>へ奉<sup>まつ</sup>ると此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に<sup>き</sup>來<sup>き</sup>て

楔<sup>みそ</sup>の神<sup>わ</sup>事<sup>ざ</sup>に<sup>つ</sup>かへ<sup>け</sup>る<sup>か</sup>も

身<sup>み</sup>も魂<sup>たま</sup>も清<sup>すが</sup>しく<sup>な</sup>り<sup>ぬ</sup>今<sup>いま</sup>より<sup>は</sup>

岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>に<sup>つ</sup>かへ<sup>て</sup>雄<sup>を</sup>健<sup>たけ</sup>び<sup>せ</sup>む<sup>と</sup>す

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>の御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>を<sup>ふ</sup>さ<sup>ぐ</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>な</sup>か<sup>に</sup>

光ひかりの神かみは現あれましにけり

顯あきつ津男をの神かみの御み靈たまの御み光ひかりに

わが氣からたま魂は清きよまりにけり

氣からたま魂も神みたま魂も神かみの御み光ひかりに

けがれなきまでに照てり渡わたりつつ

内うち津つ豐ゆたひ日ひの神かみの御み名なまで負おひながら

心こころのくもり晴はれざりにけり

わが岐き美みに從したがひ流ながれに禊みそぎして

はじめて内うち津つ豐ゆたひ日ひとなりぬる

曲まが津つ見みの所ところ得え顔がほにすさび居ゐる

西にし方かたの國くに土に今け日ふより生うまれむ

非とき時じくに黒くろ雲くも湧わき立たつ西にし方かたの

國くに土に照てらさばや禊みそぎを重かさねて

スウヤトゴル峰みねの曲まが津つ見みは荒すさぶとも



今いまはおそれじ岐き美みましませば

國くに津つ神かみゑらぎ榮さかえむ水晶みづいしの

神かみの光ひかりに照てらされにつつ

草くさも木きも月つき日の御光みかげあびずして

如何いかで繁しげらむ地つち稚わかき國くに土には

高照たかてるの峰みねより落おつる日ひ南河なたがはに

今け日ふをはじめと楔みそぎせしはや

主スの神かみのウ聲こゑに生あれし吾われながら

楔みそぎのたふとささとらざりけり

朝あさ夕ゆふに楔みそぎの神事わぎに仕つかへつつ

西方にしの國かた土くにを生いかさむと思おもふ  
□

大道おほ知みち男しりの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

↵ 大道おほみちを知し男をの神かみの吾われにして

楔みそぎの神事みわざを怠をこたりしかも

惟かむながら神かみのひらきし大道おほみちは

楔みそぎの神事みわざぞ要かなめなりける

楔みそぎしてわが身みわが魂たま清きよまりぬ

醜しこの曲津まがつ見みもはやをかさじ

國くに土をを生うみ御み子こを生うますと出いで給たまふ

瑞みづの御靈みたまは光ひかりなりしはや

仰あふぎ見みるさへもまぶしくなりにけり

瑞みづの御靈みたまの光ひかりの神かみを

斯かくの如ごと光ひかりかがやく生いき神がみの

現あれましし上うへは何なにをなげかむ

日ひに夜よるに嘆なげきつづけし西にし方かたの

國くに津つ神かみ等たちよみがへるべし

吾もまた朝な夕なに大道を

さとしつツなほ禊知らざりき

天界にいともたふとき神業は

禊のわざにしくものはなし

西方の國土の御空を包みたる

雲も禊の神事に散るべし

斯くの如禊の神事の尊さを

吾は今まで覺らざりけり

氣魂も神魂も清くなりけり

速河の瀬に禊せしより

宇志波岐の神は御歌詠ませ給ふ。

このあたり吾はうしはぎゐたりしが

曲津見のため曇らされつつ

惟神禊の神事知らずして

治めむとせし吾の愚さよ

禊して生言靈を宣る身には

醜の曲津見もをかす術なし

今日よりは國津神等に惟神

禊の神事を教へ傳へむ

近山は早くも緑となりにけり

岐美が禊の光の徳に

曲津見は青山となり沼となり

巖となりてひそみ居るかも

久方の天津高宮ゆ降りましし

光の神はここにいますも

くもりたる心抱きて瑞御靈の

光ひかりの前まへにあるは苦しき

山やまに野のに百花ももばな千ち花ばな匂におへども

曲まがのすさびに色いろあせにつつ

蟲むしの音ねも次第しだい々しだいに細ほそりけり

曲まが津つ見みの水い火きに苦くるしめられつつ

今け日ふよりは鳥とりの鳴なく音ねも蟲むしの音ねも

風かぜのひびきも澄すみ渡わたるらむ

迦から陵びん頻が伽とき非じく時うた歌へど西方にしの

國く土にには亡ほろびの響ひびきなりけり

今け日ふよりは迦かり陵よう頻びん伽がの歌うたふ聲こゑも

冴さえに冴さえつつよみがへるべし

天あま渡わたる月つき日ひのかけの見みえわかぬ

西にし方かたの國く土には風かぜの冷ひゆるも

ひえびえと吹ふく山やま風かぜにあふられて

百ももの草木くさきはなかばしをれつ

今日けふよりは草くさの片葉かきはに至いたるまで

岐美きみの光ひかりによみがへるべし

月讀つきよみの恵めぐみの露つゆも今日けふよりは

豊ゆたにくだらむ草木くさきの上うへにも

白造男うすつくりをの神かみは御歌詠みうたよませ給たまふ。

𠮟みそぎすみなそこと水底みなそこくぐり身重みおもさに

おぼれむとして苦くるしみしはや

つぎつぎに袂みそぎの力ちからあらはれて

わが身みは軽かるく澄すみきらひたる

河水かはみづを濁にごして流ながるからたまる氣魂からたまの

垢あかの深ふかさにあきれたりしよ

斯<sup>か</sup>くならば蚤<sup>のみ</sup>や蝨<sup>しらみ</sup>のすみどころ  
消<sup>き</sup>えてあとなき水晶<sup>みづし</sup>の氣魂<sup>みたま</sup>よ  
水晶<sup>みづいし</sup>の如<sup>ごと</sup>くわが魂<sup>たま</sup>わが身<sup>み</sup>まで  
照<sup>て</sup>り輝<sup>かがや</sup>けり楔<sup>みそぎ</sup>終<sup>をは</sup>りて<sup>〇</sup>

内容<sup>うちいるゐ</sup>居<sup>かみ</sup>の神<sup>かみ</sup>は御歌<sup>みうた</sup>詠<sup>よ</sup>ませ給<sup>たま</sup>ふ。

〇  
滔<sup>たうたう</sup>々と流<sup>なが</sup>るる水<sup>みづ</sup>に内容<sup>うちいるゐ</sup>居

神<sup>かみ</sup>の神魂<sup>みたま</sup>は清<sup>きよ</sup>まりにけり

曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>の水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に曇<sup>くも</sup>りし西方<sup>にしかた</sup>の

國<sup>く</sup>土<sup>に</sup>に生<sup>うま</sup>れて吾<sup>われ</sup>くもりけり

河<sup>かは</sup>底<sup>そこ</sup>の砂<sup>じやり</sup>利<sup>り</sup>まで光<sup>ひか</sup>る日<sup>ひ</sup>南<sup>みな</sup>河<sup>かは</sup>の

流<sup>なが</sup>れは清<sup>すが</sup>しも瑞<sup>みづ</sup>の御靈<sup>みたま</sup>か

仰<sup>あふ</sup>ぎ見<sup>み</sup>る瑞<sup>みづ</sup>の御靈<sup>みたま</sup>の顔<sup>かんばんせ</sup>は

月つきの面おもてにまして光ひからすも

月つき讀よみの神かみの御み靈たまと現あれましし

わが岐き美みなれば光ひからすもうべよ

日ひ南なた河が向むかつ岸きし邊へは眞ま鶴なづるの

岐き美みの生うませし光ひかりの國くに土になる

今け日ふよりはおのおのもおのおのもが襍みそして

西にし方かたの國くに土にを照てらさむとおもふ

千ち引び巖いはこれより北きたの大おほ野の原はらに

あちこち立たてるも曲ま津が見つなるべし

わが來きたる道みちにさやりし千ち引び巖いはは

八や十そ曲ま津が見つの化け身しんなりしよ

わが魂たまはくもらひければ曲ま津が見つの

化け身しんの巖いはを知らず來きつるも

かへりみれば千ち引びの巖いはヶ根がわが行ゆかむ



道の行手をのみふさぎたる

わが岐美の教へ給ひし禊の神事に

わが魂線を輝かしゆかむ

禊して岸にのぼれば氣魂も

神魂も軽さ強さを覺ゆる

愛善のこの天界に生れ來て

禊せざれば忽ち曇らむ

神にある吾なりながら惟神

禊の神事をなほざりにせしよ

日南河の清き流れは國津神に

禊をせよと教ふるものを

愚なる吾なりにけり朝夕に

この清流に居向ひながらも

天も地も一度にひらく心地かな

楔みそぎをはりしそのたまゆらは  
醜しこくも雲の四方よもに立たちたつ西方にしかたの  
國く土にはこれより月つき日照ひてるらむ  
』

初はつ産むす靈びの神かみは御み歌うた詠よませ給たまふ。

☐ わが心こころよみがへりたり氣魂からたまも

輕かるくなりたり楔みそぎの神事みわざに

楔みそぎする神事みわざを初はじめて覺さとりけり

百ももの罪つみとが洗あらふ神事みわざと

罪つみけがれ洗あらひ清きよめて吾われは今いま

はじめて産むす靈びの神業かむわざを知しる

楔みそぎすと水底みそこくぐれば大魚おほなを小魚な

わが氣魂からたまをつつきめぐりぬ

氣魂からたまの垢あかをつつくと大魚おほなを小魚な

わが身みまはり邊とを取りと巻まきにけり

苦くるしさをこらへ忍しのびて水底みなそこに

神魂みたまの罪つみを魚うをにとらせり

わが肌はだは眞白ましろくなりぬ魚族うろくづの

垢あかは餌食えじきとなりて失うせぬる

河底かはそこも明あかるきまでに瑞御靈みづみたま

光ひかり給たまひて禊みそぎましける

かくのごと光ひかりの神かみも惟かむながら神

禊みそぎの神事みわざに仕つかへますはや

曇くもりたるわが身みは非時ときじく禊みそぎして

せめて神魂みたまの垢あか洗あらはばや

光ひかりなきわが身みなれども朝夕あさゆふの

禊みそぎに神魂みたま汚さゆるなるらむ』

愛見男の神は御歌詠ませ給ふ。

☐ 日南河水の底ひをくぐりつつ

楔の神事ををさめけるかな

天界の總ての穢れを洗ひ去る

楔の神事ぞ尊かりける

ウの聲の生言靈に生れし吾も

いつの間かは曇らひにける

磨かずば忽ち曇る神魂よと

吾は覺りぬ楔に仕へて

わが眼清しくなりぬ山も河も

今は雄々しく色冴えにけり

わが耳はさとなりけり蟲の音も

楔終りて清しく聞ゆる

わが鼻も透き徹りけむ百花の

薫り清しくなりにけるかも

言靈の水火も清けくなりけり

楔の神事の貴の功に

天も地も清しくなりぬ氣魂と

神魂の垢の洗はれしより

いざさらば光の岐美に従ひて

曲津見のすみかをさして進まむ

神々を言向け和し光明に

満ち足らひたる國土造らばや

大空を包みし八重の黒雲も

散りて失せなむ岐美の光に

西方の國土はこれより輝きて

曲津見の魂もまつるひぬべし

斯く神々は各自禊終り、其の功を讚美し乍ら、顯津男の神の御後に従ひ、柏木の森を目當に、スウヤトゴルの曲津見を征服すべく、意氣揚々と轡を竝べて立ち出で給ふ。

(昭和八・一一・三〇 舊一〇・一三 於水明閣 内崎照代謹録)

## 第二三章 魔の森林(一九一七)

スウヤトゴルに姿を變じて、西方の國土の天地を吾物とし、邪氣に包み居たる大曲津見は、高地秀の宮より降らせ給ふ朝香比女の神を、自ら顯津男の神と稱し迎へ奉りて、御子生みを爲し、西方の國土を完全に占領せむものと、計畫をさささ怠らざりし處へ、眞正の太元顯津男の神の閒近に來り給ひしに驚き、途中にて瑞の御靈一行を全滅せしめむと、部下の邪神等を集めて種々評議の結果、最も狡猾にして性質悪く、嘘つき上手で、自己の利益のみを巧妙に計らふ醜狐を柏木の

森に遣はし、種々の謀計を與へて之に當らしめて居る。此狐を醜女の神といふ。  
醜女の神は柏木の森の手前に姿を隠しながら、顯津男の神の一行の駒の脚許近く、  
微なる聲にて、

右行かば必ず勝たむ  
中行かば必ず負けむ  
左行かば必ず亡びむ  
主の神の教ぞ

と姿を隠して歌つて居る。

顯津男の神は耳敏くも、醜女の神の歌を聞きて微笑みつつ御歌詠ませ給ふ。

醜神の醜の言葉を聞きにけり  
左に行くも我は亡びず

三ツ栗の中津道をば我行かむ

亡びを知らぬ面勝の神は

右行かば勝たむといひし醜の聲は

我を謀る偽り言なり

この森は奥深くしてほの暗し

駒の蹄に踏み破りなむ

右行かば必ず曲津の深き罫に

かかりて百神亡ぶなるべし

いざさらば亡ぶといひし左の道を

駒の蹄にかけて進まむ

この御歌に七柱の供神は稍不安の面持しながら、各自に御歌詠ませ給ふ。  
美波志比古の神の御歌。



☐ スウヤトゴル醜しこの曲津まがつの先走さきばしり

醜女しこめの神かみの謀計たくみなるらむ

美波志比古みはしひこ吾われは進すすまむ瑞御靈みづみたまの

御許みゆるしを得えて左ひだりの道みちを

わが岐美きみの光ひかりを恐おそれてスウヤトゴルは

此處ここに謀計たくみの罫わなを造つくれるか

スウヤトゴル輩てした下に仕つかふる醜狐しこぎつね

この森林しんりんに仇あだすると聞きく

この森もりを拓ひらき渡わたりてスウヤトゴルの

曲津まがつのすみかに進すすまむと思おもふ

兔とも角かくも吾われは御前みさきに仕つかふべし

瑞みづの御靈みたまよ續つづかせ給たまへ

斯かく歌うたひて、左ひだりへ行ゆけば亡ほろぶべしとの曲神まががみの言葉踏ことばふみにじりつつ、奥おくへ奥おくへと

一行八柱は馬上豊に御歌うたひつつ進み給ふ。  
顯津男の神の御歌。

柏木の森は小暗く繁りたれど

我は恐れじ悪魔のすみかも

大空を封じて小暗き柏木の

森を照してわが行かむかな

スウヤトゴル大曲津見の潛みたる

峰は彼方の空に聳えつ

四方八方ゆ怪しき聲の響き來る

われ柏木の森を拓かむ

曲神の勢如何に強くとも

生言靈に拓きすすまむ

愛善の光を四方に照し行く

我<sup>われ</sup>に仇<sup>あだ</sup>する曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>は亡<sup>ほろ</sup>びむ

醜<sup>しこ</sup>神<sup>がみ</sup>の亡<sup>ほろ</sup>ぶといひし森<sup>しん</sup>林<sup>りん</sup>の

左<sup>ひだり</sup>の道<sup>みち</sup>を伊<sup>い</sup>行<sup>ゆ</sup>くは樂<sup>たの</sup>しも

大<sup>おほ</sup>空<sup>そら</sup>の雲<sup>くも</sup>はちぎれて天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>日<sup>ひ</sup>の

光<sup>ひかり</sup>は靜<sup>しづか</sup>にさし初<sup>そ</sup>めにけり

曲<sup>まが</sup>神<sup>がみ</sup>は雲<sup>くも</sup>を起<sup>おこ</sup>して御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>包<sup>つつ</sup>み

月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>の光<sup>か</sup>をさへぎりて居<sup>を</sup>り  
𠄎

内<sup>うち</sup>津<sup>つ</sup>豐<sup>ゆた</sup>日<sup>ひ</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>。

𠄎  
時<sup>とき</sup>じくに怪<sup>あや</sup>しき音<sup>おと</sup>の聞<sup>き</sup>ゆなる

柏<sup>かし</sup>木<sup>はぎ</sup>の森<sup>もり</sup>は曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>のすみかよ

今<sup>いま</sup>とならば何<sup>なに</sup>を恐<sup>おそ</sup>れむ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>

光<sup>ひかり</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の現<sup>あ</sup>れましぬれば

亡<sup>ほろ</sup>びなむと醜<sup>しこめ</sup>女の神<sup>かみ</sup>の叫<sup>さけ</sup>びたる

道<sup>みち</sup>行<sup>ゆ</sup>く吾<sup>われ</sup>は樂<sup>たの</sup>しかりけり

亡<sup>ほろ</sup>ぶべき道<sup>みち</sup>を明<sup>あか</sup>して進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>く

光<sup>ひかり</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の雄<sup>を</sup>々<sup>を</sup>しきるかも

斯<sup>か</sup>くならば如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>なる醜<sup>しこ</sup>のさやるとも

何<sup>なに</sup>か恐<sup>おそ</sup>れむ襍<sup>みそぎ</sup>せし身<sup>み</sup>は

惟<sup>かむながらみそぎはら</sup>神<sup>かみ</sup>襍<sup>みそぎ</sup>被<sup>ひ</sup>しわれなれば

醜<sup>しこ</sup>の犯<sup>をか</sup>さむ術<sup>すべ</sup>なかるべし

わが行<sup>ゆ</sup>かむ道<sup>みち</sup>の隈<sup>くま</sup>手<sup>て</sup>も恙<sup>つつが</sup>なく

守<sup>まも</sup>らせ給<sup>たま</sup>へ皇<sup>すめら</sup>大神<sup>おほかみ</sup>

主<sup>ス</sup>の神<sup>かみ</sup>のウ聲<sup>こゑ</sup>に生<sup>あ</sup>れし吾<sup>われ</sup>にして

醜<sup>しこめ</sup>女の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>に動<sup>うご</sup>くべきやは

地<sup>つち</sup>稚<sup>わか</sup>き西<sup>にし</sup>方<sup>かた</sup>の國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>は彼<sup>あ</sup>方<sup>ち</sup>此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>に

曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>見<sup>み</sup>潛<sup>ひそ</sup>みて仇<sup>あだ</sup>を爲<sup>な</sup>すかな

今日けふよりはこの國原くにはらは天國てんごくと  
新あらたに生あれし聖所すがとなるぞや  
』

大道知男おほみちしりをの神かみの御歌みうた。

☞ 惟神かむながら大道知男おほみちしりをの神かみわれは

左ひだりの道みちに災わざはひなしと思おもふ

右行みぎゆけば災わざはひせむと醜女神しこめがみ

力ちからかぎりに謀たくらみ居ゐるも

この森もりは東西とうざい十里じふり南北なんぼくは

三十八里さんじふはちりの曲津まがのすみかぞ

スウヤトゴル輩てした下の神かみの大方おほかたは

この森林しんりんに潜ひそみ居をるとふ

兔とも角かくも柏木かしはぎの森もりの醜神しこがみを

言向ことむけ和やはせて進すすみませ岐き美み

行ゆけど行ゆけど果はてしも知しらぬ森しんりん林りんの

木こ蔭かげを渡わたる風かぜは冷つめたき

曲まが神かみの水い火き凝こり凝こりて風かぜさへも

わが身みの骨ほねを浸しみ透とほすなり

言こと靈たまの水い火きを照てらしてこの森もりを

駒こまの蹄ひづめに踏ふみにじり行ゆかむ

曲まが神かみの醜しこの謀たくみ計あは飽あくまでも

深ふかくあれども底そこ力ちからなし

表うは面へのみ強つよく見みゆれど曲まが神かみは

生いく言こと靈たまにあひて消きゆるも

言こと靈たまの幸さちはふ國くによ言こと靈たまの

天あま照てる國くによ恐おそれなき國くによ

今け日ふまでは曲まが津つの神かみに襲おそはれしが

今<sup>いま</sup>や真<sup>ま</sup>言<sup>こと</sup>の力<sup>ちから</sup>得<sup>え</sup>にけり  
禊<sup>みそぎ</sup>して清<sup>きよ</sup>まりにけるわが魂<sup>たま</sup>は  
昨<sup>きのふ</sup>日に増<sup>ま</sup>して百<sup>も</sup>倍<sup>へ</sup>強<sup>つよ</sup>きも  
』

宇<sup>う</sup>志<sup>し</sup>波<sup>は</sup>岐<sup>ぎ</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>。

この邊<sup>あた</sup>り宇<sup>う</sup>志<sup>し</sup>波<sup>は</sup>岐<sup>ぎ</sup>居<sup>を</sup>れど柏<sup>かし</sup>木<sup>はぎ</sup>の

森<sup>もり</sup>に足<sup>あし</sup>をば入<sup>い</sup>れし事<sup>こと</sup>なし

今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>までは怪<sup>あや</sup>しの森<sup>もり</sup>と捨<sup>す</sup>て置<sup>お</sup>きし

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>のすみかを踏<sup>ふ</sup>みて破<sup>やぶ</sup>らむ

心<sup>こころ</sup>強<sup>し</sup>くも光<sup>ひかり</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>供<sup>とも</sup>して

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>のこもる森<sup>もり</sup>行<sup>ゆ</sup>く今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>は

スウヤトゴル峰<sup>みね</sup>の魔<sup>ま</sup>神<sup>がみ</sup>もこの森<sup>もり</sup>の

亡<sup>ほろ</sup>びを聞<sup>き</sup>かば忽<sup>たちま</sup>ち消<sup>き</sup>ゆべし

果<sup>はて</sup>しなき小<sup>をぐら</sup>暗<sup>きたな</sup>き穢<sup>きたな</sup>きこの森<sup>もり</sup>は

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>のすみかに應<sup>ふさ</sup>はしきかな

百<sup>も</sup>木<sup>も</sup>々<sup>ぎ</sup>は半<sup>なか</sup>ば枯<sup>か</sup>れつつ各<sup>おの</sup>も各<sup>おの</sup>も

邪<sup>じ</sup>氣<sup>や</sup>吐<sup>は</sup>き出<sup>い</sup>でて世<sup>よ</sup>を汚<sup>け</sup>しつつ

曲<sup>ま</sup>津<sup>が</sup>見<sup>み</sup>の邪<sup>じ</sup>氣<sup>や</sup>の集<sup>あつ</sup>まるこの森<sup>もり</sup>を

生<sup>いく</sup>言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>にきよめひらかむ

この森<sup>もり</sup>に醜<sup>しこ</sup>の狐<sup>きつね</sup>の棲<sup>す</sup>むと聞<sup>き</sup>けば

分<sup>わ</sup>け入<sup>い</sup>りし神<sup>かみ</sup>今<sup>いま</sup>までになし

この森<sup>もり</sup>に迷<sup>まよ</sup>ひ入<sup>い</sup>りたる國<sup>くに</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>は

生<sup>い</sup>きて歸<sup>かへ</sup>りし一<sup>ひと</sup>柱<sup>はしら</sup>もなし

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>に仕<sup>つか</sup>へて進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>く

吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>に邪<sup>じ</sup>氣<sup>や</sup>は襲<sup>おそ</sup>はざりけり

わが駒<sup>こま</sup>は邪<sup>じ</sup>氣<sup>や</sup>の集<sup>あつ</sup>まる森<sup>もり</sup>中<sup>なか</sup>を

いななきながら進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>くかも



顯津男の神の御稜威に驚きて  
醜の曲津は逃げ去りにけむか  
安々と渡り行くかも魔の森の  
茂みを分けて八柱の神は

白造男の神の御歌。

岐美行かば柏木の森は明らけく  
光り初めたり曲津は何處ぞ  
仰ぎ見ればスウヤトゴルの山脈は

いやつぎつぎに遠去りにける

顯津男の神の光に曲津見は  
恐れ山もて逃げ去ると見ゆ

この森は生言靈に縛りあれば

曲津も動かす能はざるべし

醜女神この森林に永遠に

すまひて國土の仇をなしつつ

曲津見の輩下の神は八百萬

この柏木の森にひそめる

曲神の數の限りを言向けて

神の聖所に清めむとぞ思ふ

亡ぶべしと曲津の宣りし左の道は

心安けかり神の光に

月も日も御空の雲を押分けて

柏木の森の上に輝く

輝ける御魂々々を照しつつ

出で行く道に曲津の姿なし

日南河禊の神事の功績に

安く渡らむ柏木の森を

曲神は姿を潜めて静なり

梢を渡る風の音のみにて

迦陵頻伽時を得顔にうたふなり

曲津見の森にも天津日照らひて

百花は露を帯びつつ森蔭に

艶を競ひて咲き出でにける

花蓆敷き竝べたる如くなり

わが行く森の木下蔭の道は

醜神のすまへる森は忽ちに

花匂ひつつ小鳥はうたひつ

蟲の音も小鳥の聲も天國の

春をうたふか冴え渡るなり

斯くの如花咲き満つる柏木の

森もりに曲津まがつのすむと思おもへず

岐美きみが行ゆく道みちの隈くまで手に曲津まがつはなし

花咲はなき匂にほひ鳥とりうたふのみ

眞鶴まなづるの國くにより來きたるか幾千いくせんの

鶴つるは御空みそらに舞まひ初そめにけり

斯かくならばこの魔まの森もりは天國かみくによ

醜女しこめの神かみは逃にげ去さりにけむ

勇いさましき岐美きみの旅たびかも山やまも野のも

木草きぐさの果はてまでよみがへりつつ

幾千いくせんの鶴つるの鳴なく音ねは西方にしかたの

國くに土にの萬世よろづようたふなるらむ

右左道みぎひだりみちを違たがへず進すすみ來こし

今日けふの旅路たびぢは安やすけかりけり

右行みぎゆかば醜女しこめの神かみの謀計たくらみに

落ちて吾はも苦しみにけむ

曲神の謀の裏をかきながら

岐美は雄々しく出でまししはや

吾も亦光の岐美の御恵に

心安けく魔の森を行くも

處々清水湛ふる泉ありて

天津日の影浮べて澄むも

この清水今日が日までも濁らひしを

生言靈に甦りたるよ

斯くならば手に掬ぶとも汚れまじ

長き生命の糧ともならむか

内容居の神の御歌。

月讀つきよみの神かみの御靈みたまに從したがひて

心安しんあんけく魔まの森もりを行ゆくも

大曲津見醜おほまがつみしこのすみかのこの森もりの

岐美きみのみゆきに清きよまりしはや

曲津見まがつみは恐おそれをなしてスウヤトゴルの

山やまもろともに遠去とほびりにける

醜狐しこね數多あまた棲すむてふこの森もりも

月日輝つきひかがやく神園みそのとなりしはや

吹ふく風かぜも清すがしく冴さえて光ひかるなり

木々きぎの梢しすゑは千代ちよささやきつ

大空おほぞらを包つつみし醜しこの黒雲くろくもも

散ちりて跡あとなく月日つきひは照てらふ

斯かくならば未まだ地つち稚わかき西方にしかたの

國土くには榮さかえむ草木くさきは萌もえむ

天津あまつしこめ醜かみ女神は何處いづくの野のの果はてに

逃にげ去さりにけむ姿かげだにもなし

次つぎ々につぎ岐き美みの光ひかりの輝かがやきて

醜しこの魔ま神がみの隠かくれ所がもなし

天あま翔かり地つちを潛くりて逃にぐるとも

如い何かでのがれむ神かみの眼まなこを

西にし方かたの稚わかき國くに原はらにやうやうと

あらはれましぬ光ひかりの岐き美みは

この國くに土には八十やそひめ比が女神がみのいまさずば

殊ことに亂みだれし曲ま津がのすみかよ

曲ま神がみは八十やそひめ比が女神がみのいまさぬを

よき機し會ほとして雄を猛たけび狂くるふも

主スの神かみの依よさし給たまひし八十やそひめ比が女神がみの

神かみの御み稜い威づは國くに土にの鎮しづめよ

この國くに土にに八十やそ比ひ女めの一ひと柱りましまさば

斯かくも曲まが津つは猛たけばざりしを

漸やうやくに光ひかりの神かみの出いでましを

仰あふぎて國くに原はらよみがへりつつ

主スの神かみの神み言こと畏かしこみ國くに原はらを

廻めぐれど曲ま津がは亡ほろびざりける

八や十そ日か日はあれども今日けふの生い日くひこそ

國くに土にの始はじめの吉よき日ひなるかも

濛もう々と黒くろ雲くも立たちて晝ひるもなほ

小を暗くらき國くに土にを照てらし給たまひぬ

わが岐き美みの嚴いづの御み水い火きに大おほ空ぞらを

包つみし雲くもも散ちり失うせにけり

黒くろ雲くもは紫むすの雲くもと變へんじつつ

この國くに原はらはあらたに生うま



八やくも雲た立つくろくも黒雲た立ちたつにしかた西方の

國くに土を照てらしてひか光る岐き美はも

待まち待まちしひかり光の岐き美は現あれましぬ

神かみに祈いのりしいさを功なるらむ

今け日ふよりはくにつかみたちみちび國津神等導きて

禊みそぎの神事わざに世よを生いかすべし

四よ方も八も方はくも雲と霧きりとにつに包まれて

月つき光かけさへも見みぬ國くに土なりけり

仰あふぎ見みればあまつ天津日ひの光かげ月の光かけ

御み空そらの碧あをに輝かがやき給たまひぬ

空そら碧あをく地つちは縁みどりに木き草ぐさ生おひて

生うまれし國くに土は神國みくになるかも

高たか照てるの山やまは東ひがしに聳そびえつつ

紫むらさの雲くもわき立たつがみ見ゆ

今日<sup>けふ</sup>までは高照<sup>たかてる</sup>山の頂上<sup>いただき</sup>も  
雲<sup>くも</sup>に包<sup>つつ</sup>まれ見<sup>み</sup>えずありしよ<sup>〆</sup>

初<sup>はつ</sup>産<sup>むす</sup>靈<sup>び</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>。

駿<sup>はや</sup>馬<sup>こま</sup>の嘶<sup>いなな</sup>き強<sup>つよ</sup>し御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>にも

鶴<sup>つる</sup>の鳴<sup>な</sup>く音<sup>ね</sup>の牙<sup>さ</sup>え渡<sup>わた</sup>る今日<sup>けふ</sup>

この國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>に始<sup>はじ</sup>めて見<sup>み</sup>たる日<sup>じつ</sup>月<sup>げつ</sup>の

光<sup>かげ</sup>のさやけさに吾<sup>わが</sup>魂<sup>たま</sup>生<sup>い</sup>くるも

黒<sup>くろ</sup>雲<sup>くも</sup>に空<sup>そら</sup>は閉<sup>とぎ</sup>され國<sup>くに</sup>津<sup>つ</sup>神<sup>かみ</sup>は

始<sup>はじ</sup>めて拜<sup>をが</sup>む月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>なりけり

眞<sup>まな</sup>鶴<sup>つる</sup>の空<sup>そら</sup>に舞<sup>ま</sup>ひつつ歌<sup>うた</sup>ひつつ

岩<sup>いは</sup>戸<sup>と</sup>開<sup>ひら</sup>けし國<sup>くに</sup>土<sup>に</sup>を祝<sup>いは</sup>ふも

大<sup>おほ</sup>空<sup>ぞら</sup>を十<sup>と</sup>重<sup>へ</sup>に二<sup>は</sup>十<sup>た</sup>重<sup>へ</sup>に包<sup>つつ</sup>みたる

雲くも散ちり行ゆきて御み空そら高たかしも  
碧あを々あをと底そこひも知しらぬ空そらの海うみを

静しづかに渡わたらす月つき舟ふねの影かげ

嬉うれしさは何なにに譬たとへむ百も千ち花ばな

咲さき匂におひたる新あたらしき國くに土にを

山やまに野のに百も花も千ち花ばな咲さき満みちて

吹ふき來くる風かぜも芳かむばしき國くに土にを

愛なる見み男をの神かみの御み歌うた。

天かみ國くにと早はや愛なる見み男をの神かみ柱しらの

國くに土にはさやけく雲くも晴はれにつつ

瑞みづ御み靈たま光ひかりの岐き美みの出いでましに

新あたらしき國くに土に生うま  
れたるかも

スウヤトゴル曲津見潜む山脈は

今を限りに遠ざかりつつ

曲神を言向け和せ西方の

國土の月日を永久に拜まむ

草も木も小鳥も蟲も今日よりは

岐美の御稜威をうたひ奉らむ

有難き日は來りけり瑞御靈

光の岐美の御稜威あふれて

雲霧は四方に立ち立ち風冷えて

木草の生育も乏しき國土なりし

永遠の光の岐美の言靈に

この稚國土はよみがへるべし

西方の國土には八十比女神坐さず

曲津見處得顔に猛びし

待ちわびし光の岐美の國土造り

喜び迎へむ國津神等は

斯く神々は各自生言靈の御歌うたひつつ、曲神の棲めるてふ、柏木の森を何の  
難みもなく突破し、スウヤトゴル山脈さして、駒の轡を竝べ悠然として進み給ふ  
ぞ畏き極みなりけり。

(昭和八・一一・三〇 舊一〇・一三 於水明閣 森良仁謹録)

~~~~~

靈界物語 第七五卷 天祥地瑞 寅の卷

終り